

はいへる也おぼせこ伊勢をうせたるさおもひしこいへるにつきてむしるそなたにあはてきぬんやさはあるへき事ならず
さ也さゆめやは泡の縁語也おもひ河は八雲御抄に筑前さあり思ひさいふものをのつから餘情あるにやうたかたさ心に句を切
へし

思ひやるころはつねに

題しらす

三 統 公 忠

運坂の關にぬきば人に
運の事也心は明なるへし
きねはてやみぬばかりか
消果てやみぬる斗裁さ也
思ひを火にそへて也さは
りある中なれば思ひのし
るしもなく只消果てやむ
斗さ也

思ひやるころはつねにかよへともあふさかのせきこぬすもあるかな
女に遣しける
よみ人しらす
さね果てやみぬはかりか年をへて君をおもひのしるしなれば
返し
おもひたにしるしなしてふ我身こそあはぬなけさのかすはもぬけれ
題しらす

おもひたにしるしなしてふ

題しらす

其方には思ひの火たにし
るしなさいへるに我身
のみこそあはぬ歎きの數
はもゆれさ也是も障によ
り運の歎き也
ほしかてにぬれぬへき哉
よさへもにあふくま河
わがこくとくあひ思ふ人の
いつしかさわかまつ山に
置て化し心の歌に註

ほしかてにぬれぬへきかなから衣かはくたもとのよゝになければ
よさへもにあふくま川のどをければうこなるかけを見ぬらわひしき
わかこくとくあひ思ふ人のなきささきはふかきこゝろもかひなかりけり
いつしかさわかまつ山はイにいまはとてこゆるなる波にぬるゝるてかな
ほしかてにぬれぬへき哉
よさへもにあふくま河 阿武隈河奥州也運さそへたり世さへもに運事遠くなりて影をも見ぬか信じさ也
わがこくとくあひ思ふ人の 心明也
いつかさ待ほきに人の心はかはりて袖のみぬるゝさ也松山の波ぬるさは契りを運事也古今「君を
置て化し心の歌に註

人ことばまことなりけり

女我が戀るさのものとつかはしける女につかはすかゝるへし

人人に戀らるれば下紐のさ
くる事万葉伊勢物語等に
あり人の世にいふ事は誠
なればそなたに戀給ふな
らば下紐のさくへきをさ
つけぬは戀の心しるさ也
むすひなきし我下紐の 是
も前の歌と同心也
ほかの瀬はふかくなるらし
人には深く我には淺くな
るを恨る也古今「世中は
何か常なる飛鳥河さのふ
の淵そけふはせとなる
ふちせさといさやしら波
いつかたを深き遠き共し
らすさましくいひさはか
れて寄方なしさ也

人ことばまことなりけりしたひものどけぬにしるさこゝろとおもへは
むすひをさし我下ひもの今まてにどけぬはひとのこひぬなりけり
ほかの瀬はふかくなるらし飛鳥川さのふのふちうわか身なりける
返し
ふちせさといさやしら波たちさばくわか身ひとつはよるかたもなし
題しらす
ひかりまつ露に心ををける身はさぬかへりつゝ世をうらむらむる
ある所にあふみといひける人のもとにつかはしける

ひかりまつ露に心を 威光ある人

しほみたぬらうみとききはやよゝもに見るめなくして年のへぬらん
あつよしのみこまうてきたりければあはすしてかへして又のあし
たにつかはしける
桂の みの 宇子内親王
宇多皇女

しほみたぬらうみとききはや
水海は海松和布ふきを人を見る事なきにそへてあはて年ふるうれへるなるへし

から衣きてかへりにしさよすからあはれとおもふをうらむらんはた
から衣きてかへりにし 唐衣はきての枕詞也來てもあはて歸給ふを我も哀と思ひあかせしをそなたには又我つらしさや恨
給ふらんさ也敦慶親王と桂宮と寛平の皇子也此御中の事大和の語にもあり忍ひての事なるへけれと末代に至て顯然たりい
まじむへくつしむへし

はいへる也微おまの伊勢をうせたるさおちひしさいへるにつきてむしるそなたにあはてきんやさはあるへき事ならず
さ也きぬめやは泡の縁語也おもひ河は八雲御抄に筑前さあり思ひさいふもなのつから餘情あるにやうたかたさ心に句を切
へし

思ひやるころはつねに

蓮坂の関はぬまは人に
蓮の事也心は明なるへし
きのはて、やみぬばかりか
消果てやみぬる斗哉也
思ひを火にそへて也さは
りある中なれば思ひのし
るしもなく只消果てやむ
斗也也

おもひたにしるしなしてふ

其方には思ひの火たにし
るしなさいへるに我身
のみこそあはぬ歎きの數
はもゆれさ也是も障によ
り蓮の歎き也

ほしかてにぬれぬへき哉

よさにもにあふくま河 阿武隈河奥州也遠きそへたり世さにもに蓮事遠くなりて影をも見ぬか宿しき也

わがことくあひ思ふ人の 心明也

いつしかわがまつ山に 置て化し心の歌に註

題しらす

三 統公忠

思ひやるころはつねにかよへともあふさかのせきこぬすもあるかな
女に遣しける よみ人しらす

さぬ果てやみぬばかりか年をへて君をおもひのしるしなけれは
返し

題しらす

ほしかてにぬれぬへきかなから衣かはくたものよになけれは
よさにもにあふくま河のどをけれはうこなるかけを見ぬるわひしき
わかことくあひ思ふ人のなきときさはふかきこるもかひなかりけり
いつしかどわかまつ山にいまはどてこゆなる波にぬるゝうてかな

ほしかてにぬれぬへき哉 返し

いつかを待ほきに人の心はかはりて袖のみぬるゝ也松山の波起るさは契りを蓮事也古今「君を

人ことはまことなりけり

人に戀るれば下紐のさ

くる事万葉伊勢物語等に

あり人の世にいふ事は誠

なればそなたに戀給ふな

らば下紐のさくへきをなと

二けぬは戀ぬ心しるき也

むすひをさし我下紐の 是

も前の歌と同心也

ほかの瀬はふかくなるらし

人には深く我には淺くな

るを恨る也古今「世中は

何か常なる飛鳥河きのふ

の瀬そけふはせとなる

ふちせさもいさやしら波

いつかたを深き波共し

らすさまよひひきはか

れて寄方なし也

ひかりまつ露に心を 威光ある人を待人に心をかけて敷ならぬ身の歎の歌也露は日を待て消れは也

しほみたぬうみときげはや 水海は海松和布ふきを人を見る事なきにそへてあはて年ふるうれへるなるへし

から衣きてかへりにし 唐衣はきての枕詞也來てもあはて歸給ふを我も哀と思ひあかせしをそなたには又我もつらしき恨

給ふらんさ也敦慶親王桂宮と寛平の皇子也此御中の事大和年語にもあり忍びての事なるへけれと末代に至て顯然たりい

女のもどにつかはしける

我が戀るさいへる女につかはすあるへし

人ことはまことなりけり

したひものどけぬにしるきこゝろとおもへは

むすひをさし我下ひもの今までにとけぬはひとのこひぬなりけり

ほかの瀬はふかくなるらし 飛鳥川きのふのふちらわか身なりける

返し

ふちせさもいさやしら波たちさはくわか身ひとつはよるかたもなし

題しらす

ひかりまつ露に心ををける身はさぬかへりつゝ世をうららひる

ある所にあふみといひける人のもどにつかはしける

貫 之

しほみたぬうみときげはやよにもに見るめなくして年のへぬらん

あつよしのみこまうてきたりければあはすしてかへして又のあし

たにつかはしける 桂のみ 宇子内親王 宇多皇女

から衣きてかへりにし さよすからわはれとおもふをうらむらんはた

ひかりまつ露に心を 威光ある人を待人に心をかけて敷ならぬ身の歎の歌也露は日を待て消れは也

しほみたぬうみときげはや 水海は海松和布ふきを人を見る事なきにそへてあはて年ふるうれへるなるへし

から衣きてかへりにし 唐衣はきての枕詞也來てもあはて歸給ふを我も哀と思ひあかせしをそなたには又我もつらしき恨

給ふらんさ也敦慶親王桂宮と寛平の皇子也此御中の事大和年語にもあり忍びての事なるへけれと末代に至て顯然たりい

影たにも見えすなり行 淺
き心より影たに見せ給は
ぬと恨る心を山井に比し
てよめり万葉采女の淺香
山の歌を本歌なり

あさしてふこさをゆし
ゆしは思々しき心也淺
きといふ事を思て山の井
を細深むるとて水濁て影
みぬ也實に淺き故にあ
らす也

いくたひかいくたの浦に
生田攝津也淺度が行きそ
へたりゆけともかひなく
立歸て活^{ヌク}袖心也
たちかへりぬれてはひぬる
さがは習ひと云事也波に
ぬらすとの給へ生田の
習ひにて珍しけな事も也

あふ事はいと^イ雲のの 蓮事はいと^イ遠く成て各のみ立てやむはかりにやさなげく心を雲は大ならにたつ物なればよせてよ
める也
よそなからやまんとも 今こそ蓮事の絶間ならめ終二はかくてやまじと也

あひまちける人の久しうせうろこなかりければいひつかはしけるイつかはしける

きのめのと陽成院の御乳母

影たにも見えすなりゆく山にしイのゐはあさきより又水やたねにし

返し 平定 文左兵衛佐好風朝臣男

あさしてふこさをゆししみ山の井はほりしにこりにかけは見ぬぬる

題しらす よみ人も
いくたひかいくたの浦にたちかへる波にわか身をうちぬらすらん
かへし

たちのへりぬれてはひぬるしほなればいくたのうらのさがとこ見れ

女のもとに
あふことばいと^イ雲のおほうらにたつ各のみしてやみぬはかりか
返し

よそなからやまんともせずあふ事はいと^イ雲のたねまなるらめ

又おどこ

いまのみとたのむなれどもしら雲のたねまはいつかあらんとすらん
かへし

題しらす

ゆめにたに見る事うなき年をへてこゝろのどかにぬる夜なければ
見そめすてあらまし物をからころもたつ各のみしてきるよなきかな
女のもとにつかはしける

返し

かれはつる花のこゝろはつらからととさすきにける身イタをう恨むる

返し

あたにこそちると見ると見ると君にみならつろひにける花のこゝろを
そのほどにかへりこんどて物信濃に行しなるへしにまのりける人のほどをすくしてこ
さりければつかはしける

こんどいひし月日を過すをは捨の山のはつらさものにうありける
見初すともあるへき物をさせめつる皆衣の縁にてよめる也
かれはつる花の心はつらからて 人の我にかれ果るも我時過し故なれば枯る人より身を恨む也實を添て也
あたにこそちると見る 我心は君にうつるふを只あたにちると思ふらんはうたてしと也心のあたるを陳したる歌なるへし
こんどいひし月日を 姨捨山信濃也その程歸こんどいひし人の歸らて月日過れば恨む心也おは捨の捨の字心あるが

いまのみとたのむなれども

前の歌にいまこそ雲のと

いへるをうけてかやうに

あはぬは今のみさ頼むな

れさいつか我妻執の雲の

絶間ある遠瀬はあらんそ

こなるへし

をやみせず雨さへふれば

雲の絶間あらん事はさて

なきをやまぬ雨さへふれ

は澤水もまさらんさいひ

て蓮事はあらて泪のみま

さらん事を云也

ゆめにたに見る事をなき

心長閑には心しつかに也

みそめすてあらまし物を

名のみ立て我身にふる

事もなき人ならば初より

見初すともあるへき物をさ

月日をわがそへけるかな
君は月日をも覺て歸る
へき敷をかうへ給けるよ
我は戀しさの敷もしらぬ
身なるさ也月日をも覺
えず永居せしさいふに戀
しき事の敷しらぬ心をそ
へてよめる也

このめはる春の山田を 今
年をたに待くらせさいひ
しとき春はあふへしさいお
もひてしほし思ひの休ま
りにし春も猶つねなけれ
は思ひやみにし人を打返
し又戀るさ也このめはる
春の山田をばうち返しの
枕詞也

ころをへてあひみぬ 月比
へて逢みぬは白玉なりし涙の春に成て血涙なるさ也
人こふるなみたは春を 我もをなし心にえあはぬ歎きをよめり思ひを火にそへて也心はあきらか也
源頼 二條家タノム 六條家ヨルとよめり
つらしさといかうらみん 我なつらしともいかてかうらみ給はん君もわかやさちかくなまつればし給はてさいはんきて郭
公にうへてよめる也

かへし

月日をもかうへけるかな君こふるかすをもしらぬわか身なりけり
女に年をへて心さしあるよしをのたまひわたりけるを女猶ことし
をたに待くらせとたのめけるをうのとしも暮てあくる春までいと
つれなく侍りければ

このめはる春の山田をうちかへしおもひやみにしひとうこひしき
心さしありなからぬあはす侍ける女のもとにつかはしける
贈太政大臣 院左大臣時平贈正一位昭
宣公男延喜九年四月四日薨

ころをへてあひみぬときははしらたまのなみたもはるはいろまさりけり
かへし
人こふるなみたははるるぬるみけるたへぬ思のわかすなるへし
おとこのこゝかしこにかよひすむ所おほくてつねにしもとばさり
ければ女も又いろこのみなる名立けるをうらみ侍ける返事に

源頼のむかひすめ

かへし

あつよしのみこ二品式部卿玉
光宮宇多皇子
さごことになきころわたればとくさすすみかされためぬさみたつぬとて
ぬがたかるへき女をおもひかけてつかはしける
春道つらき

かすならぬみやまかくれのはとくさすひとしれぬねをなきつゝそふる
いとしのひたる女にあひかたらひて後人めにつゝみて又あひかた
く侍りければ
これたゝのみこ

あふことのかたいとろとはしりなからたまのをはかりなによりけん
女のもとよりわすれ草に文をつけてをこせて侍りければ
よみ人しらす

おもふとはいふものからにともすればわするゝ草の花にやはあらぬ
かへし
たいふのこといふ人

あふことのかたいとそこは
玉の緒はしほしの事也か
くしほしはかりならは一
向あはてもあるへきに迷
事かたき人さば知なから
こばしばかりは何によりそひけんさ也かた糸玉の緒よるなき皆縁語也
おもふとはいふ物からに 思ふさばいはれなからともすれば忘れ給ふ君ならずやこの心なるへし
うへて見る我は忘れて 菫草を植れば恋を忘るさへき我は忘すじてあた人にまづわすらるゝさ也

浦わかす見るめかるてふ
定文を蟹に比して也
かしこに人を見る人の何
に離波へしもゆくも也
蟹の海松和布かるにそへ
て也

さみをおもふふかさ 津の
國の堀江は離波のほりぬ
也仁徳天皇の御時ほらる
る也君を思ふ心の深さを
堀江さくらへんきて離波
に行我也さいふ心也我に
やはあらぬとほ我にてな
きか我也云也

いかてかく心一つをふた
しへは八雲抄云二様也盛
案うくさつらくさニツ也
さもすれば玉にくらへし
爲家抄云玉をはめてたき物にいへはほむる事に云なり女を鏡にそへよめるさなりす鏡とは白銅鏡さかけり奥義云人の
たからさは女のこころ人につぎにければよめるにや
いはせ山たにのした水 磐瀬川大和也水沼を見ぬ間添て也忍ひて戀る心也人の見ざる間には啼つゝふるさいふ心を流れて
さ云也

平定文かもとよりなにはのかたへなんまかるといひをくりて侍り
ければ 土 左
浦わかす見るめかるてふあまの身はなにかなにはのかたへしもゆく
かへし 定 文
さみをおもふふかさくらへにつの國のほり江見にゆく我にやはあらぬ
つらくなりにける人につかはしける

伊 勢
いかてかく心ひとつをふたしへにうくもつらくもなしてみすらん
題しらす よみ人も
さもすれば玉にくらへしますかみひとのたかど元るそかなしき
しのひたる人につかはしける

いはせ山たにのした水うちしのひ人の見ぬまはなかれてるふる

うれしけにきみかたのた

のめしは契し也始め我た
め嬉しきやうに契りたの
め給ひし詞は籠にくみた
る水のこさく跡かたもな
しこの心也かたみは籠也
ゆきつらぬ夢ちにまさふ

餘案抄云夢の中なれば天
津雲なき露やなくとよめ
り愚案一條禪閣愚見抄云
露は雲より降物なるに夢
路になく露なれば天津雲
なきと也云々泪の心也
身ははやくならの都と身
の古されたるに戀しき事
の又年へたると也

すみよしのさしの白波 序歌也夜には逢もせてよそめに斗見るか悲きさ也
きみこふさねれにし袖の 思の外に隔たる中さ成て戀る袖のかはかぬさ也思ひを火にそへて外にあればかはかぬさよめる也
あはさりしさいかなりし 一たび逢てのちばしはしの間逢見ぬもこたへかたき故其一向逢さりし以前はいかなりし物にて
かく今はおほゆるそ也
世の中にしのふるこひの 世間にて忍戀の倍しさいふ事はかく逢て後人めを思ひて逢ぬ倍しき故と也
戀なのみつねにするか 富士の根を音にそへたり

人をあひしりてのち久しうせうろこもつかはさうりければ

うれしけにきみかたのめし言の葉はかたみにくめる水にそ有ける
題しらす

ゆきつらぬ夢ちにまどふたもとにはあまつらなき露をさける
身ははやくならのみやこと成にしをこひしきことのもたもふりぬる
すみよしのさしの白波よるくはあまのようめに見るうかなしき
さみこふとねれにし袖のかはかぬはおもひのはかにあればなりけり
あはさりしさいかなりし物とてかたいまのまも見ねはこひしき
世の中にしのふるこひのわひしきはあひてのちにあはぬなりけり
戀をのみつねにするかのやまなればふしのねにのみなかぬ日はなし

きみによりわか身をつらき
 玉たれの御簾也^{ミズ}不見とそ
 へて也我か見し故の戀お
 れは我身をつらき也
 いまそしるあがぬわかれの
 童蒙抄云ひぢきは泥ない
 へは戀路とそへたり爲家
 抄云道のあしき心也
 よそにふる雨とこそきけ
 我をこひちにぬるには
 あらしよその人ゆへなら
 んとの心なるへし
 たえはつる物とはみつゝ
 我に絶果る人とは見つゝ
 も猶少かゝれるを頼むか
 心細き也蜘蛛の糸の絶ぬ
 へき細さながら猶されは
 なれぬ心也

うちわたしななき心は 袖中抄云三河ニ八橋云所有橋の八有也くもてさば橋の柱に強からん料にすちかへて打たる木をは
 くもて云に又蜘蛛云虫の手は八あれは丸れを八橋といふにそへて蜘蛛に思ふも讀也惡業をやくさまく思ふ心は絶ま
 しき也也橋の打わたして長き心を我心の長きにそへてよめる上句也

きみによりわか身をつらき玉たれの見すはこひしとおもはましやは
 男のはしめて女のもとにまかりてあしたに雨のふるにかへりてつ
 かはしける

いまうしるあかぬわかれのあかつきはさみをこひちにぬるゝものとは
 返し

よろにふる雨とこそきけおほつかななにをかひとのこひちといふらん
 つらかりけるおとこに

たえはつる物とは見つゝさゝかにのいとをたのめるこゝろほろさよ
 返し

うちわたしななき心はやつはしのくもてにおもふ事はたえせし
 おもふ人侍ける女に物のたふびけれとつれなかりければつかはし
 ける

おもふ人おもはぬひとのねもふひととおもはさりなん思ひしるへく
 返し

こからしの森の下くさかせはやみひとのなけきはおひるひにけり
 おとこのこと女むかふるを見て親の家にまかりかへるとて

わかれをばかなしき物とさゝしかどうしるやすくもおもほゆるかな
 題しらす

なきたむるたもとこはれるけさみればこゝろどけても君をおもはず
 身をわけてあらまほしくおもほゆるひととくるしといひけるものを

雲のにて人をこひしとおもふかなわれはあしへのたつならなくに
 人につかはしける

源 等 朝 臣
中納言兼男参議
 右大辨六條家トイ
 ノフミヨ

おもふ人おもはぬ人の
 くおもふ人を思はてつれ
 なき人のおもはるゝ人も
 又おもはずあれかしつれ
 なきはさき物と思ひ知る
 へき物をこの心也
 こからしの森の下草 木枯
 森駿河也風はやみさは伊
 勢物語にわかぬる山の風
 早み也とよめる詞にて女
 にこゝ男ある事をよめり
 下草を女の身に比して我
 をしほる人あれは我も御
 心にしたかひかたき歎き
 をしそなたにもなけきの
 生そふと見えたるそき也森に木の生そふにそへて也
 わかれをばかなしき物也 日比は別は悲しき物と聞しかさ此度の我別ればうき人にもそはず 成徳 夫もこと人にそひて一人
 もれましければ心安き也後安きは心安き儀也
 なきたむるたもとこ 秋氷れるは泪也氷ると云ふより心とけても思はず也疑ふ心なるへし
 身をわけてあらまほしく 爲家抄云兩方を思ふ心也惡業思ふ人二人にかよふ人を苦しさいふを我は身を分けて兩方に通は
 まほしき也
 雲のにて人を戀しと 雲の遙に隔居て也

あさちふのなのしのはら
 玄旨云序歌也淺ちふの小
 野名所にあらず歌の心は
 忍へとも／＼あまりてと
 云心也わか心に忍ふさな
 らはなと心にあまりては
 戀しきそと也なさかの字
 に心を付て見るへし

雨やまぬ軒の玉水 敷しち
 すさいは入序ながら雨中
 の徒然に猶こひまさる心
 にや

いせの海にはへてもあまる
 序歌ながら長き心はかの
 たく繩より我そまさらん
 さくらふる心有重聚抄云
 たくなはとは綱の手繩を云也日本紀云千尋持繩をもつて百八十結にして云々
 いろに出て戀すてふ 涙の紅の色にければ色に出て戀する名立ん也
 かくこふるものとしりせば なからへてかゝる戀せんよりとくはかなくふるへかりし物をとの心也
 あひも見すなけきも 逢の已前逢見ぬ歎もし初ぬ時はさ也下句は心明也しかは哉也
 こひのことわりなき 如戀也つむつれつはまつはれしたしむ心也源氏繪巻にうれしきまほしてむつれ聞え給云々歌
 の心はあはれなきより且はしたしまれ且は戀しきかわりなきとの心也

あさちふのなのしのはらしのふれどあまりてなどかひとのこひしき

兼 盛イ兼覽王

雨やまぬ軒のたま水かすしらすこひしきことのまさるころかな
未さけぬこ也

こゝろみしかきやうにきこゆる人也といひければ
 よみひとしらす

いせの海にはへてもあまるたく繩のなかきこゝろはわれるまされる
 人につかはしける

いろに出て戀すてふ名う立ぬへきなみたにうむる袖のこければ
いよはにをきて
 かくこふるものとしりせばよるは置てあくればさゆるつゆならましを
 あひも見すなけきもゆめす有し時おもふこところ身になかりしか
 こひのことわりなき物はなかりけりかつむつれつゝかつる戀しき

女のもとにつかはしける

わたつらみにふかき心のなかりせばなにかはさみをうらみしもせん
 みなかみにいのるかひなくなみた川うきても人をよりに見るかな
 かへし

いのりけるみなかみさへうらめしきけふよりほかにかけの見えねは
 大輔に遣しける 右 大臣

いろふかくうめしたもとのいどしくなみたにさへもこさまさるかな
 題しらす よみひと

見るときはこころもなくみぬ時はこどありかはにこひしきやなを
 おどこのこんどてこさうりければ

山さどのまきの板戸もさゝさりきたのめし人をまちしよひより
 はしめて女のもとにつかはしける

ゆくかたもなくせられたる山水のいはまほしくもおもほゆるかな

わたつらみにふかき心の
 薄若の如くに深さと也浦
 見を恨にそへて也
 みなかみにいのるかひなく
 水上を神にうへて断るか
 ひもなく我物ともせて只
 泪にのみ浮ぬる心也
 いのりけるみなかみさへそ
 我を思ふさならは日比に
 も可達なけふより外の影
 をも見ればさ也上句は心
 明也
 いろふかくうめし袂の心
 明也血涙の心也
 見るときはこころも 見
 る時は何のしるしもなく
 人は難面て見ぬ時は何そ
 するしの有かほに戀しき
 はいかなる事そさ也
 山さどのまきの板戸も
 んさ頼めした賊と思ひて其比よりいままつて戸をささつてまつき也久しく待ぬる心あるうた也
 ゆくかたもなくせられたる 序歌也山水の岩間といひかけて我思ふ事はいまほしき也

人のうへのことゝしいへは
 ことゝしのしは助字也君
 も戀する折もあらんに戀
 のうきは思ひ知るべきを
 人の上の戀はしらす難面
 き事よとの心也

つらからはおなし心に 我
 は離而き人をしめて戀る
 心はなし若し我につらき
 人あらは我もおなし心に
 つらくこそせめされは人
 の上の戀をも思ひしらす
 さの心なるへし

人しれすおもふ心は 思ふ
 心はおほしとそへて也大
 島は備前にて鳴門に近し
 されは成るとはなしにとつ
 けたり心は明也
 おまこのもとに 源のされあきら
 ちかなくておなし心に 人の心の淺深をもたつれすばかり
 同いせしをわかちあふか如くそなたにも同い心におほすらん
 やと也そは助字なるへし
 わひしさをおなし心と 戀路の信しさを君も我も同心に成し
 聞かちんさそ信しからんとおもひやられて我身をさしな
 て君が信しからんか悲しきと也かくいふうち
 に我があさからぬ心をいへる也心を付へし

女につかはしける

人のうへのことゝしいへはしらぬかなきみもこひするおりもこそあれ
 返し

女につかはしける

つらからはおなしこゝろにつらからんつれなきひとをこひんどもせず
 返し

返し

わひしさをおなしこゝろとさくからに我身をすてゝきみうかなしき
 信明のかよはすかりし女なり
 まからすなりにける女の人に名たちければつかはしける

源 信明

さためなくあたにちり 或
 抄云あたししき花をみ
 んよりは常盤の松を見て
 何きてあれに習はぬそと
 也聖案此やははあかれや
 はせぬと同ッやは也
 すみよしのわか身 住吉は
 すみよき心に用ひて也我
 身のきみにすみよきおも
 はるゝ身ならばこそたさ
 へさしへて疎遠なりとも
 かはらぬ松の色をのみ見
 るへけれと也扱我をすみ
 よしとせて久しくおはさぬ故外の色をも見し
 心の心也神功皇后に眞住吉の國也こゝに
 おらんと彼神の託宣し玉ひし事日本
 紀にあるも住よき心とかや
 うつゝにもはかなき事の 現にてもはかなき事
 のあやしき事共はねさる夢見るにてありと也
 かく夢を觀すれば万事に付て
 人に恨へき事着すへき事
 もなしとなるへし
 女のおはす侍りけるに 始めば達し
 女の後にあはさりしなるへし
 しらなみのよるゝさしに ねも見し
 物をは寝て見し心を松の根を見しに
 そへて也もさは夜ことに立よりれたる物を
 今更かくあはすのみあるへき事か
 はさの心を住吉の松岸波などの縁にてよめり
 なからへてあらぬまてにも ゆくすへ
 なからへてはかやうにあらすかはるまて
 にもふかくたのむる詞はいかにあはれに覺る
 と也いかに何ほさかこの心也

さためなくあたにちりぬる花よりはとさはの松のいろをやは見ぬ
 返し
 よみひとしらす

すみよしのわか身なりせばとさふともまつよりほかのいろを見ましや
 おどこにつかはしける

うつゝにもはかなきことのおやしきはねなくにゆめの見ゆるなりけり
 女のおはす侍りけるに

しらなみのよるゝさしに立よりてねも見しものをすみよしの松
 おどこにつかはしける

なからへてあらぬまてにもこののはのふかさよいかにあはれなりける
 リイ

後撰和歌集卷第十

戀歌二

女のもとにはしめてつかはしける

藤原忠房朝臣

人を見ておもふ思ひはあるものをうらにこふるははかなかりけり

みふのたみね

ひとりのみおもへはくるしいかにしておなしこゝろに人ををしへん

きのともものり

わかこゝろいつならひてか見ぬ人をおもひやりつゝ戀しかるらん

またとしわかゝりける女につかはしける

源 中

正大藏卿當計子
近院右大臣孫

葉をわかみほにこゝろいてね花薄したのこゝろにひすはさらめや

人をいひはしむとて 兼 覽 王

わしひきの山下しけく序 わしひきの山下しけくはふ葛のたつねて戀る我としらすや

歌也はふ葛に至らぬくまもなくはへは尋ねてさいはんて也便りなきたをとおていひよるさいはんて尋て戀るとみ給ふふるべし

かくれぬに忍ひわひぬる

此歌イ本年目をへて忍て

いひ侍る人にと詞書有

隠沼は忍ひさいはん枕詞

也年へて忍ひ俗ぬれば井

手の唾の知音を立て云出

んさ也

あふくまの霧とはなしに

阿武隈は奥州也よもすか

ら立わたりてのみ世をへ

てえ達の歌さをよめる也

古今あふ隈に霧立わた

り……………

あやしきもいふふにはゆる

爲家抄云あやしきもは不

審に也はゆるははひこる

心也延の字をはひこるさ

よむ感案思ふまじき思へ

さわりなく忘かたく思ひます心也

ともかくもいふことの

とかくの音信もなければ露も妹背の中とかくへき所なし也葉に露はかゝる物なればかくよめり

わひ人のそほつてふなる

世に信たる人はそほちぬるさいふ泪川に我も今おりたうてぬれわたるさ也君を戀る故この心を

ふくめり

イ年月をへて忍ていひ侍ける人に

忠房朝臣

かくれぬに忍ひわひぬるわか身かなわたのかはつとなりやしなまじ

女のさうしによるくたちよりて物などいひてのち

藤原輔 文一本輔仁母ハ
参議玄上息

あふくまの霧とはなしによもすからたちわたりつゝよをもふるかな

文つかはせども返事もせさりける女のもとにつかはしける

よみひとしらす

あやしきもいふふにはゆる心かないかにしてかはおもひやむへく

くにもちかをともせさりければつかはしける

本院右 京重親女

ともかくもいふことのはの見えぬかないつらはつゆのかゝりどころは

題しらす

橘 敏 仲中納言公頼男
伊賀守

わひ人のそほつてふなるなみた川おりたちてこゝろぬれわたりにけ

淵瀬ともころもしらす

返し

大 輔

そなたの心の淺深もしら
す我らおり立へき袖の
ぬるゝにもと也心もしら
ては同心しかたしき也
ころ見になをおりたゝん
よしそなたには淵瀬をあ
やふみ給へは我はまつ心
みに猶おりたゝん若は嫌
しき瀬になかれあふ事も
やまゝ也

淵瀬ともころもしらすなみた河おりやたつへき袖のぬるゝに
又 敬 仲

かゝりける人のころを
かくはかふる人にさそは
るへき心をもしらすてある
物を頼ける哉と云心を露
のはかななから置たるに
そへてよみ給ふなるへし
うくひすの雲のに侘て 鶯
を女に比してなり雲のに
侘てさは遙に隔たりて侘
る心なるへし春のさかさは春の習ひといふ心也鶯の雲のに侘て鳴を春の習ひと鳴て我がさばぬを侘るさばきかすの心也
かくはかりつねなき世 定めなき世も同じ心也かくこゝに人達なき事ある世は知なから猶行末かけてはるかに何かた
のみしそき也

こゝろ見になをおりたゝんなみた河うれしき瀬にもなかれあふやと
わさどにはあらてときくものいひふれ侍ける女の心にもあらて
人にさうはれてまかりにければどのぬものにかきつけてつか
はしける
藤原敦忠朝臣

かゝりける人のころを
かくはかふる人にさそは
るへき心をもしらすてある
物を頼ける哉と云心を露
のはかななから置たるに
そへてよみ給ふなるへし
うくひすの雲のに侘て 鶯
を女に比してなり雲のに
侘てさは遙に隔たりて侘
る心なるへし春のさかさは春の習ひといふ心也鶯の雲のに侘て鳴を春の習ひと鳴て我がさばぬを侘るさばきかすの心也
かくはかりつねなき世 定めなき世も同じ心也かくこゝに人達なき事ある世は知なから猶行末かけてはるかに何かた
のみしそき也

かゝりける人のころをしら露のをけるものどもたのみけるかな
わひしりて侍ける女を久しうとはす侍ければいといたうわひ侍る
とひとのつけ侍ければ
藤原顯忠朝臣本院大臣二男
宮小路右大臣

うくひすの雲のに侘て 鶯
を女に比してなり雲のに
侘てさは遙に隔たりて侘
る心なるへし春のさかさは春の習ひといふ心也鶯の雲のに侘て鳴を春の習ひと鳴て我がさばぬを侘るさばきかすの心也
かくはかりつねなき世 定めなき世も同じ心也かくこゝに人達なき事ある世は知なから猶行末かけてはるかに何かた
のみしそき也

うくひすの雲のにわひてなく聲をはるのさかどろ我はさゝつる
ふみかよはしける女のこと人にわひぬときとてつかはしける
平 時 望 朝 臣承平七年任
權中納言

我がこの一村すゝき 君か
たなれさよむ也一村すゝ
まくきに對て飼ふへき君
か手廻の駒もこぬよき也
駒もといふもの字心あり
よなうみのあはと消ぬる
此歌伊勢家集を勸るに仲
平公いせさかたらひなか
ら時のおほいさの、聲に
成給へはいせ今は我をさ
はじめ思ひて親の大和に
あるかもさへ行に仲平公
哀さ思ひて此歌をよみて
奈良坂のわたりになひつ
きてつかはされたる歌也
されはあはさきえぬるとは伊勢か道理におれ給ひて思ひさえ給へる心なるへし世のうきここのさりにたきわさにて伊勢に
うさまれたれば今大和へ行なうらめしからすもあられさきまて數々はえ恨すとなるへし
わたつみきたのめし事も 海の如く深きたのめし事もかはりあせたれば今はせんかたもなし只わが身をうらむさ也人のわれ
につらさもわが數ならぬゆへなればこの心なるへしわが身のうきを恨むさの下句也
あつまちのさのふなはし 序歌也佐野舟橋は上野也かけてのみといはんため也わたるも橋の縁語あるへし心は明也
ふしてぬる夢路にたにも 伏て寝るは重詞也現には勿論あはする間の夢にもえあはぬ身は夢路ながら猶淺ましき現と思ふ
さ也

おどこのこさうりければつかはしける

こまぢかあね

我がこのひとむらすゝきかりかはんさみか手なれのこまもこぬかな
題しらす
よをうみのあはとさぬぬるみにしあれば恨むることそかすなかりける
返し
わたつみとたのめしこともあせぬればわれうわか身のうらはうらむる
人のもどにつはしける
源 等 朝 臣
あつまちのさのふなはしかけてのみおもひわたるをしるひとのなさ
人につかはしける
紀長谷雄朝臣

我がこのひとむらすゝきかりかはんさみか手なれのこまもこぬかな
題しらす
よをうみのあはとさぬぬるみにしあれば恨むることそかすなかりける
返し
わたつみとたのめしこともあせぬればわれうわか身のうらはうらむる
人のもどにつはしける
源 等 朝 臣
あつまちのさのふなはしかけてのみおもひわたるをしるひとのなさ
人につかはしける
紀長谷雄朝臣

我がこの一村すゝき 君か
たなれさよむ也一村すゝ
まくきに對て飼ふへき君
か手廻の駒もこぬよき也
駒もといふもの字心あり
よなうみのあはと消ぬる
此歌伊勢家集を勸るに仲
平公いせさかたらひなか
ら時のおほいさの、聲に
成給へはいせ今は我をさ
はじめ思ひて親の大和に
あるかもさへ行に仲平公
哀さ思ひて此歌をよみて
奈良坂のわたりになひつ
きてつかはされたる歌也
されはあはさきえぬるとは伊勢か道理におれ給ひて思ひさえ給へる心なるへし世のうきここのさりにたきわさにて伊勢に
うさまれたれば今大和へ行なうらめしからすもあられさきまて數々はえ恨すとなるへし
わたつみきたのめし事も 海の如く深きたのめし事もかはりあせたれば今はせんかたもなし只わが身をうらむさ也人のわれ
につらさもわが數ならぬゆへなればこの心なるへしわが身のうきを恨むさの下句也
あつまちのさのふなはし 序歌也佐野舟橋は上野也かけてのみといはんため也わたるも橋の縁語あるへし心は明也
ふしてぬる夢路にたにも 伏て寝るは重詞也現には勿論あはする間の夢にもえあはぬ身は夢路ながら猶淺ましき現と思ふ
さ也

我がこのひとむらすゝきかりかはんさみか手なれのこまもこぬかな
題しらす
よをうみのあはとさぬぬるみにしあれば恨むることそかすなかりける
返し
わたつみとたのめしこともあせぬればわれうわか身のうらはうらむる
人のもどにつはしける
源 等 朝 臣
あつまちのさのふなはしかけてのみおもひわたるをしるひとのなさ
人につかはしける
紀長谷雄朝臣

あまの戸をあけぬ〜
早く歸せしを恨て鳥の空
音せしきこつ也函谷關
の古事不引共か

夜もすからぬれて 逢坂山
に道まごふきはあはぬ心
也逢の物から終夜のれま
さひしと也

おもへともあやなしこのみ
あやなしは無益也夜歸は
實臣が事也あやなしとい
ふに對して歸さ云也思へ

とも無益このみいはるれ
は深き思ひのかひもなし
さいはんさて夜歸の心ち
するさ也

なごにのみぎに三輪
爲家抄云杉の敷さほおも
ぶしるし也或抄云音にき
くみわの山は杉おほき所なから我おもふしるしの無益の敷を我みせんさ也

なにはかたかりつむ声 僻案抄云あしつは声のよの中にうすやうのやうなる物也それ程もへたてすと云由也
わかことや君もこふらん 我か如くにや君も我をこふらん我はおきふし種のかはわぬさ也

女につかはしける

よみひとしらす

あまの戸をあけぬ〜といひなしてそらなきしつるさうのこゑかな
夜もすからぬれて倦つるから衣あふさかやまに道まごひして
おとこにつかはしける
おもへともあやなしこのみいはるればよるのにしきのこゑちこすれ
女のもとにつかはしける

をどにのみぎにこし三輪の山よりも杉のかすをばわれを見たまし
をのれをおもひへたてたる心ありといへる女の返事につはしける
兼輔朝臣

なにはかたかりつむ声のあしつゝのひとへもさみをわれやへたつる
をさ所にまかりける道よりやむことなき事によりて京へ人つか
りし也
はしけるつゝめてに文のはしにかさつけ侍ける
よみ人しらす

わかことや君もこふらんしらん露のおきてもねても袖をかはかぬ
のイ

あひしりて侍ける人のもとより久しうとはすしていかにそまたい

きたりやとたはふれて侍ければ

つらくともあらんとを思ふようにても人やけぬるときかまはしさに

人のもとにしは〜まかりければあひかたかく侍ければ物に書つけ

侍ける

在原業平朝臣

暮ぬとてねてゆくへくもあならなくなると〜もかへるまされり

男侍る女をいとせちにいはせ侍けるを女いとわりなしといはせけ

れば 元良のみこ

わりなしといふこそかつはうれしけれをろかならすと見えぬと思へは

女のもとより心さじのほどをなんぞ知ぬといへりければ

藤原おきかせ

我こひをしらんとおもは〜たこの浦にたつらんなみのかすをかそへよ

いひかはしける女のもとよりなをさりにいふにこゑあめれといへ

りければ

貫之

わりなしといふこそかつは〜は嬉しけれ我が心のをろかならすあなからあるほとの見ゆ

ると思へばと也見ゆれば華の也

我こひをしらんと思は〜 田子の浦の波の敷と我こひはひさしからんと也古今に「するがなるたこの浦波立の日はあれとも

君なふひぬ日はなし

いかにそ いかにといふ心
也物を問かくる詞也

つらくともあらんとを世
に有てつらき身なりとも

猶ながらへてあらんと思
ふ其故は君か消ぬるか

よそなからもきかまほし
さにと也我が生たりや死

なすやと願れいへるに又
云返す心也

暮ぬとてねてゆくへくあ
ひかつたき申なれば暮ぬる

とてめれぬへくもあらね
は夕ぐれの道たとる〜

と歸らんにかしき也た
とる〜と云に倦たる心

深籠れり

わりなしといふこそかつは

わりなしはあなからなる心也さやに思ひいへるこそかつは嬉しけれ我が心のをろかならすあなからあるほとの見ゆ

ると思へばと也見ゆれば華の也

我こひをしらんと思は〜 田子の浦の波の敷と我こひはひさしからんと也古今に「するがなるたこの浦波立の日はあれとも

君なふひぬ日はなし

いろならはうつるばかりも
我思ひの深き那若色なら
は照り移るほとにも染て
見せなましを染へき色な
らねは見すへきかたなく
て等閑といはるゝ也

大江朝綱 参議従四位下玉
淵子

あしひきのやまひは 心は
明也足引の山といひて踏
通ふ跡と云也たさひ病氣
にても返事はすへき事と
いふ心をそへたり
おほかたはなそやわか名
あまり聞入ぬ姫さによめ
る心也かく思ひ侘ては夫

方名もおしかす立はたて思へは君を昔の妻成しさいはんさ也
おほつふね 僻案抄云敬忠中納言の娘中納言幼くてよひつけられたる名といふも無下にうちさけたり名なくは棟梁かむす
めさもかくへきに勅撰の作者にかくてのせたれば定りにける名ときこゆ大納言行成本にもおほつふねとあり又云清輔朝
臣おほつ少將とかけり不用口訣と師説也
人はいさわれはなき名の 人の事はしらす我はさやうになき名たつ事は迷惑なれば初中後しらすといはんさ也なは助字也古
今元方ノ哥云々然るに此集に如此不審にや兄弟の哥なればこゝによく心叶へる故返事に用ひたるにや
からうじて 辛の字也やうゝとしてなどの心也

いろならはうつるばかりもうめてましおもふこゝろをえやは見せける
物のたうひける女のものと文つかはしたりけるにこゝちあしとて
返事もせさりければ又つかはしける

大江朝綱朝臣

あしひきのやまひはすともふみかよふあどをも見ぬはくるしきものを
人の名也
おほつふねに物のたうひつかはしけるを更にさゝいれさりければ
つかはしける
元真イ
貞元のみこ 清和第三
イ本閑院三のみこ

おほかたはなるやわか名のおしからんむかしのつまど人にかたらし
返し
人はいさわれはなき名のおしければむかしもいまもしらすとをいはん
かへりことせさりける女の文をからうじてえて
よみ人しらす

おほつふね 在原棟梁女
敬忠母弟

あと見れば心なくさの鳥
の跡さ文字をいへは也手
跡を見れば心慰むといひ
かけたたり名草ノ濱紀伊也
今は直にさ也

あと見ればこゝろなくさのはま千鳥いさはこゑころさかまほしけれ
おなし所にて見かはしなからえあはさりける女に
河と見てわたらぬ中になかるゝはいはてものおもふなみたなりけり
こゝろさしありける女につかはしける

河と見てわたらぬ 同所に
て常に見なからえあはぬ
なあと見なからえわたら
ぬになそらへてよめり下
句是も心明なり
あま雲になきゆく 雨天の
雲になく鷹はこゑのみ
きつて見ぬがたきをなそ
らへて序歌によめるなる
へし

橋公頼朝臣 贈中納言廣相子
贈中納言

あま雲になきゆく鷹のをどにのみさゝわたりつゝあふよしもなし
貫 之

すみの江の波には 世さ
もに心をよするといはん
とての上句也心は明なる
へし

すみの江の波にはあらねとよとゝもにこゝろをさみによせわたるかな
兵衛につかはしける
よみ人しらす

中將 更衣 衣参議伊衛女

兵衛 古今作者藤原高経女の兵衛成へし
見ぬほさに年のかはれば いやはるゝは彌達々さ也心は明也
まかり出て御文つかはし 更衣内裡を退出し給ひて帝より御文遣したるへし程有てさみゆ

けふすきはしなまし物を夢にこもいつこをばかどきみはどはまし
へし

けふすきはしなまじ物を

御返し

延喜御製

久々御音信もなきに思ひ
俗て已にけふ過は死へか
りしに若死たははいしこ
をしるへさかさはせ玉は
んあやうくも御無音哉と
也いつこなほかはそこは
かさ同し心也盛なそへた
るべし

うつゝにうとふへかりける夢とのみまどひしはとやはるけかりけん
題しらす 藤原ちかぬ

うつゝにそさふへかり 現
にそとふへき夢中にはさ
ふへきにもあらぬに更衣
の久しき単住を夢さのみ
思ひまどひし程にはるか
にそそくとひしと也更衣の里住を思召まふさかたせ給ふ心也

なみだにもおもひのささゆる物ならはいとかくむねはこかささらまし
さかのうへのこれのり
貫之

なかれてはゆくかたも わか身のうらとは身のうき心也歌の心は戀しき泪は遠く流れてゆくもしらすかきりもなご只お
もはれぬわか身のうきにのみささまるさの心を河浦なき縁の間にてよめるなるへし
わかこひのかすにしさらは 戀の無限なき事をいへりつさきへら也は盡つへきなりと同
なみたにもおもひのささ 思ひを火にそへてよめり心はあきらかなるへし絶ぬ泪のおほきにささぬ思ひを深く抱る心なる
べし

しるしなき思ひやなそとあしたつのおねになくまでにあはすわひしき
貫之

しるしなき思ひやな なそとのの字かるく見るへし古今に「人しれぬ思ひやなそそ声垣の間近けれともあふしのなきと
いふにおなし詞也思ひのしるしもなくあはて俗しきはなそそ也

とし久しくかよはし侍ける人につかはしける
貫之

玉のをのたて短き 玉の
緒は絶て長き等の枕詞也
たて短きとは至て短き
儀也仰もては命を持て也
我のみやもわてきぬ おも
ひまならぬは古今「富士
のねの成り思ひにさいへ
るに同富士はもわてもど
るしなげれば叶ぬ思ひに
よせていへり思ひもかな
はの富士の雪の如く只我
のみもわてきえや果んこ
也

玉のをのたてみしかき命もてとし月なかきこひもするかな
平定文

ふしのねのもわわたるさも
けしこそしらねは消さわ
さしちゆき也そなたにも
え給ふとて我はせんか
たなしと也
わひわたる我身は露 とて

わひわたる我身は露をおなしくはさみかかきねの草にさえなん
題しらす 在原元方

見るめかるなきさや
あはえ期もさく立よる傾りもなき身は君をみるへきかたいつこもなしとの心也逢期なみを波にそ
へては落湯とそへ見る事を海松和布刈とよめり

見るめかるなきさやいつこあふこなみたちよるかたもしらぬわか身は
つらゆき

見るめかるなきさや
あはえ期もさく立よる傾りもなき身は君をみるへきかたいつこもなしとの心也逢期なみを波にそ
へては落湯とそへ見る事を海松和布刈とよめり

おやの戸をさしてゐて 滋
誇の親國經卿戸をさして
とも聞ゆれと女の親女を
ぬて入しなり

なるさよりさし出されし
鳴戸を阿波の鳴門にそへ
て舟をさし出すといひか
けてよめる也よるへはよ
り所也便なくせんかたな
かりしき也

高さこのみねのしら雲 序
歌也高砂は山也かゝりけ
るはかく頼みかたかりけ
るの心也

よそにのみまつははかな
待を松にそへてなりよそ
にてのみ待ははかなしゆ
きて住江の見まほしきと
也更衣の里に行て御覽し
たきき也

わらつみのそのありかは
かつきていらんは蟹の海
にいる事也あり所は知な
からえゆきて逢ぬ事をか
くよめり

つらしきもおもひそ なか
れて人を頼むきはゆくす
ゑを頼心也今つれなきも
つらしき思ひ果す行末に
は終にと頼むゆへにこの
心也

なかれてさ何たのむらん
佛見せんとも思はぬき也
なかる川は物の影見ぬ
かたきにそへて也行末の
頼みも無益の心也

なにこそをいまば 神もた
すけぬといふもの字に心を
ちはやふる神もみ 耳馴る
是ももの字に我事をこめて
うちみても身こそ から衣は
思はるへき身ならはきても
徒には歸さるましき思は
れぬ身の故き思へはき也

なるさよりさし出されし
舟よりもわれろよるへも
なきこゝちせし
題しらす
よみ人も

高さこのみねのしら雲か
りける人のこゝろをたのみ
けるかな
四品天曆三年五月藤原
長明のみこの母の更衣里
に侍けるにつかはしける

よりにのみまつははかな
住の江のゆきてさへこ
ろ見まくほしけれ
たいしらす
源等朝臣

東宮鳴戸也になるといふ戸のもとに女と物いひけるにおやの戸をさし
てゐて入にければ又のあしたに遣しける

藤原 滋 延長六年右少將
大納言國經子

よみにのみまつははかなき住の江のゆきてさへこ
ろ見まくほしけれ
たいしらす
源等朝臣

かけろふに見しはかりにやはま
ちどりゆくゑもしらぬこひにま
どはん
あり所しりなからえあふま
しかりける人につかはしける

藤原 兼茂朝臣参議兵衛督

わたつみのうこのありかはしり
なからかつきていらんなみの
まうなき
かけろふに見しはかりにやは
まちどりゆくゑもしらぬこひに
まどはん
あり所しりなからえあふま
しかりける人につかはしける

女のもとにつかはしける

橘實利朝臣 大舍人頭
春利朝臣子

つらしきもおもひるはてぬな
みた河なかれて人をたのむこ
ゝろは
返し
よみ人しらす

なかれてどなにたのむらん
なみた川かけ見ゆへくもおも
ほえなくに
人をいひわつらひてつかはし
ける
平定文

なにこそをいまはたのまん
ちはやふる神もみこ
ろなれぬらしさま
いのるとしもへぬれは
女のもとにまかりたりけるを
只にてかへし侍ければいひ
いれ侍け
る
貫之

うちみても身こそ
から衣は来てをいふ枕詞也
うちみもなのつから縁語なる
へし心は人をうちみても
且は我身のつらき也
思はるへき身ならはきても
徒には歸さるましき思は
れぬ身の故き思へはき也

なるさよりさし出されし
舟よりもわれろよるへも
なきこゝちせし
題しらす
よみ人も

すみの江の松に立よる 序
歌也門より歸る折に音の
鳴るゝ心也根の流るにそ
へて也らんさよめる優な
るへし

おひしりて侍ける人を久しうとはすしてまかりたりければ門より
かへし遣しけるに 壬 生 忠 岑
すみのえの松に立よるしらなみのかへるおりにやねはなかるらん
おどこのもとより今はこと人あんなれはといへりければ女にかは
りて 女にこそ男あはさばぬ世 申たり よみひを不知 或 小野宮左大臣

おもはんとたのめし事も
うき名を立でまは今はこ
き人有き我なき名を立て
我を忘んさせんよりは有
のまゝに忘れよかし日比
思はんさ頼めし中に餘り
難而き事さの心也

おもはんとたのめし事もある物をうき名を立てただにわすれね
かへし
かすかのゝどふひのもり見しものをなき名といはつみもこころうれ
たいしらす

かすかのゝどふ日の野守
僻案抄云ふひの野守古
今の歌にあり同抄云春日
野にとふひ野さいふ事あ
り縫たてられける故さいふ其野を守る人を野守といふ袖中抄云國史云和銅五年正月廢高安燈始置高見及大和國
春日條一以通二平城一也愚案 此歌は古今の「春日野の飛火の野守出て見よ今幾日有て若菜つみてんさいふを本歌にてよ
めりなき名を深にそへてつみもこそも其縁なり心は儘にこそ人ありていひかよはるゝ事を我見し物をなき名と偽いは
罪を得もこそし給はめと也

わすられて思ふなけきのしけるをや身をはつかしのもりといふらん
人の心かはりければ 右 近季繩少將女

わすられて思ふなけき 人に忘られて身を恥ぢく人の歌なるへし羽東師孫は山城也なけきの流るなき其縁語也

おもはんとたのめし人はありとさくいひしことのはいつちいにけん
皇大將定國 女御和香子延喜三年女御 さたくにの朝臣のみやす所とさよかけの朝臣とみちのくにゝある
所々をつくして歌によみかはして今はよむへき所なしといひけれ
は 源清 蔭朝臣

おもはんとたのめし人 此
歌大和物語には權中納言
敦忠卿頼め給ふ事なと有
けるな里に有ける比更に
問給はぬに内わたりの人
に敦忠はいかにさ問へは
常に侍ひ給ふさいへは此
歌を奉ける由有五文字忘
れじと有其人は有さ問に
たのめ給ひし詞はいつち
行てかく難而く成給けん
さなり

おもはんとたのめし人のしまのありければたちよりぬへくおもほゆるかな
こと女の文を女の見んといひけるに見せさりければうらみけるに
其文のうらにかきつけてつかはしける
よみひとしらす

さても猶まかきの まかき
のもまへは立よる物なれ
は難鳴さいふにつけて御
息所のもとへ立よらんと
の心をよめるなるへし懸
想の歌也

これはかくら見どころもなき物をうしろめたくはおもはさらなん
久しうあはさりける女につかはしける
源さねあきら

これはかくら見所も
まて恨むへき所もなきに心もとなくは思へらすさの心を文の裏をそへてよめるなるへし
おもひきやあひみぬ かく日敷へてあふまじしを思はさりしに思外のたねまかなさの心也

おもひきやあひ見ぬ事をいつよりとかるふばかりになさんものとは
題しらす 藤原 治 方少納言 大藏少輔經邦子

よのつねのねをしなかねは逢事のなみたのいろもことにと有ける
なきさいひかけて涙の
事をよめり

源 清 正
天智天皇五代大伴皇子曾孫
大伴 黒 主都堵牟磨子

しら波のよするいそま序
歌也いそまは磯間也取も
あへす思ひそめしさいは
んの上句也

源 清 正
少將使宣旨
左大辨唱子

こひしきはねぬに 戀しき
もぬるまこそしはしは休
めぬに戀むまもなきに
あやしくと逢ぬめをみる
さ也ねぬには目のあはぬ
事を人に不達にそへて也
久しくも戀わたる哉 住吉
の松は久しき物なれば久
しくも戀わたるさいはん
さてなるへし

しら波のよするいろ間をこく舟のちちどりあへぬこひもするかな
こひしきはねぬになくさむどもなきにあやしくあはぬめをも見るかな
年をへていひわたりける女に
久しくも戀わたるかなすみの江のさしにとしふる松ならなくに
題しらす
藤原 清 正

あふ事のよをへたつる
逢夜をあまた隔て敷し
ぬ戀するさいふ心を呉竹の縁帯にてよをへたつるふしの敷なきなき讀る也
いまはてふ心つくはの 今はといふ心つく云かけて也今は結果んさいふ心の付し人のありさまをみればかつし其かはる
氣色いちしるき心かくよめり筑波は常陸也

あふ事のよをへたつるくれ竹のふしのかすなき戀もするかな
かれかたになりける人にするもみちたる枝につけてつかはしけ
る
よみひとしらす
源 重 光 朝 臣
代明親王子
前大納言

かへりけんそらも 疎捨は
信濃也此山におはを捨て
歸りし男此山の上より出
る月をみてさすかに悲し
くて「我心慰めかれつ更
科や疎捨山に照月をみて
さよみける此歌古今にあ
るを大和物語にかくかけ
り歌の心は女の強面きに
慰め兼て歸し空も覺ゆさ
りしと也

かへりけんうらもしられすをは捨の山より出し月を見しまに
兼輔朝臣にあひはしめて常にしもあはさりけるほどに
清 正 母
ふりとげぬ君か雪けのしつくとへたもとにとけぬ氷しにけり
天一神のあたりたる方をよけて方違する事也
かたふたかりける頃たかへにまかるとて
藤原有文朝臣
上野介 宗氏子 右大臣

ふりさけぬ君か 降不逢也
雪けは雲消也兼輔の中絶
は雪の降も送ぬか如くか
れは君か雪消さつつけた
り下句は泪也
かたときも見れば 方ふた
かりにてあはぬこよひか
く片時をも戀しき思ふ君をよきて日比たに夜をかきれて外に有し事もありしあやしきよこ也
おもひやる心に 思ひやる心に身をたくへやる物ならは日々に千たひ思ひやれば其たひく行て君を見なまし物かこの心也
あふことばを山すり 僻案抄云さぬなまのそりにはおほく遠山をすれる物なればよめるにこよ一本には遠山島と有れをの
みそなくといふに事よれるにや遠山いはれある故に大納言の本には遠山播き有

かたときも見ねは戀しき君をよきてあやしやいくよほかにねぬらん
題しらす
大江 千 久
從四位上式部大輔
伊與權守
參議音人子
おもひやる心にたくふ身なりせばひと日に千たひさみは見てまし
忍ひてかよひける女のもとよりかりさうろくをくりて侍りけるに
すれるかりさねの侍けるに
元 良 の み こ
あふことばを山すりのかり衣きてはかひなきねをのみろなく

ふかくのみおもふころは
解案抄云声の根亂れ合た
る物を分てもさは思ふ心
のあなかなれば分尋て
もさ云也

いさり火のよるはほのか
流火夜る魚さる蟹のこも
す火也よるくはほのか
にあひみて常には遠れば
かやうにしつゝ有程なほ
途に戀の下に消果るにて
あらんさ也

たちよりは影ふむばかり
奈古曾爾奥州也な來そと
いふに添たり影を照ほさ
近くても召よせぬ事をよ
める也小町か「なごころの
關も我すへなくにさよめ
るも源氏物語になごその關をすへ給ひけんふとも同心也

我袖はなにたつ末の 末の松山奥州也波のこゆる事古今にあり袖の泪のおほき事なはいんとてよめる也
月をあはれさいふはいむ 源氏物語宿木卷にひとり月を見給ひをよ心空なればいと苦し云々白氏文集 莫下野三月明 思中往
事上滅三君年二損三君顔色二大かたは月をもめてし是を此つもれば人の老なる物 是りの詩歌諸抄三引

題しらす

あつよしのみこ

ふかくのみおもふころはあしのねのわけても人にあはんどろおもふ
忍びてあひわたりける人に 藤原忠 國陸奥守運並息

いさりひのよるはほのかにかくしつゝありへはこひのしたにけぬへし
昌善二年十月十四日於仁和寺御出家卅二法名金剛覺
寛平のみかど御くしおろさせ給ての比御帳のめぐりにのみ人はさ
ふらはせ給てちかうもめしよせられさりければかきて御帳にむす
此歌を書て也
ひつけゝる 小八條御息所長部卿昇女

たちよりはかけふむばかり近けれと誰かなころのせさをすへけん
おとこのもとにつかはしける 士 左

我袖はなにたつ末の松山からより波のこぬぬ日はなし
月をあはれさいふはいむなりといふ人の有ければ
よみ人しらす

ひとりねの倦しき 獨れの
慰めに月を思かへて哀さ
見るさ也

ひとりねの倦しきまゝにおさるつゝ月をあはれといみうかねつる
おとこのもとにつかはしける
からにしきおしき我名はたちはてゝいかにせよどかいまはつれなさ

唐錦は鏡をおしむ故枕詞
に云也古今に「思ふさち
まさおせるよはからにし
きたまゝくおしき物にそ
ありけるさよめり歌の心
は君によりてうき名は立
ながら君は離面なるは如
何さ也

はしめて人にの給ひつかはしける 眞 之
人つてにいふことのはのながよりおもひつくはの山は見おける
はつかに人を見てつかはしける
たよりもあらぬ思ひのあやしきはこゝろを人につくるなりけり
思ひつく心也
人の家より物見にいづる車を見て心つきにおほは待ければたうと
尋ねどひければ出ける家のあるしとさゝてつかはしける

人つてにいふことの葉の
筑波山は葉山茂くて木間
より見ゆればそれをいひ
かけてかく人つてにいひ
やる詞に我思ひつくほきは見ゆへしこの心なるへし

よみ人しらす
人つてにいふことゝろあやなくかけはしのあやうさみちは戀にうわりける

たよりもあらぬ 何事も其たより有りてこそ思ふへき事をも思ふ習ひなるにあやしきは我心也と我といふ心也榮雅云人に心
を付るはかくる也此歌古今には元方さあり不審歎
人つまに心あやなく 人妻にあやなく心をかけしきかけて梯の危きといひかけたる也朱子自警詩世上無一人欲險二幾人
到レ此誤三平生二云々

心ちもあらずや、あまりに思ひて無心になりたるにやさ也

なまかくすきくしく、散寄入てふかく愛着するを云也

いはて思ふ心ありき、有磯濱越中もいはて思ふ心有といひかけて夜はおきもあからず倦しき心を云也

立白波のはよるさいはんため也

ひとりのみこふれば、人しれず一人のみ戀れば苦しきにいひ出んごの心なり

喚子鳥は古今の三鳥也、ふしなくて君かたね、返事せぬ事をふしなくてといへり糸のふしにいひかけ

て也下句はこゝろあきらかなり、まてきては旅より歸りまうてきて也、くさまくら此たひへつる、留守中のさかりしほき達て嬉しかれと也

人を思ひかけて心ちもあらずや有けん物もいはずして日暮るれば、おきもあからずと聞てこの思ひかけたる女のもどよりなどかくす

さくしくばといひて侍ければ、すきくしくばあるらんごの心也いはて思ふこゝろありうの濱風にたつしらなみのよるる倦しき

心かけて侍ければいひつかんかたもなくつれなきさまの見ゆけれはつかはしける

ひとりのみこふればくるしよふこ鳥こゑになき出て君に聞せん、男の女に文つかはしけるを返事もせて絶にければ又遣しける

ふしなくて君かたねにし白いとはよりつきかたき物に有ける、おどこの旅よりまてきて今なんまてきたつきたるといひて侍ける返事に

くさまくら此たひへつる年月のうきはかへりてうれしからなん、女のもとに久しくとだえて也御心也男のほど久しうありてまてきてみこゝろのいとつらさに十二年の

山でもりしてなん久しうさてぬさつるといひ入たりければよび、いれて物などいひてかへしつかはしけるか又をもせさりければ

十二年の山ごもり、ひえの山なきに禁足してこもる事なるへし清少納言枕草子のおほつかなき物十二年の山籠りの法師のめおや云云

出しより見ぬす成にし、彼歸りし後音信せぬは又山こもりやしけんごの心を月によそへてよめり

あしひきの山におふてふもろかつらは賀茂の葵柱をいへり心は山にいらは

君まこそ入へけれ猶はいかていらんと也序歌也

はまらこりたのむを、君を我頼む心をはしれとて文を遣初るに此れきここの跡をいたつらに消すなき也千鳥の足跡の瀧にあるを波にけつなといひかけたる心也「わたつ渚のゆく水の瀬こまに、我にのみともなくあまた所にある文故には頼むしをいつれとも見かたしき也

つまにおふることなし、事なり草物思を付る物也忍草の異名といへりされはつまに生るさは軒の妻也何もかゝる紙を何の事もなき心にてなそらへよめりしふさいへる名に付て頼心を敷まさと讀るにや

出しより見ぬすなりにし月影は又山のはにいりやしにけん返し

あしひきの山におふてふもろかつらもろどもにこそいらまはしけれ、人をおもひかけてつかはしける、平 定 文

はまらこりたのむをしれとふみ初るあどちけつなわれをこそす波かへし、おはつふね

ゆく水の瀬こまにふまんあどゆへにたのむしをいつれとか見ん、人のもどにはしめて文つかはしたりけるにかへり事はなくたゝ

のみをひきひすひてかへしたりければ、源もろあきららの朝臣

つまにおふることなし草をみるからにたのむこゝろう敷まさりける

なく露のかゝる物さば
く離面き物さば思ひ給へ
とも枯せぬ物なれば頼み
給へとの心也

かれすともいかゝ 又難頼
心ないへり

かくてをこせて侍けれと宮つかへする人なりければいとまなくて
其日は返事せさり

又のあしたにとて夏の花につけてをこせたりける

よみ人しらす

をく露のかゝる物さばおもへともかれせぬものはとて夏のはな

返し

かれすともいかゝたのまんてしてこの花はとさばのいろにしあらねは

なにしおは、逢坂山の 玄

旨云此名にしおは、と云

五文字は逢坂の逢てされ

かつらの小寝といひかけ

たる詞也寝る心にされり

扱され葛は是を引とるに

茂たる物なればいつくよ

りくるさも見ぬぬ也其如

く我思人も世にしられす

してくるよしもかなとい

へる也ての字を清説宮流

不用之

こひしとはさらにもいはし

玄旨云戀るに下紐のとく

る物ならは我思ひは深切

なり必其方の下紐とくへ

し其時我戀るをは御知あれと也閑疑抄也

したひものしるしと 牡丹花云其しるしとする紐もさければそふたの云こゝは戀めにてこそあれと也宵問抄也 右伊勢物

語の註也但彼物語には此返歌前後にて此集さば聊こと也

うつゝにもはかなき事の 女は思ひ離ていふに我は忘れぬはかなき事はねぬに見る夢を覺へて現とも覺へすと也此歌此集

戀一に聊詞のはりて出たり詞書もこと也

後撰和歌集卷第十一

戀歌三

女のもとにつかはしける

イ女に遣しける

三條右大臣

室方公 内大臣高藤二男

なにしおは、逢坂山のさねかつら人にしられでくるよしもかな

ありはらのもどかた

こひしとはさらにもいはしまたひものどけんを人はられとしらなん

返し

よみ人しらす

下ひものしるしとするもどけなくにかたるがとどはこひすもあるかな

女のいと思ひはなれていふに遣しける

うつゝにもはかなきことのわひしきはねなくにゆめとおもふなりけり

たむけせぬ別れする 人目
故逢かたく別れる事旅に
別ぬるか如くなれば也さ
れと旅の別のやうに饑は
せれば手向せぬ別さいへ
り

やとかへてまつにも 心は
明也つらき所のおほきさ
いふに男をふかくうらむ
心あるにや

おもはんさたのめし 思は
んさ頼めし人はよもかは
らしなかく思はれぬは我
かあらぬ物になりたるに
やと也

いたつらにたひくしぬと
逢にも命ばかり給ふへき
を只いたつらに死ぬく
とのみの給ふはあふには
何をかへんとの事そと也
あまり死ぬくしに耳なれ
て浅みたる心也

みやつかへする女のあひかたたく侍けるに

貫之

たむけせぬ別れする身の侘しきは人めを旅とおもふなりけり
かりうめなる所に侍ける女に心かはりける男のこゝにてはかくひ
んなさ所なれば心さしはありなからなんえたちよらぬといへりけ
れば所をかへて侍けるに見えさりければ

女或勳物云忠義公之女也男は
兼通朝臣云々可尋之

やとかへてまつにも見ぬす成ぬればつらさところのおほくもある哉
たいしらす
よみ人しらす

おもはんとたのめし人はかはらしをとほれぬわれやあらぬなるらん
源さねあさらたのむ事なくはしぬへしといへりければ

中務

いたつらにたひくしぬといふめればあふにはなにをかへんとすらん

返し 源信明

しぬくときくたにも逢みぬはいのちをいつのよにかのこさん

まゆくときくく あま

り離れければ命はいつの
よにのこして逢にかへん

ともせんた戀に死ぬる
斗と也爲家云いつのため

に命をものこさんと也
みにかける鳥とも人を 同

し所をつれにとふとは訪
と飛さなれたるへし心

は明也爲家説

大納言國經 閑院左大臣冬

嗣公息

家に侍ける女 敦忠卿の母
棟梁のむすめさや

贈太政大臣 時平公也國經
卿沈醉の上北方をみつか

らまいらせ給ふとそ

本院 拾芥云中御門北堀河東一町左大臣時平家
むかしせしわかかれこの

やと也
うつゝにてたれちきりけん 定めふき夢のやうなる身のありさまは我ながら我さもおほえれば現にて誰ちきりけんしらす
との心也われは我がはとは我にもあらずこの儀也夢の兼言を我は不知き逢し心也

曹子局也

ときく見ぬける男のゐる所のさうしに鳥のかたをかきつけて侍

ければあたりをしつけ侍ける 本院侍従

ゑにかけるとりとも人を見てしかなおなしところをつねにとふへく

大納言國經朝臣の家に侍ける女に平定文いと忍ひてかたらひ侍て

行末まで契り侍ける頃此女にはかに贈太政大臣にむかへられてわ

たり侍にければ文たにもかよはずかたなく成にければかの女の子

のいつはかりなるか本院の西のたいにあそひありきけるをよひ

よせて母に見せ奉れとてかひなに書付侍ける

返し 平定文

むかしせしわかかれこのかなしきはいかにかにちきりしなこりなるらん

よみ人しらす
うつゝにてたれちきりけん 定めなき夢路にまどふわれはわれかは

くれはさりとてふや 袖
 中抄云くれはとては綾
 の名也吳玉のあたへたる
 四人の工女さいふは兄媛
 弟媛吳織 穴織也。
 されはくれはとてといふ
 綾をりの名を綾に付たる
 也童蒙抄云日本紀 應神
 天皇卅七年春二月吳王
 與二工女兄媛弟媛吳
 織穴織 四婦女一略
 註

くれはとてふやに戀しく
 僻案抄云くれはとては綾
 の名也あやに戀しくは
 あやにくに戀しかりしか
 は遠き道もゆかす成にき
 きて二むら送ける綾にそ
 へたり 二村山は三河也
 から衣たつをおしみし 我此旅立を惜し心の此山の關さなりけん其故にさよまり給かき也
 夢かともおもふへけれさ わつかに相おたらひしを夢かと思ふ心をかくよめるなるへし
 かすかのつひ 春日祭は二月上旬の申日也未の日使は立云云

おほやけつかひにてあつまのかたへまかりけるほどにはしめてあ
 ひしりて侍る女にかくやんことなき道なれば心にもわらすまかり
 ぬるなど申てくたり侍けるをのちにあらためさせたる事有て
 也
 めし返されければ此女聞て悦ひなから問につかはしたりければみ
 ちにて人の心さしをくりて侍けるくれはとてといふあやをふたむ
 也神中抄ニ端ヲムラトヨム
 らつゝみてつかはしける 清原諸實
 くれはとてあやに戀しくありしかはふたむらやまもてぬすなりにき
 返し
 よみ人しらす

からころもたつをおしみしころころふたむらやまのせきとなりけめ
 人のもとにつかはしける きよなりか女
 夢かともおもふへけれとおほつかかねぬに見しかはわさうかねつる
 少將實忠かよひ侍ける所をさりてこと女につきてうれよりかすか
 のつかひにいてたちてまかりければ
 もとの女

そらしらぬ雨にも そらし
 らぬ雨は涙なるへしみか
 さの山は大將中將少將ふ
 さの異名と八雲御抄にあ
 りされは春日の使なるに
 取て少將實忠をよそにき
 く事によめり又三笠山を
 よそに聞て雨に沾るさ也
 もろともにおるとも 折を
 居るにそへて也或抄云我
 とよもにも居ぬにうらさ
 け姿に見えしよさ也

そらしらぬ雨にもぬるゝわか身かなみかさのやまをよりにさゝつゝ
 あさかほの花まへにありけるさうしよりおどこのあけて出侍りけ
 るに よみ人しらす
 もろともにおるともなしに打どけて見ぬにけるかなあさかほのはな
 内にまひりて久しうをどせさりける男に
 をん な

もしきはをのゝくたす
 晋王實山に入て仙人の若
 をみる中に斧の柄杓たり
 扱古郷に歸れば七世の孫
 に逢し事也彼男の久しく
 内裏に有しを王實か山に
 在しに准へいへり
 すゝか山いせおのあま すゝか山いせ男のわいばんさて也いせには男靈有也捨衣さは靈の海に入時めき置を云也摺馴見苦
 しきまねなき恥る心なるへし
 いかて猶人にもさはん 暁の別のたさへたなきうきを人にもいかておとばんさ也いしかて我

もしきはをのゝくたす山なれやいりにし人のをどつれもせぬ
 女のもとにさぬをぬきをさてとりにつかはすとて
 これまことの朝臣 伊尹 魏公也天徳
 四年八月參議左中
 將
 すゝかやまいせおのあまのすてころもしはなれたりどひとや見るらん
 たいしらす 貫之
 いかて猶人にもとばんあかつきのあかぬわかれや何ににたりど
 在原行平朝臣 仁和二年四月十三
 日致仕中納言

すゝか山いせおのあま すゝか山いせ男のわいばんさて也いせには男靈有也捨衣さは靈の海に入時めき置を云也摺馴見苦
 しきまねなき恥る心なるへし
 いかて猶人にもさはん 暁の別のたさへたなきうきを人にもいかておとばんさ也いしかて我

戀しきにかえかへりつゝ

心は明也きえかへりおき

ぬんなさ皆露の縁也

しのゝめにあかて別し泪

にぬれたれば露分しかこ

さかむるさ也

戀しきもおもひこめつゝ

戀しき事も心にこめつゝ

色にも出ぬに泪のもれて

人に知るゝは何なりけん

さの心也何なりのでにを

は源氏若菜下につづくの

露のかゝる袖なりさいふ

も同じきをなりけんの心

と稱名院殿の御説也猶此

集に末に數多有

あふさかの木の下露に

一度逢じより又えあはねは

其ほさより今も袖のかはかぬさ也

君をおもふ心を人に

小余統コユトウ相模小磯と云所也人にこゆるは人に過て思心也爲家義玉をかからんさは君を得んさの心也或抄説

なき名をさ人には 此歌の心をよく辨へは自歌く事なくして君子の其獨を慎む道を心得へし

戀しきにかえかへりつゝあさ露のけさはおさるんこちこそせね

よみ人しらす

しのゝめにあかてわかれし袂をう露やわけしど人はどかむる

平中ヒラナカ興キョウ左衛門權助藏人頭

右大辨季長男

戀しきもおもひこめつゝある物を人にしらるゝなみたなになり

からうじてあへりける女につゝむこと侍て又えあはす侍ければ

つかはしける

兼輔朝臣

あふさかの木の下露にぬれしよりわかころもてはいまもかはかす

題しらす

みつね

君をおもふこゝろを人にこゆるさのいうのたまもやいまもからまし

おやある女に忍ひてかよひけるを男もしはしは人にしられしとい

ひ侍ければ

よみ人しらす

なき名をさ人にはいひてありぬへしてゝるのとはいかにこたへん

伊勢

さよけれと玉ならぬ身の佗しきはみかけけるものにはぬなりけり

忍ひて住侍ける女につかはしける

敦忠朝臣

あふことをいさほに出いでんなんしの薄しのひはつへきものならなくに

あひかたらひける人これもかれもつゝむこと有てはなれぬへく侍

ければ遣しける

よみ人しらす

あひみてもわかるゝ事のなかりせばかつゝものはおもはさらまし

人のもとよりわかつき歸りて

閑院左大臣冬嗣

いつのまに戀しかるらんから衣ぬれにし袖のひるまはかりに

貫之

わかれつるほどもへなくにしらなみのたちかへりても見まはしきか

たり此集にては戀の歌也兩説にや

いつのまに戀しかるらんぬれにし袖のひるまを云に晝間をそへて也今朝歸て暮れば行違ぬへし晝間を隔つる斗にはいつの

まにかく心に戀しきさ也

わかれつるほどもへなくに 逢見て別きて早見まほし心也ほしきは哉也白波は枕詞斗也

後撰十一

戀三

百三十七

人しれぬ身はいそけさも
急ぐ逢せの年へてなごか
たきぞさ也此女に通給を
女の父腹立ければ逢ぬ歌
讀て給へと女の母望て讀
給と宇治拾遺に有

あつまらにゆきかふ人に
關東に往かふ人こそ逢
坂はこゆめさもあらぬ身
はいつか逢坂をこゆんさ
也いかに年へて急給ふこ
も逢ましきとの心なるへ
し

つれもなき人にまけし 難
面き人にまけず是非いひ
なびげんとせし程にあは
ぬ物から戀する化名立し
と歎心也

つらからぬ中にある した
しき中には衣をへたて
も疎しと思ふへきに我中は隔て果し中なれば衣を隔てしきいふまでもなしと也
言詠歌大概抄云此歌「衣たに中に有しは疎かりき逢ぬよなきへ隔つる哉此古歌を取云云拾遺二有

女のもとにつかはしける

これまの朝臣

人しれぬ身はいそけさもとしをへてなごかたきあふさかのせま

返し

小野好古朝臣女

あつまらにゆきかふ人にあらぬ身はいつかはこゆんあふさかのせま

女のもとにつかはしける

藤原きよた

つれもなき人にまけしとせしほどに我もあなはたちろしにける

かれかたになりにける男のもとにさうそくしてをくれりける

にかゝるからにうとさき心ちなんするといへりければ

小野遠興がむすめ

つらからぬ中にあるころうとしといへ隔てはてしきぬにやはあらぬ

五節の所にて閑院のおほい君につかはしける

もろさの朝臣 師尹左兵衛督 貞信公子

ときはなるひかけの 日陰
の葛さばきつれのをかせ
と云草也一條禪閣御説に
辰日の舞妓の装束背摺
唐衣赤紐日陰 髪等也
云云今は白き糸をくみて
日かけのかつらになぞら
へ用れさも神代よりかの
草を用ひし事なれば此
たも其草の青き色の不變
なるをいはんとてときは
なる日かけのかつらなき
よみて我心のふかきほさ
を見せられしなるへしけ
ふしこそそのしは助字也

ときはなるひかけのかつらけふしこそころのいろにふかく見ゆけれ
かへし
たれとなくかゝるおほみにふかゝらんいろをときははにかゝたのまん
藤つはの人々月夜にありさけるを見てひとりかもとにつかはしけ
る

清正

たれとなくおほろに見ゆし月影にわくるころを おもひしらなん
左兵衛督師尹朝臣につかはしける

本院、兵衛重元女

春をたにまたてなきぬる鶯はふるすばかりのころなりけり

健案抄云おほみとは新嘗會に下合の人は小忌をさるさなき人の例の束帯したるを其夜は
公卿といふ云云愚案小忌さば背摺さて山笠にてする物を着するを小忌王卿な江次第にいへり
に其外束帯したるを大忌といひ習はして數多ありされば此歌に誰とふかゝるおほみにあまたある
の色さも頼かたしとなるへし
藤つは 村上天皇の中后安子九條右大臣師輔公の女藤室におはせし由榮花物語に有其御方の女房逢の月
たれとなくおほるに 數多ほの見し人々の中に君一人に取分たる我心さしをしれと也
春をたにまたてなき 序歌也鶯の冬の中に古集にてなく事をいひかけて我をふるすばかりの心さ見るさ恨む心なるへし

夕されは我身のみこそ 夕
去はは夕になればさ也古
今「管々に枕定めんかた
もなしいかにれし夜か夢
に見ゆけん 此心にてよ
めるにや

夢にたにまたみぬ 夢にも
現にもみてこそ戀へけれ
また逢みの人のかく戀し
きはいつに習ひし心そこ
也

おもふてふことを 思ふ
さいふ事は君にのみこそ
いふへけれたくもなへ
てにいひふるしたると也
あな戀しゆきてや 爲家抄
云きの國の浦初島に近來
よむ歎六帖にはきの國に
今も有てふさ有或抄云津
國の人を浦初島にそへて云也

月かへてきみを見ん 月かへてこは此月ならて來月歸りて君を逢みんさいひしかとも日をたにのへす毎日戀しくおもふ物
なご也

題しらす

兼茂朝臣女

夕されは我身のみころかなしけれいつれのかたにまくらさためん
ありはらの元方

夢にたにまた見ぬなくに戀しきはいつにならへるこゝろなるらん
みふのたみね

おもふてふことをうねたくふるしけるきみにのみころいふへかりけれ
戒仙法師兵衛佐なりける人
の子と大和物語云

あなこひしゆきてや見まし津の國のいまもありてふうちのはつしま
やひこなき事によりて遠き所にまかりてたゞん月はかたになんま
かりかへるへさといひてまかりたりてみちよりつかはしける
貫之

月かへてきみを見んといひしかと日たにへたてすこひしき物を
おなし所に宮つかへし侍て常に見ならしける女につかはしける

いせの海にしほやく 序歌
也藤衣は服衣なりても荒
々しき衣をいへり衣は身
に馴る物なれば同所にて
常に馴るとはすれさ運ぬ
さいはんとて上句はよめ
るなるへし

わたのそこかつきて 海の
字をわたさよむ也かつき
ては海士のかつくなと海
中に入事なり君を思ふ心
の深さくらへに海中に入
てこゝろ見しらんさ也

から衣かけてたのまぬ 衣
は衣架に掛る物なれば枕
詞にをけり人の妻さは思
ひなから猶かけて頼むさ
也

あちかりし波の心は すこ
しによせしは洲越を藤越
にそへて也心は彼女のさばきたる心はつらけれさ猶藤の外に聞し聲は戀しかりしといふ事を海邊の縁にてよめる也

藤原俊隆 愚本勘物云中納言有徳男イ本藤原の千陸勘物云淑勢息

いせの海にしほやくあまの藤衣なるとはすれとあはぬきみかな
題しらす

みつね

わたのうこかつきてしらんきみかためおもふころのふかさくらへに
人のおとこにて侍る人をあひ知て遣しける
右 近

からころもかけてたのまぬ時うなき人のつまどはおもふものから
ひとのもとにまかれりけるにすのどにすへて物いひけるをすを引
あげればいたくさはさければ歸りて又のあしたにつかはしける
女のさま也

あちかりし波の心はつらけれどすこしによせしてゑろこひしき
あひしりて侍ける女の心ならぬやうに見ゆ侍ければつかはしける
女の心の心得かたささなるへし

藤原守 正兼輔男
藤原俊隆朝臣

いつかたに立ちかくれつゝ
 古今「思ふてふ人の心の
 くまこきに立ちかくれつゝ
 見るよしもかなを本歌な
 るへし思ひくまなくさは
 思ふかひなき心也人の心
 のくまにこそ立かくれつゝ
 見るさいへ女の心の思
 ひくまなくあれはいつか
 たにたうかくれ見んやう
 もなしさの心也女の心ふ
 らぬさまを恨みたる心な
 るへし

つらきをもうきをも 人の
 つらきうきなきいふ事も
 よそにこそ見つれ我身は
 近き世に見しこよよさ也
 ふちは瀬になりかはり 飛
 鳥河の淵瀬も渡り見てこそ知
 へけれ人の心も逢見すしては
 定不定も知まじきと也古今「
 きのふの淵をけふは瀬なるを
 本歌也
 いとはるゝ身をうればしみ
 あすか川せきてとむる そなたに
 我をせきとめられは我も淵瀬
 定めとは何かいはせんさ也

いつかたに立ちかくれつゝ見よどてかおもひくまなく人のなりゆく
 おどこの心やうゝかれかたに見え行ければ

土 佐

つらきをもうきをもよろに見しかども我身はちかき世にころありけれ
 女に心さしなるよしをいひつかはしければ世中の人の心さためな
 ければたのみかたきよしをいひて侍ければ

在原 元方

ふちは瀬になりかはるてふあすか河わたり見てこそしるへかりけれ
 たいしらす

伊 勢

いとはるゝ身をうればしみいつしかとあすかかはをもたのむへらなり
 かへし

贈太政大臣時平公

あすか川せきてとむる物ならばふち瀬になるとなににいはせん
 鳥河の淵瀬も渡り見てこそ知へけれ人の心も逢見すしては定不定も
 知まじきと也古今「きのふの淵をけふは瀬なるを本歌也
 いとはるゝ身のかなしさに淵瀬定めぬ人をも頼んさ也飛鳥河大和也

女四のみこにをくり侍ける

右 大臣 九條

あしたつの澤邊に 心は雲
 のうへのみさは皇女の
 御事なれば也毛詩「鶴鳴
 于九皋聲聞于天」此心
 なり
 あしたつの雲ぬに 澤へに
 年はへぬれともいへる
 なさかめて也まこと雲ぬ
 に心をかけはきこゆへし
 世をへて澤にのみはすま
 さらんとあるへし
 松山につらきながらも つ
 らき人とは思へささすか
 に契をたかへて思ひ絶ん
 事は悲しき物をさ也
 枇杷左大臣 三本=如此一
 本ニなりひらの朝臣とあ
 り清輔朝臣の本も葉平に
 や登草子に其所有て發端に註す今三本枇杷左大臣とあるに隨てかくのこさし
 よひのまにはや慰めよ 詞書
 の遅く翻りければに心を付へし早く來て語り慰めよあはてほさへし床をも打はらばんにさ也
 わたつみさあれにし 久しく中絶て荒し床を今更はらば、袖のぬれんと心をわたつみさあれにしさいひかけて泡を淨んと
 よめり一だひ心かはりし人は遂ぬにしかさ也

あしたつの澤邊にとしはへぬれともころは雲のうへのみころ
 かへし

あしたつの雲ぬにかゝる心あらはよをへて澤にすまするあらし
 せうろこのつかはしける女の又こと人に交つかはすどきとていまは
 思ひたねぬといひをくりて侍りける返事に
 贈太政大臣

松山につらきながらもなみこさんとはさすかにかなしきものを
 宮つかへし侍ける女ほど久しく有て物いはんといひ侍けるにをろ
 くまかり出ければ
 枇杷左大臣 仲平公

よひのまにはやなくさめよいろのかみふりにしとこもうちらふらふく
 返し
 伊 勢

わたつみとあれにし床をいまさらにはらは、袖やあはとうきさん
 わたつみとあれにし 久しく中絶て荒し床を今更はらば、袖のぬれんと心をわたつみさあれにしさいひかけて泡を淨んと
 よめり一だひ心かはりし人は遂ぬにしかさ也

しほのまにあさりする 沙
 の間に求食る蟹も程に付
 て身をかひ有と思ふへき
 になさ人數ならぬやうに
 いひくたすらん心の心也
 あちきふくなどか 契りな
 たかへん事は更に思ひは
 なたたるま也松山の古事
 前に註

岸もなくしほしみちなは
 しほのしは助字也岸も
 なき迄深く沙彌は松山も
 波の下ならん也心あた
 にあふれば契りもたかへ
 給ふへしこの心也
 よこにもなけき 世さ
 もに歎きのみつもある身な
 れは守りもあるかひなさ
 に返すこの心を木をこり
 つかさひひかけて山守の
 あるかひなきはなそやこの心を添て也
 人しれぬわ物思ひの 心は明也

心さしありていひかはしける女のもとより人かすならぬやうにい
 ひ侍ければ
 長谷雄朝 臣中納言
 しほのまにあさりする蟹もをのかよかひありどころおもふへらなれ
 題しらす
 贈太政大臣
 あちきなくなどか松山波こさんことをはさらにおもひはなる
 かへし
 伊 勢

岸もなくしほしみちなは松やまをしたにて波はこさんどう思ふ
 肌の守りなき也
 まもりををきて侍ける男の心かはりにければ其まもりを返しやる
 とて
 伊衛朝臣のむすめいすき
 よど共になけきこりつむ身にしわれはなうやまもりのあるかひもなき
 人の心つらくなりにければ袖といふ人をつかひにて
 よみひとしらす
 人しれぬわ物おもひのなみたを袖につけてる見すへかりける

山のはにかゝるおもひの
 文などををこするおもてはかさまになりぬへしとて
 山のはにかゝるおもひのたえさらは雲のなからもあはれとおもはん
 四條の南を町尻といへり
 藤原真忠かむるう
 年右少将天曆五年左馬頭
 師氏貞信公子藤原大納言
 もろうちの朝臣
 なさながすなみたのいとらひぬればかなさみつも袖ぬらしけり
 たししらす
 源 た の じ 頼
 夢のことはかなき物ばなかりけりなにとて人にあふと見つらん
 心さし侍ける女のつれなきに
 よみ人しらす
 れもひねのよなく夢にあふ事をたかたさのうつらとともうな
 返し
 時のまのうつらとをしのふころころはかなさめめたはらなりけれ
 思ひねのよなく夢に
 面き人を思はぬ夜なれば毎夜夢にてあふな是を片時の現にてかくあはまほしき也
 時のまのうつらとをしのふ 久しくこそあはまほしがるへけれ時のまとしたはる心はかなき夢にもさすてまらりけれ
 なさな也

山のはにかゝるおもひのたえさらは雲のなからもあはれとおもはん
 四條の南を町尻といへり
 藤原真忠かむるう
 年右少将天曆五年左馬頭
 師氏貞信公子藤原大納言
 もろうちの朝臣
 なさながすなみたのいとらひぬればかなさみつも袖ぬらしけり
 たししらす
 源 た の じ 頼
 夢のことはかなき物ばなかりけりなにとて人にあふと見つらん
 心さし侍ける女のつれなきに
 よみ人しらす
 れもひねのよなく夢にあふ事をたかたさのうつらとともうな
 返し
 時のまのうつらとをしのふころころはかなさめめたはらなりけれ
 思ひねのよなく夢に
 面き人を思はぬ夜なれば毎夜夢にてあふな是を片時の現にてかくあはまほしき也
 時のまのうつらとをしのふ 久しくこそあはまほしがるへけれ時のまとしたはる心はかなき夢にもさすてまらりけれ
 なさな也

玉津しまふかき入江を 紀
伊名所也序歌也下句心明也

紀内親王 作者種類 桓武
御子云々 紀伊内
親王三品仁和三年六月六
日薨八十八云々
津の國の名にはたゞまく
御案抄云すくもたゞ火さ
は浦に住置なきは築くつ
なつき集てたけは下にこ
かるんともゆり云々いひ
出れば名にたゞん事のお
しければこそ下にこがる
れ何ほさか苦しき物みさ
也

夢路にもやとかす すのこ
にふしあがして一夜露にぬれしを
なみた河ながすれ 涙をながし
みるめりるかたそ 近江は湖なれは海松和布かる

見るめりるかたそ 近江は湖なれは海松和布かる
見るめりるかたそ 近江は湖なれは海松和布かる

題しらす

くろぬし

玉つしまふかき入江をこくふねのうさたるこひも我はするかな

紀内親王

津の國のなにはたゞまくおしみころすくもたく火のしたにこかるれ

人のもとにまかりていれさりければすのこにふしあかしてかへる

とていひ入侍ける

夢路にもやとかす人のあらせせはねさめに露ははらはさらまし

返し

なみた河なかなさめもある物をばらふはかりの露やなになり

心さしはありなからえわはさりける人につかはしける

見るめかるかたうあふみになしと聞玉もぞへやあまはかつかぬ

見るめりるかたそ 近江は湖なれは海松和布かる
見るめりるかたそ 近江は湖なれは海松和布かる

返し

なのみしてあふ事なみあ
ふみは名のみして達か
たき障のみさげき内にい
かて雲がつきても忍はん
こ也波早きには深もかつ
きかたきによせたるし
かつらさやくめちの 役行
者命峰山と真城との間に
岩橋なかけんきて諸神に
かけしむるに萬城の一言
主神形見にくしきて登は
役せず行者怒りて咒縛せ
しにより橋半にして止め
其橋ならぬ我中なれば中
空にしてはえやむましき
まの心也
かくれぬにすむなし鳥の
隠沼は物かくれの沼也人
しれぬれをなく心をそへ
てよゆり

なのみしてあふことなみのしけさまにいつかたまもをあまはかつかん
心さしありて人にいひかはし侍けるをつれなかりければいひわつ
らひてやみにけるを思ひ出てしきりにいひをくりける返事に心な
らぬさななりとへりければ
の自由ならぬと也

かつらさやくめちのはしにあらはころおもふころをなかるらにせめ
人のもとにつかはしける

かくれぬにすむなし鳥のこゑたえすなけとかひなさものにう有ける
つりとのみこにつかはしける

つくはねのみねよりおつるみなの河こひうつもりてふちとなりける
あひしりて侍ける人のまうてこすなりて後心にもあらず聲をのみ
心也

さくはかりにて又をどもせず侍ければつかはしける
よみ人しらす

つくはねのみねより 支官云筑波根美奈渡河常陸の歌の心はほのかに思ひ初し事の深き思ひさなるを水の幽なるかつもり
て淵なるにたゞへんこへる也此河の末は瀬河へおつるといへり

かりかねの雲のはるかに
 の心にありし聲をの
 みぎよてのち又なさせぬ
 事を今はのまりのこゑに
 そありける也
 今はとてゆきかへりぬる

今は限りての聲ならは
 追風の吹やるにても聞ゆ
 ましげにさかきりし思は
 ればこそ聲も聞ゆれき也
 心よりうきたる舟に 我心
 かりかぐさきたる人にあ
 ひそめて日こごに袖わり
 すと也さうつらく枯
 かつたになりし人を歎く心
 也

わすれなんともふ心の
 等閑になき音せぬとい
 ふなうけてさうになな
 さりに音信しでやまる物
 はたむまじき深切なるやう
 千はやふる神ひさかけて

かりかねの雲のはるかに
 かにきこはしはいまはかさりのこゑにう有ける
 かへし
 兼 覽 王のかれみのおほきみ

今はとてゆきかへりぬるこゑならはをひかせにてもきこえましやは
 おとこのけしきやうつらけに見ゆければ

こゝろからうきたる舟にのりうめてひと日も波にぬれぬ日うなき
 おとこの心つらくおもひかれにけるを女なをさうりになどかをとも
 せぬといひつかはしたりければ よみ人しらす
 わすれなんともふ心のやすからはつれなきひとをうらみましやは
 よひに女にあひてかならずのちにあはんとちかことをたてさせて
 あしたに遣しける

千はやふる神ひさかけてちかひてしこともゆしくあらかふなゆ
 藤原しけもと遊騎少將

院に宮仕の夫和といふ女房也
 院のやまをにあふさつかはすと 右 大 臣 師輔公
 おもひには我こゑ入てまどはるれあやなくさみやすししかるへき
 かねみちの朝臣かれかたになりてとしこゑとみらひ侍ければ
 元平のみこの母太大臣顯光母
 おら玉のとしもこゑぬる松やまの波のこゑるはいかゝなるらん
 もとのちにかへりすむとさして男のもとに遣しける
 よみ人しらす
 わかためはいとゝあさくやなりぬらん野中のしみつふかさまされは
 女のもとにつかはしける 源 中 正
 おふみちをしるへなくとも見てし哉せきのこなたはわひしかりけり
 かへし しもつゆ
 みちしらてやみやはしなぬ逢坂のせきのあなたはうみといふなり

おもひには我こゑ入て お
 もひを火にそへて我こそ
 入てまごへ君には扇をま
 いらすればあさなく涼
 しくおはせんよと也
 おら玉のとしもこゑぬる
 契たひて年も離るるが
 のく心かはり給へる心は
 いかにこの心なるし
 わかためはいとゝあさくや
 能因歌枕云野中の清水さ
 はもこの妻をいふといへ
 り此歌心明也今古「古の
 野中の清水ぬるけれとも
 との心をしる人そくむ
 是を本歌にてよめりこそ
 いまの女の歌也
 おふみちをしるへなくとも
 仲人あくても逢きはしき心なるへし下句は古今「音羽山音に聞つ逢坂の關のこなたに年もふる歳の心也あはて能しき心
 なるべし
 みちしらてやみやはしなぬ逢坂のせきのあなたはうみといふなり
 おほく底井なき事になるといへはと也

つれなきをおもひしひふ
 しのふのさねかつらさは
 信天山の五味子也離面を
 恨みすして忍ぶほとに果
 はくるなもいとふさ世か
 つらばくるといはんさて
 也

いまさらに思ひ出しさ
 離
 面き人は思ひ出しさ堪忍
 しても猶戀しさに忘れた
 しさ也

わかためは見るかひも 袖
 中抄云忘草は萱草也本草
 圖經云合人好三歡樂一
 忘憂處上略註此歌の
 心は我ためには忘草を見
 るかひもなしたとひ萱草
 をみても忘らるゝ程の戀
 ならねはさ也

あひみてもつゝむ 人まは
 人のなき間也心は明也
 いなきもいひばなちてよ

女のもとにまかりたるにはやかへりねとのみいひければ
 よみ人しらす

つれなきをおもひしひのふのさねかつらばはてはくるをもいとふなりけり
 あつよしのみこの家にやまどいふ人に遣しける
 左 大 臣

いひかはしける女のいまは思ひ忘れねといひ侍ければ
 紀はせおの朝臣 中納言長谷雄 藤原正忠杉籠子

わかためは見るかひもなし忘れくさわするはかりのこひにしあらねは
 しのひてかよひける人に 藤原ありよし 有好左馬助 泉大將子

あひみてもつゝむ思ひの侘しきは人まはのみそねはなかれける
 物のいひけるおとこいひわつらひていかはせんいなともいひはな
 ちてよといひ侍ければ よみ人しらす

いやくともいひばなてよき也

なつまたのなはしる 心の
 池名所にや歌枕八雲等に
 も見ゆす只心の水の類に
 て心の事なるへし和名ニ
 城 淮南子云 決レ塘
 發 城計 慎云 城所三以
 通 二 城 一 池のいひこ
 添て也昔代水は絶もも極
 を發て水をいれじと云て
 いなきもいひばなつまじ
 さきなり

かたゝかへに人の家に
 もふ人をくして方違に行
 きし所にて逢初しなるへし其さま歌にみゆ

千世へんを契をきでし 根さしそめてしは松の根の事
 事の忘れかたさしたとみつかはせし後朝の歌さみゆ
 これを見よ人もすさめぬ 八雲御抄にすさめぬはめてぬ也云々人もさてきりあへぬ戀に輝のもわけがらのこころくやつれば
 てしすかたを見よ是をあはれと思へとの心にかくよめり
 あひみてはなくさむ 日比あはて戀し時はあはなくさむこころもやと思ひしに逢見てはなつかしさもまさり別きての名残
 もこそ戀しけれ也名残しものしは助字なり

をやまたのなはしる水はたぬぬともころの池のいひははなたし
 かたゝかへに人の家に人をくしてまかりてかへりてつかはしける
 千世へんをさきりさきてしひみ松のねをしろめてしやとばわすれじ
 物のいひける女にせみのからをつゝみてつかはすとて
 源重光朝臣 大納言 代明親王一男

これを見よ人もすさめぬ戀らとてねをなくむしのなれるすかたを
 人のもとよりかへりまうてきてつかはしける
 坂上是則

あひみてはなくさむやとる思ひしになころしもころこひしかりけれ
 人 不 人

後撰和歌集卷第十二

戀歌四

女につかはしける

敏行朝臣

わかこひのかすをかうへはあまの原くもりふたがりふる雨のごと
わすれにける女を思ひ出てつかはしける

読人不_レ知

うちかへし見まくとほしき古郷のやまごなてしてゐるやかはれる
女に遣しける

枇杷左大臣仲平公

山ひこの聲にたてしも年はへぬわか物おもひをしらぬ人さけ
身よりあまされる人を思ひかけてつかはしける

紀友則

たさるかるあまにはあらねどわたつみのそとをもしらすころ哉
返事持たりければ又かざねてつかはしける

わか戀のかすをくもりふ
たかり降雨の歌のこく
こいふ心なるへし憂塞
雪おほふ心也
うちかへし見まくと一た
ひ忘れたる人なれども又
打返し見まほしきおそな
たには早ゆかりもやし
けんごの心を撫子にそへ
ていへり古今「あな戀し
今も見てしが山かつの垣
保に咲るやまご撫子
山ひこの聲にたてし山彦
は聲に立てしの枕詞也思
ふ心なひひ出しも巳に年
へたり情なく物思ひ知の
人も今は聞知給へりこ
也
たまもかるあまには
く思ひいりし心なるへし
みるもなぐもなきかへるへし返すりてこいふ心なれど
我道文を見る事なきに添し也

みるもなぐもなき海のはまた出てかへるくもらみつるかな
は返すりてこいふ心なれど水より歸るにへたり終に返事なき心を
我道文を見る事なきに添し也

こりすまの浦のこりすま
の浦は須磨の浦也あな
る人の立ふる見しほこ
もなぐ歸りて又來かたき
を恨心也斗かは哉也
せまこひてあはつの瀬邊
水瀬津邊近江也瀬邊をこ
りて遠見すともあひ馴た
る影を忘るなき也
ちのけれなき下がはれ近
しるしもなく京にても度
あはれの中なれば今近江
へゆきては瀬邊坂の關の
外をさ思ひた給はんそ
この心なるへし
いまはさきてこすまに今は
とぞ來すこそへてこ男
の髪束なればせみのから
はさよみてかこい人なら
んこは思はさりしこの心なるへし
わすらるる身をうつし
かけにたに見えもや

あたに見む侍けるおとこに
こりすまの浦のしらなみ立いてよるはともなくかへるはか
あひしりて侍ける人のあふみのかたへまのりければ
せまこひてあはつ中興の森のおはすとも清水に見むし影をわするな
返し

ちかけれとなにかはしるも逢坂のせまのはかそとあもひたねな
つらくなりけるおとこのもといははとてうらさくなどかへし
つらうかはすとて

つらうかはすとて
つらうかはすとて
つらうかはすとて

つらうかはすとて
つらうかはすとて
つらうかはすとて

つらうかはすとて
つらうかはすとて
つらうかはすとて

つらうかはすとて
つらうかはすとて
つらうかはすとて

つらうかはすとて
つらうかはすとて
つらうかはすとて

女のおなかの家にまかりて
女のすむ田舎の家に男の
行て門たゞきし也

あしひきの山田の そうつ
は水邊にしかけて水の力
に打ならす鹿驚し也門を
たゞき佐しにそへて也扱
むなしく歸る事を野にい
ひかけし也

戀をしこひはさいへり 古
今「種」あれば岩にも松
は生にけり戀をしこひは
あはさらめやは「我むす
めを思ひだにし給は、逢
んと也

たねはあれどあふ事母のくひしたねはあれど逢たたくしていつかくと待てのみ年ふる歌をよめり逢たたくは岩の
縁也奥義云古今「たね」あれば岩にも松は生にけり
ひたすちにいとひはて 我を一向にいとひはてたらは吉野山に入てゆきまをしらぬ身とならん也吉野は奥深き山にて昔
より隠家せし所也次の歌の註に委し

男の物などいひつかはしける女のおなかの家にまかりてたゞき付
れどえさゝつけすや有けんかともあけす成にければ田のほとりに
かへるの鳴けるをさへて

あしひきの山田の そうつ 打佐てひとりかへるのねをうなきぬる
文つかはしける女の母の戀をしこひばさいへりけるかとしころへ
にければつかはしける

たねはあれどあふ事かたき岩の上のまつにてとじをふるはかひなし
女につかはしける
ひたすらにいとひはてぬる物ならばよものゝやまにゆくるしられじ
返し

わかやとゝたのむよしのに君しいちはおなじかさしをさしこそはせめ
たねはあれどあふ事母のくひしたねはあれど逢たたくしていつかくと待てのみ年ふる歌をよめり逢たたくは岩の
縁也奥義云古今「たね」あれば岩にも松は生にけり
ひたすちにいとひはて 我を一向にいとひはてたらは吉野山に入てゆきまをしらぬ身とならん也吉野は奥深き山にて昔
より隠家せし所也次の歌の註に委し

野カサレ

くれなるに袖をのみ 心は
明也君をうらむるに袖の
裏の縁もあるにや
くれなるになみた 泪の色
紅にかはるさ日比きし
は偶ならんと思ひしに今
身の上にある物をさ也
紅になみたしこくは しは
助字也縁葉も紅葉するこ
さく紅葉も色こくたにあ
らは縁の袖も紅葉せんさ
也六位なる人に返哥なき
なるへし

いにしへの野中のし水 童
蒙抄云野中清水河内國に
あり又播磨國にもあり云
云愚案此哥々古今もこの
心をしる人そくむさよみ
し心にて彼文を此水になそらへたるへしさしくむは水くむ縁也帯水巻にも泪もさしくみ云云

あま雲のはるよも 心は明也袖のみぬるへ思ふかひなき心なるへし
あふことのかたふたかりて 逢事の難きといひかけ也必來んと思ふ心の遠ふといふに方違への心をうへてよめるなるへし

たいしらす

くれなるに袖をのみ ころ染てけれきみをうらむるなみたかゝりて
つれなく見ゆる人に遣しける

くれなるになみたうつると聞しをはなといつはりとわれおもひけん
かへし
紅になみたしこくはみどりなるそてももみちと見ぬまし物を
あひすみける人心にもあらで別にけるか年月をへても逢見念どか
さて侍ける文を見出て遣しける

いにしへの野中のしみつ見るからにさしくむものはなみたなりけり
おもふ事侍りて男のもとにつかはしける
あま雲のはるよもなくふるものは袖のみぬるゝなみたなりけり
かたふたかるとて男のこさうりければ

あふことのかたふたかりて君こそすはおもふころのたかふはかりそ
あま雲のはるよも 心は明也袖のみぬるへ思ふかひなき心なるへし
あふことのかたふたかりて 逢事の難きといひかけ也必來んと思ふ心の遠ふといふに方違への心をうへてよめるなるへし

ここのはなけなる物さ
 なけなるはなをさりの心
 也言葉は頼れぬ物ながら
 思はぬためにいふ言の葉
 は君もしらん我聞は思は
 めにはあらて思ふ程をも
 君知んこ也
 しらなみのうち出る 序歌
 也清千鳥跡とは今つかは
 す文の事なるへし白波の
 うち出るといふも胸にい
 ひ出る事をそへてにや
 おほしまに水をほこひ 序
 歌也大島八雲御抄備前云
 云正義云大島水なきに
 り陸より水を島人の運ぶ
 舟を水運早舟と万葉にも讀也
 ひたふるに思ひなほそ 世の常にて人の心化なれば古さるゝ歌も一向には思ひわひそと也
 よのづねの人の心を ふるすはよのづねならめさも我は未見さる事なれば歌き侍り何のよのづねと世上を見合すまてもあ
 らん我は此たびの歌きに消果へし物をも也
 すみそめのくらまの 墨染はくらまの枕詞也たさるゝはくらま所の縁也淨藏歸りきたれかしの心也此歌大和物語に有此
 女密通也

女のもとにつかはしける 朝忠朝臣 中納言三條右大臣定方男
 しらなみのうち出る濱のはま千鳥あどやたつぬるしるへなるらん
 女につかはしける 大江朝綱朝臣 参議從四下玉淵子
 おほしまに水をほこひしはや舟のはやくもひとにあひ見てしかな
 伊勢なん人にわすられてなけき侍とさへてつかはしける
 贈太政大臣時平公
 ひたふるに思ひなわひそふるさるゝ人のこゝろはそれるよのづね
 返し 伊勢
 よのづねの人の心をまたみねはなにかこのたびけぬべき物を
 淨藏くらまの山へなんいるといへりければ 中興近江守云云
 平なかさかむすめ
 すみろめのくらまの山にいる人はたさるゝもかへりさなゝん
 日へても影に見ゆる 或
 抄云時々にも影の見ゆ
 るはつらきながら絶ぬ
 心にてあると也玉かつら
 はつらきの序絶ぬも縁也
 たかさこの松をみさり 男
 の下心移ふなしらて變せ
 め色さ見し事よこ也 爲
 家抄云松の下紅葉の心也
 とさわかぬ松のみさり 其
 下の紅葉さみゆるは我限
 なき思ひにもゆる色そと
 也
 水鳥のはかなき跡に 島の
 跡はかりかよはして年を
 ふる縁にこそあれはかな
 しさ也江を縁にそへて也
 波のうへにあどやは 或抄
 云文は水にふかきたるは
 さの事也うきて年へたるさ
 こしやるはそれと物の数にて
 はなしと也思波の上に跡や
 はみゆるさば水鳥の跡の波
 には見
 らずはかなき心也
 いな舟のさいふ事を 古今い
 なにはあらす……

日へても影に見ゆる 或
 抄云時々にも影の見ゆ
 るはつらきながら絶ぬ
 心にてあると也玉かつら
 はつらきの序絶ぬも縁也
 たかさこの松をみさり 男
 の下心移ふなしらて變せ
 め色さ見し事よこ也 爲
 家抄云松の下紅葉の心也
 とさわかぬ松のみさり 其
 下の紅葉さみゆるは我限
 なき思ひにもゆる色そと
 也
 水鳥のはかなき跡に 島の
 跡はかりかよはして年を
 ふる縁にこそあれはかな
 しさ也江を縁にそへて也
 波のうへにあどやは 或抄
 云文は水にふかきたるは
 さの事也うきて年へたるさ
 こしやるはそれと物の数にて
 はなしと也思波の上に跡や
 はみゆるさば水鳥の跡の波
 には見
 らずはかなき心也
 いな舟のさいふ事を 古今い
 なにはあらす……

あひしりて侍ける人のまれののみ見むければ
 伊勢
 日へてもかけに見ゆるは玉かつらつらきながらもたぬなりけり
 わさどにはあらす時く物いひ侍ける女ほど久しうとはす侍けれ
 は よみ人しらす
 たかさこの松をみどりを見しことばしたのもみちをしらぬなりけり
 返し
 とさわかぬ松のみどりもかさりなきおもひにはなをいろやもゆらん
 文かよはすはかりにてとしへ侍ける人につかはしける
 水どりのはかなき跡に年をへてかよふばかりのねにころ有けれ
 かへし
 波のうへにあどやは見ゆる水鳥のうきてへぬらんとしは數かは
 せうそつつかはしける女のもとよりいな舟のといふ事を返事に
 いな舟のさいふ事を 古今い
 なにはあらす……

あがれよる瀬の白波よま
はそひみればそなたの心
遠きにはしまてさはい
ひさらせむいな舟の輪る

あまの世も思ひのし
もかみ川深きにも
はなすきははに出る

はなすきははに出る
またさふきぬる秋のかせかな
こころさしをろかに見ゆる人につかはしける

またさうし秋はさねれとみし人のこころはよりになりもゆくかな
かへし

さみをおもふ心なさは秋のよにいつれまさるとうらにしらなん
世とるよとそになるさを對していひて人の心の秋のうき事をよめる也
さみをおもふ心長きは 我は秋きてよそになるにはあらず君は思ふ心は秋のよの長きとくらふよと也

ある所にあふみといふ人をいとしのひてかたらひ侍けるを夜あけ
てかへりけるを人見てさゝやきければ其女のもとにつかはしける
坂上つねかけ常景長門守

かみ山あけてさつれば秋霧のけさやたつらんあふみてふ名は
あひしりて侍る女の人にわた名たち侍けるにつかはしける
生まれよの朝臣

枝もなく人におらるゝ女郎花ねをたにのこせうへし我ため
人のもとにまかりて侍るによいれねはすのこにふしあかしてつ
かはしける
藤原成國播磨守五位伊孫介連永子

秋の田のかりそめにしもしめてけるかいたつらいねを何につまゝし
平かねさかやうくかれかたになりにつかはしける
中務

秋風のふくにつけてもとはぬかな萩の葉ならはをどはしてまし
秋風のふくにつけても 人の枯々なるを歌ふる比秋風の萩のそよゆくを聞て扱も秋風の吹につけても此人のさばさるゝ萩の葉ならはなご打詠めたる風情哀なる歌なるへし

秋の田のかりそめにし
平かねさかやうくかれかたになりにつかはしける

秋風のふくにつけてもとはぬかな萩の葉ならはをどはしてまし

秋風のふくにつけても 人の枯々なるを歌ふる比秋風の萩のそよゆくを聞て扱も秋風の吹につけても此人のさばさるゝ萩の葉ならはなご打詠めたる風情哀なる歌なるへし

秋風のふくにつけてもとはぬかな萩の葉ならはをどはしてまし

きみ見すていく世へぬらん年月のなるごとにもみつるなみたか
かぐ年月をふるにつけて
涙も降るも世もみたか
哉也

なかくに思ひかけでは
始り思ひかければ其分
ふるな中々に思ひかけて
は遠路の恨の堪たき心
を衣に掛る身に馴るうら
むなき其縁語にて思ひり
うらむさひのけでこそ
うらむさひ古くなる世心は
思ひに恨るさし身にな
らさじ身なるれば衣の
古くなるさ聞き也悪く違
馴てふるさされてはいか
さの心なるへし

なけいともかひなかり心
は明也離所を歎心也
こぬ人をまつの葉にぬる人
を待さへて地をわがるるさ
はゆる思ひに消ゆるも無也
此歌大和物語三十九元良親王を戀奉て
説し由あり

さくの花うつる心を 菊の
紅にうつるひじ羅にふた
なひもさの白菊を見ゆる
やう一たひ忘れし申なれ
さ立陣りて遠まほじさ
也

いまはさてうつりばで
たひかはりし人を又は遠
見まほじさ也

けしきをみておやの 女に
いふけしきをみておやの
親の守ておはせぬ也
なめしてりも他 人目
の憚をまじりてかよはん
とすれ守り倍たりいつ
かよき障あらんこいふ心
を長雨の曇間なきにそへ
てよめる也

おなじくは君さならひの 雙池山城也
かけるふのはのめき 童蒙抄云
時時とほ思ささうはうの少
さやうなる物の春の日にもの
かける事のやうにほのめき
世云
歌の心はほのかに見しは夢か
と思ふさの心也
ほのみでもめなれにけり
ほの見なからも已にたひく
めなれしときけはれかへり
してこなたにむき目
撃りやうにさ

きみ見すていく世へぬらん年月のなるごとにもみつるなみたか
女につがはしける
なかくに思ひかけてはからころも身になれぬをうらむへらなる
返し
うらむさひもかけてこそ見めから衣身になれぬればふりぬどかさく
人につがはしける
なけいともかひなかりけり世の中に何にくやしうおもひそめけん
ぬすれがたになり侍けるおどこにつがはしける

こぬ人をまつの葉にぬるしら雪のさえころかへれくゆるおもひに
ぬすれ侍にける女につがはしける
さくの花うつるころをそく箱にかへりぬぐもおもほゆるかな

返し
人のむすめにいと忍ひてかよひ侍けるにけしきを見ておやのさも
りければ五月なかな雨のころつかはしける
なめしてりもわひぬる人めかないつか雲間のあらんとすらん
またわはす侍ける女のもとにしぬへしといへりければ返事にはや
しぬかしといへりければ又遣しける
おなじくは君さならひの池にこそ身をなけつとも人にいはれめ
女につがはしける
かけるふのはのめきつればたくれの夢かどのみろ身をたどりつる
かへし
ほのみでもめなれにけりと聞からにふしかへりころしなまほしけれ

承香殿中納言

承香殿中納言

承香殿中納言

承香殿中納言

ほしき心なるへし
あふみてふかたのしるへ

近江を遠見させて彼湖
水ニハ海松めなければあ
ふみさいふかたのしるへ
かえたらはかく見る事な
き事を行て恨んさ也

あふさかのせきを守る あ
ふみてふらんさばあふみ
さいふらん也親に守らる
身なれば運事のすべも
なしさ也

あしひきの山した水 口訣
の歌也思ひの瀬津心をせ
きかれたるさ也たきつ心
は切なる心也此歌古今戀
一に有然共返歌なし此集
に返歌を入んて置てい
れらるゝにや

木かくれてたきつ山水 思ひの切なる由に承れとも其しるしたも見すおほつかなしさ也
あかつきのなからましかは 曉のなほおき別る俗しきはあらし物をさ也露はおきての枕詞也
おきてゆくひさの心を 人の心はいかに有しもしらす我こそ先うき別に思消しさ也

せうそこしはくつかはしけるをち母侍てせいし侍ければ逢
侍らて

あふみてふかたのしるへもえてしかな見るめなきことゆきてうらみん
かへし 源よしの朝臣 参議舒男 昌泰三中将 春澄善繩朝臣の女

あふさかのせきともらるゝ我なればあふみてふらんかたもしられす
女のもとにつかはしける よしの朝臣

あしひきの山した水の木かくれてたきつころをせきうかねつる
返し よみ人しらす

こかくれてたきつ山水いつれかはめにしも見ゆるをどにころきけ
人のもとよりかへりきて遣しける 貫 之

あかつきのなからましかはしらつゆのおきてわひしきわかれせまじや
返し 讀人不知

おきてゆくひさのころをしら露のわれこそまつはおもひさぬれ
つらゆき

かくしつゝ世をや 古今雜
上の歌也下句尾上にたて
る松ならなくに云云此集
にては戀のしるじもなく
年ふる歌をいふなるへし
たかさこの松さいひつゝ
松は色かはらねは年へて
も其心かはらすさきかは
あひみんさ也

風をいたみくゆる煙の上
句は被親のいたくいひし
故立出歸りしこさをよみ
て下句は後こりす戀しき
心なるへし
いはねともわかかきり 心
はあきらか也
さみかねにくらふの 暗部
山城也君かあたる空
鳴のれにくらふる心に
ひかけて也下句は心明なるへし
こひてぬる夢路 其人をこひてれる夢には必我魂の其人のまにかよふ事いくよもかさなりてかよひなるゝかひなく疎きと
恨心也なるゝかひなくさいふ所此歌の哀なるまこなるなるへし

女のもとにおどこかくしつゝ世をやつくさん高砂のといふ事をい
ひつかはしたりければ

たかさこの松といひつゝとしをへてかはらぬいろときかはたのまん
人のむすめのもとにしひつゝかよひ侍けるをおやきつつけてい
どいたくいひければかへりてつかはしける

風をいたみくゆる煙のたち出てもなをこりすまのうらそこひしき
はしめて女のもとにつかはしける

いはねともわかかきりなごころをば雲井にどをさ人もしらなん
たいしらす

さみかねにくらふの山のほどさすいつれあたるをさるらん
せうそこかよはしける女をろかなるさまに見侍ければ

こひてぬる夢路にかよふ玉しるのなるゝかひなくうとき君かな

かへり火にあらぬ思ひ 鶴
舟の煙火なきころ河に浮
てもゆれなき思ひの
いかで泪の河に浮てもゆ
らん世思ひを火にぞへ
たり古今戀一にはあらぬ
我身のなそもかくと有
待くらす日はすかの 暮ほ
ゆかんと待くらす日は永
く覺えて逢夜は短きは
かなる事そと世管の根は
永き物也玉の緒は命の事
にて短き事を云也
はかなかる夢のしるし 夢
ははかなき物なからかく
まさしくまうてきたりと
見ししるしにたはかられ
て心よはくく問につはす也無夢に心よはきを現に實る云也
ふなきりに 等閑を言ふかと思ひもめくらとて大かたになさる心也
おもひねの夢を 思ひねに見し夢はかりひてやみな人物を何に中々に有きはしりにしそ也さやうに歸りてあらはなき
つれぬへき人のなきつれさるは心のかはりたるしの見られたれば何にかくき心を見あらはしけん夢とのみい思ひて
あらん物をさ也

女につかはしける
かへり火にあらぬ思ひのいかなればなみたの川にうさてもゆらん
人のもどにまかりてあしたはつかはしける
待くらす日はすかのねにおもほめてあふ夜しもなど玉のをならん
大江千里まかりかよひける女を思ひかれかたになりてとをさ所に
まかりにたりといはせて久しうまからす成にけり此女思ひ佗てあ
たる夜の夢にまうてきたりと見ゆればうたがひにつかはしける
はかなかる夢のしるしにはかられてうつゝにまくる身とやなりなん
かくてつかはしたりければ千里見待てなをさりにまことをと
ひなんかへりまうてこしかど心ちのなやましくてありつるとはか
ういひをくりて侍ければかさねてつかはしける
おもひねの夢といひてもやみなまし中くなになありとしりけん
おもひねの夢を 思ひねに見し夢はかりひてやみな人物を何に中々に有きはしりにしそ也さやうに歸りてあらはなき
つれぬへき人のなきつれさるは心のかはりたるしの見られたれば何にかくき心を見あらはしけん夢とのみい思ひて
あらん物をさ也

國に歸りて 大和に歸り女
のもさを尋て也
いつしかのねになさかいつ
しかあはれ心と思ひて大和
に歸りて事を鹿の音と
いひかけてより下句は
かのむすめの心かはりて
外になりて事をのへの淺
茅のうつるひかはりしに
比してかくよめるなり
ひきまゆのかくふた 無茶
抄云ふたこもりは同じま
ゆにかの二つこもり
たるを云桑こりによそへ
てきたたれてなくさよめ
る也愚案こきたたれてはか
きみたれて同心也女の
眞實にしもあらしきいへ
はかく賦にこきたたれ鳴をみせはやせ也
せき山のみねの杉村 關山は逢坂也序歌也姉より初めていふかひなく過ゆけと猶あひかたき也
おもひ出て音つれし 聲には無音にてかくふと思ひ出て音つれ給なき事にもこりすこたふる心は何事なりけん也何也
の期前にもあり

思房也
やまどのかみに侍ける時かの國のすけ藤原清秀かむすめをひかへ
んどちさりておほやけ事によりてあからさまに京にのほりて侍け
るほどにこのむすめ眞延法師にむかへられてまかりければ國に
歸りて尋ねて遣しける 忠房朝臣前註
いつしかのねになさかへりこしかどものへのあさははるつきにけり
せうそこつかはしける女の返事にまめやかたにもあらしなどいひ
て侍ければ
ひきまゆのかくふたこもりせまはしきくはこきたたれてなくを見せはや
ある人のむすめあまた有けるをわねよりはしめていひ侍ければさ
かさりければ三にあたる女につかはしける
よみひとしらす
せき山のみねの杉村すきゆけとあみふはなをるはるけかりける
朝忠朝臣ひさしうとをもせて文をこせて侍ければ
おもひ出て音つれしける山ひこのこたへにこりぬこゝるなになり

まらぬ物からしらす
かにはさすかに也忍び
くの中は夢のこころす
るさ也

うつゝにもあらぬ心は 忍
ふ中の見てもはかき物
思ひすればゆめのこころ
なるさ也

かきりなく思ひ入日の限
ふく思入と云かけて太秦
の方を詠やる心也入日と
共にの心也

さみの名のたつに 或抄云
宮の御名立ても苦しから
ぬほとこの我身ならは領し
まいらせん物をさ世愚案
おほよそ人さは一向の外
人をいふ也

たえぬるとみればあひぬる
詩人玉屑山雲絶復運三買
島の作り心に同じ心の上句なり雲はよそになりゆく物なればおほよそ人さいはんたりの序歌也たとひいかなるも一向の
よそ人さば我をおもふべからずさなるべし

いとしのひてまかりありきて
まどつまぬ物からうたてしかすかにうつゝにもあらぬ心ちのみする
かへし

うつゝにもあらぬこゝろは夢なれや見てもはかなき物を思へば
うつまさわたりに太輔か侍けるにつかはしける
小野道風朝臣

かきりなくおもひ入り日のごもにのみにしをやまへをなかもやるかな
女五のみこに 忠房朝臣

さみか名のたつにどかなき身なりせばおほよそひとになして見ましや
かへし 女五のみこ
たぬぬると見ればあひぬる白雲のいとおほよるにおもはすもかな
御座殿別當 小野宮太政大臣實賴公女前註
みくしげさのにはしめてあひてつかはしける

あつたゝの朝臣
いとかくてやみぬるよりはいなつまのひかりのまにもさみを見てしが
太輔かもとにまうてきたりけるに侍らさりければかへりて又のあ
したにつかはしける 朝忠朝臣

けふそへにくれさらめやは
此歌大和物語に後朝のよ
し見ゆけふそへにとはけ
ふさいへはさてふといふ
心也古今に「そへにさて
さすればかへりなまよめ
る詞の類也心はけふさて
も暮まじきは暮は行て
あはんと思へともまつ一
日のべたても堪がたきは
人の心の習ひなるよと也
いとかくてやみぬるよりは
稻妻の光りのまはわつが
なる事也かくあはてやむ
事の俗しきにしほしなり
共見んものなさ也
いたつらにたちかへりにし
あはてかへりし袖のひか
たき心也白波のなこりと風ふかれも大浪の後ニ猶餘波立物なれば也
なにいかは袖のぬるらん 名残有けもなき御心はへき見なきつるに袖のぬれことの給ふはまこしからずさ也
ちかひても猶思ふには 更にあはしき誓ひても猶思ふ心のあまからぬにはまけて逢ふすへしたとひ誓の罰に死ぬとも君かた
めにはおしむまじき命なればとの心なるへし

けふそへにくれさらめやはと思へともたへぬはひとのこゝろなりけり
みちがせ忍ひてまうてさけるにおやきつけつけてせいしければつか
はしける 太輔

いとかくてやみぬるよりはいなつまのひかりのまにもさみを見てしが
太輔かもとにまうてきたりけるに侍らさりければかへりて又のあ
したにつかはしける 朝忠朝臣

いたつらにたちかへりにし白波のなこりに袖のひるどきもなし
かへし 太輔

なにいかは袖のぬるらんしら浪の名残ありけも見えぬこゝろを
小野好古 誓言也
よしふるの朝臣にさらにあはしどちかかことをして又のあしたにつ
かはしける 藏のならし

ちかひても猶おもふにはまけぬへしたかためおしきいのちならねは
かへし

たき心也白波のなこりと風ふかれも大浪の後ニ猶餘波立物なれば也
なにいかは袖のぬるらん 名残有けもなき御心はへき見なきつるに袖のぬれことの給ふはまこしからずさ也
ちかひても猶思ふには 更にあはしき誓ひても猶思ふ心のあまからぬにはまけて逢ふすへしたとひ誓の罰に死ぬとも君かた
めにはおしむまじき命なればとの心なるへし

なにはめにみつとは 離波

女に見つはさいふに三

津の浦をそへて也 芦の根

のは夜のみしかきをいは

ん枕詞也 逢み事もなく

て夜の早くあけしか倍し

かりしと也

かへるへきかたも覺す 歸

ちんかたなく思ひわひた

るさま也 是ははやかへり

ねさいひし時のうたなる

へし

なみた川いかなる瀬 是は

道風かへりてのち進した

る返歌なるへし心は君はいかなる瀬より歸りしそ此方の水尾を見ぬかたくあやしき 涙河のふがへりしとの心也

いけ水のいひ出る みこもりは水籠也いひいてかかれて心のうちにこめてのみ年ふる事池のいひにひかけて水籠なごめ

める也

しのひてまかりければ 太輔にや はさりければ

なにはめにみつとは 太輔にや なしに芦のねのよのみしかくてあくるわひしさ

物いはんとてまかりたりければ 太輔にや とさたらてむねもちか侍りければ

はやかへりねさいひいたし侍れば

かへるへきかたもおほぬすなみた河いつれかわたるあさせなるらん

かへし

なみた川いかなるせよりかへりけんこなるみおもわやしかりしを

太輔かもとにつかばしける 太 敦忠朝臣

いけ水のいひ出ることのかたければ 太 みこもりなからどしうへにける

いけ水のいひ出る 太 みこもりは水籠也いひいてかかれて心のうちにこめてのみ年ふる事池のいひにひかけて水籠なごめ

める也

後撰和歌集卷第十三

戀歌五

たいしらす

業平朝臣

いせのうみにあふあまともなりにしが波かさわけて見るめかつかん

かへし

伊勢

おほるけのあまやはかつくいせの海のなみ高きうらにおふるみるめを

つれなく見侍ける人に

よみひとしらす

つらしとやいひはてまししら露の人にころはをかしとおもふを

題しらす

なからへは人のころも見るへきに露のいのちろかなしかりける

小町かあね

ひとりぬるときは待るゝ鳥のねもまれにあふ夜はわひしかりけり

いせのうみにあふ

なからへは人のころも又やはらく世もあちんを存命は其心をも見るへきにはかなき命なれば見えましきが

悲しき也 人は心強きに我身はかよはきを歎く心なるへし

ひとりぬるときは待るゝ 獨れには明るを待俗る故鳥のねも待るゝをまれに逢夜は明るを俗るゆゝ鳥のねのうき心也

うつせみのむなしき 死す

あまても忘るまじき我を

何に恨らんとの心也

いつまでのはかなき 心さ

しは有と見ゆる人なれば

言葉はたのもしきやうな

れき猶うたかはしき所あ

れはいつか心の秋風吹て

此言の葉もかはらんと

心をかよくめる也

うたのれのゆめばかりう

たのれの夢ほとわつつか

の逢事を長長しき秋のよ

すから思ひあかせしよと

也

秋のよの草のよさし 心明

也

いふからにうつらさや

うにがらにうつらに付て

思は草の脚にはさばら

しか心さして涙き故らさりしならん也

女のうらみをこせて侍ければつかはしける

ふかやふ

うつせみのむなしきからなるまでもわすれんとおもふ我ならなくに

おたなるおとこをわひしりて心さしはありと見ぬながら猶うたか

はしくおほむければつかはしける

よみ人しらす

いつまでのはかなき人のここのはかこゝろの秋のかせをまつらん

たいしらす

うたのれのゆめばかりなる逢事を秋の夜すからおもひつるかな

女のもとにまかりたりけるに門をさしてわけさりければまかりか

へりてあしたにつかはしける

兼輔朝臣

秋のよの草のよさしの侘しさはあくれどあけぬ物に有ける

返し

よみ人しらす

らふからにうつらさやさる秋のよのくさのよさしにさはるへしやは

人しれす物おもふ 秋の草

葉の露しけきにささらぬ

さ也

しつはたにおもひ 八雲御

抄云しつはたはひとへに

さいふ心也ぬの事によ

せてなとよめり云云爲家

抄には脱機はみたれたる

やうの物也云云されはひ

こへに思ひ亂て歎き明せ

しき也

あらかはさるなを恨み

たあはれも終に逢へき

中さ思へは人にも未逢さ

あらかはすあるを今まで男の逢の事さ女の恨也

はちすはのうへは離面 童蒙抄云蓮葉の裏に貝付と見たり 傳案抄云此歌をばすなはと書てそれを釋したる人あり案本に

はをろかに安き説に付てはちす葉さ密たり下略又云大納言本も蓮葉さかゝれたり師説イ本のはすなはゝぬなはのやうなる

物也但定家卿御説に任せてはすなはのを不用蓮葉を用ゆへし心は蓮葉の上はつれなく何さなくてうらには貝の付こさくた

さひ謙し中なりともうへは離面くあはぬ氣にして人のいひさばくには物あらかひしてこそあるへければまたあはぬにあち

かはさるはあやしき事さの心なるへし心を付へき歌也

ふりやめはあきたに見ぬ 八雲御抄云うたかた泡さ同歌案序歌也雨降はとはにはたつみなとにあはのうきてふりやめは跡

もなくさゆる也それをいひかけてかくつらしたのもしげなき男の心をたのみめるはかなき心を女のよめるなるへし

季子内親王 宇多皇女

かつらのみにこにすみはしめけるあいたにかのみこあひおもはぬけ

しきなりければ

人しれす物おもふ比のわかそては秋の草葉にをどらさりけり

しのひたる人につかはしける

贈太政大臣

しつはたにおもひみたれて秋のよのあくるもしらすなけさつるかな

せうそこかよはしけれとまたあはさりけるおとこをこれかたへの人

にはやあひにけりさいふ也

にけりといひさばくをあらかはさるをどうらみければ

よみ人しらす

はちすはのうへはつれなきうらにころものあらかひはつくといふなれ

おとこのつらうなりゆく比雨のふりければつかはしける

ふりやめはあきたに見えぬうたかたのさねてはかなき世をたのむかな

あはてのみあまたの夜 遠坂の名を逢事によせて也
 あはんと来ても人めし
 けられはあはての夕霧夜
 も歸る事さ歎く心也
 なひくかたありける すと
 にかくなひくかた有し人
 なまた世へす男の心をし
 らぬ人さおもひつるはか
 なさき也よにへぬさは
 伊勢物語にまた世へすこ
 覺ゆるるさ有に同じ
 れになけは人わらへなり
 女に捨らるへき歎をれに
 なけは人にわらはるへし
 今また女の心かはりの世
 にふれ渡らぬたに我が
 らさ思ひなしてやみなん
 さなるへし人笑
 いせのあまさきみし しは助宇也上旬心明也伊勢の體ならは幸かく戀しき時にみるめをがらせよと世我に見るはどの心を
 海松りによせて云也 戀しくはけけなたに 我忍びやかにうらうけたる顔は是なれば此影をうつしやるを見なくさめ也

女のもとにまかりてあはてかへりてつかはしける
 あはてのみあまたの夜をもかへるかな人めのしけさあふさかにきて
 女に物いふおとこふたり有けりひとりにかへりてさきさきい
 まひとりかつかはしける
 なひくかたありけるものをなよ竹のよにへぬものとおもひけるかな
 女の心かはりぬへきを聞てつかはしける
 ねになけは人わらへなりくれたけのよにへぬをたにかちぬと思はん
 文つかはしける女のおやのいせへまかりければともほまかりける
 につかはしける
 いせのあまさきみしなりなほおなしくは戀しきほどに見るめからせよ
 一條かもとにいとなんこひしきといひにやりたりければをたのか
 たをかきてやるごとて
 こひしくはかけをたに見てなくさめよわかうちどけてしのふかはなり
 一條平親王女

返し

伊勢

かけみればいと心は
 やうの影みればいと心
 まさびで戀しきなり近く
 逢見はかやうにぞぞる
 じがらしをちのかりぬ放
 じよさまじき顔かと思へ
 ばさ也此二首昔女とりの
 歌にぞ妹背の中の歌なら
 ばさ心戀の歌なれば此部
 に入也
 人こととうきなり知す 我
 むがじは人の上のうきを
 も知すありけりしけんか
 ら歎きばせさりしはむ
 かじながらの身ならほじ
 さき也
 ほさすなつき初 見馴た
 る心を郭公のなつきにそへて讀り夏木と懐くと添て也
 つれよりもおきうかり 新統の後朝なればおきうかりに泪さへそふ事を露さへかゝるさよめりおきうかりけるも露も露の
 餘情なるし
 かく霜のあかつきおき 寒霜の曉の別のうきを思はずは君が國中にとたせんやと也夜殿は閑也たひく来る人のと絶する
 な夜かれさいふ也

かけみればいとこゝろりまどはるちかへぬけのうとさなりけり
 人のむすめにしのひてかよひ侍けるにのらげに見えければせうそ
 こ有ける返事に よみ人しらす
 人こととうきをもしらすありかせしむかしなからのわか身ともかな
 見なれたる女に物いはんとてまかりたりければとるはしなからか
 くれければつかはしける
 ほどさすなつきそめてしかひもなくこそをようにもさゝわたるかな
 人のもとにはしめてまかりてつとめてつかはしける
 つねよりもおきうかりつるわかつかさは露さへかゝるものどうありける
 忍びてまてさける人の霜のいたぐふりける夜まからつとめてつ
 かはしける
 をく霜のあかつきおきをおもはずはさきみかよとのに夜かれせましや

霜をかぬ春よりのちのな
かめは長雨を詠めにそへ
て也夜がれば霜よにかき
られは寒霜のうさ故のこ
絶といふも誠しからず也

返し

霜をのぬ春よりのちのな
かめにもいつかはさみかよ
かれせさりし
思ひの外にさてたぬする事也
心にもあらで久しくどはさりける人のもとにつかはしける

源英明朝 臣 藤原家女

いせのうみのあまの あま
のまてかた御案抄に清輔
典義抄にあまのまてかた
さ有ひの事執行成大納言
の本にもまてかたとあり
俊成卿の歌海邊に給さ申
物沙中に候其かたの候な
るを見付て海人等急きて
是をさし取候なるないな
まなしと詠する由基俊申
候さと申 正 源案序歌也心にもあらすいとまなくて久しくさはすかゝるうき身のなからへなうらむといはんとて上句はよ
めり恨るも海邊の縁也

いせの海のあまのまてかた
いとまなみながらへにける身
をうらむる
めさりのたき女也
さかたう侍ける女の家の前
よりまかりけるを見ていつくへい
く

藤原ため 忠相男

あふこのかたのへさてそ
わかたき女のいつくへい
くそ問ゆへにあふ事の
がた野へ行と答る心也交野は河内也下句は
我身はあふ事の難さといふ野
さ同じ名に思ひおしてかの野にゆくと上句をさしはりたる也
君かあたり雲のに 宮路山入雲ニ 尾張玉葉集詞書ニ 三河云云或抄云君かあたりをよに見て遠くはは行まこと也愚案此
歌はおもふ人を置て東路に行人の別れたき歎きを讀しにや

あふこのかたのへとてう我は
ゆく身をおなし名におもひな
しつ
題しらす
よみ人も

君かあたり雲のに見つゝ宮路山うちこぬゆかん道もしらなく

おもふてふことのはいかに
思ふといへばまうなつが
とき其心未さけでうき物
さならずも哉さ世男の心
は頼がたけれと思ふとい
へば只あらぬさの心也
思ふてふことこそうけれ
世人の口まねに皆思ふと
はいふ事ふれば頼みかた
しこの心也榮竹はよにこ
いはん枕詞也

おもふてふことこの返事につかはしける
と し
おもふてふことこの葉いかになつかしなのちうさきものとおもはすもかな
たいしらす
兵 衛 兼茂朝臣の
思ふてふことこそうけれ竹のよにふる人のいはぬなげれば
よみひとしらす

俊子大和物語にも
在或刀自子大江玉
淵女

思はんと我をたのめし是
もたのめし詞の末さけの
歎也この葉さいふより
忘草とよめり
いまもてまきけて有つる
煩て消へき身の消すして
有しは君あれば也との心也露はなくといふ縁あるにて讀也
この葉もみな霜枯 日比たのめし詞も跡かたなくて久しくとはの恨をのへたる心也露は葉に置に頼めし其葉も枯たれば露
のやさりもあらしと也
わすれなんさいひし事にも
思はんとそたのめつれ忘んといはぬにいかて今をかきりの契りのやうに思ひて恨るそこの
心なるへし

思はんと我をたのめしこの葉は
わすれくさどそいまはなるらし
おどこのやまひにわつらひてま
からて久しくありてつかはしける
いまもてまきけて有つる露の身は
をくへさやとのあればなりけり
かへし
この葉もみな霜かれになり行は露
のやどりもあらしとる思ふ
うらみをこせて侍ける人のかへり
ことに
わすれなんといひしことにもあら
なくにいまはかさりと思ふものは
かへし

題しらすイ本ニヤン

うつゝにはふせとねられす
きのふの夢は仄かに逢
見し事を云なるへし其逢
し事を思ひ明せばれても
れられす又夢にも見ぬれ

うつゝにはふせとねられすおきかへりきのふのゆめをいつかわすれん
女につかはしける

はいよく忘れかたき心
なるへし詩關唯ニ求
之不得痛 兼 思
眼悠哉 悠哉 續傳反
側云云此詞似たる歟
チカヘ

さゝらなみまなくたつなる浦をこそよにあさしども見つゝわすれめ
雅子内親王承平二年十二月廿五日定
西四條の齋宮をたみに物し給ひし時心さしありて思ふこと侍け
るわひたに齋宮にさたまり給ひにければそのあくるあしたに櫛の
枝にさしてさしをかせける
あつたゝの朝臣

さゝらなみまなくたつ 我
を忘し女に遺したる歌に
や深からず思はへこそ淺
しと見限給はめかく深き
思ひなる物をさ也古今

いせの海のちひろのはまにひろふども今はなにてふかひかあるへき
あさよりの朝臣のとしころせううこかよはし侍ける女のもどより
無用との心也
ようなしいまは思ひわすれねとはかり申て久しうなりにければこ
と女にいひつきてせううこもせずなりければ
本院のくらい蔵

「底井なき淵やはさばく
山河の淺き淵にこそあた
波はたて さゝら波は小波也

忘れねといひしにかなふきみなれとどばぬはつらきものにならりける

いせの海のちひろのはまに 齊宮の御事なれば伊勢の海と也いかにあさり米むとも
大和物語ニハ今はかひなくおもほゆる哉とあり

今ほかひあらしと也良をそへて也此歌
わすれぬといひしに 我忘れ給へといひしにたかへる君にて忘れ給ふにはあれとも也

たいしらす

よみひと

春かすみはかなくたちてわかるとも風よりほかにたれかどふへき
かへし 伊 勢

めに見ぬぬ風にこそろをたくへつゝやはかすみのわかれこそせめ
土左かもとよりせううこ侍ける返事につかはしける
さたもとのみこ 貞元仁和皇子
イ関陸のみこ

ふかみどりめけん松のぬにしあらはうすき袖にもなみはよせてん
返し 土 左

松山のすゑこそ波のぬにしあらはさみか袖にはあともとまらし
女のもとよりさためなき心ありなど申たりければ
贈木政大臣時平公

ふかく思ひうめつといひし言の葉はいつか秋かせふきてちりぬる

ふかみどりめけん 此歌
舊染の深き寄縁あらはわ
か輕薄の袖にも君かより
こんさいへる心にや土左
か消息にかく讀給へき子
細有しなるへし
松山のすゑこそ波の 末の
松山の波こそとは心のか
はる事なへは松のえにしあらは波はよせてんとよめるを彼松山の波によみなしてさやうにかはる縁にあらは君か袖には
跡もとまらずはかなき中さなりこそせめ也
ふかく思ひそめつと 我ふかく思ひそめしといひし詞の末のいつかはりたる事あれは定なき心さはいふをさ也

人をのみうちむる 神中抄
 云昔は願人にとらする
 たいむこさにて有ければ
 ゆゝしとは讀初たる也大
 和物語に三條右大臣女の
 ことばに願を取に遣し給へ
 れば「ゆゝしとていむと
 とも今はかひもあらしう
 さなはこれに思ひよせて
 ん」
 夏川られて秋風ふけは捨
 ちる事班 姫野が怨歌
 行にありさやうの事にて
 男女の中に送るを忌敷此
 歌の心は男の心のはる
 のみを恨むなりは此願をい
 まてうけし我心をかめんと也
 あしひきの山また 序歌也な
 かれてかくしこはとばゆく
 するまでもかく問消息し給
 は頼人と也流れては行衛を
 いふ也
 くしのは助宇也
 わひはつるときさへ物の
 かく忘られて俗しき時さへ
 猶悲しく戀しきは此男の何
 の情を忍ぶ我心そ也戀し
 きは戀しき心也
 伊勢物語に被へけるまに
 いと悲しき事敗まさりて有
 しよりけに戀しきかけり
 いなせともいひはなたれ
 す 奥義抄云せは諸する心也
 日本紀にみえたり万葉に諸
 なしはより否ともいひはな
 たれすともあり

おどこの心かはるけしき有ければたゝなりける時此男のこゝろさ
はしめ此男の心のはらざりし時女に送
 りし願也
 せりけるあふさにかさつけて侍ける
 よみ人しらす

人をのみうちむるよりはこゝろからこれいまさりしつみとおもはん
 しのひたる女のもとにせうそつかはしたりければ
 あしひきの山したしけくゆく水のなかれてかくしとははたのまん

おどこのわすれ侍にければ 伊 勢
 わひはつるときさへ物のかなしきはいつくをしのふこゝろなるらん
 おやのまもりける女をいなどもせともいひはなてと申ければ
 いなせともいひはなたれすうさ物は身をこゝろともせぬ世なりけり

おどこのいかにうらまうてこぬ事といひて侍ければ
おもひ給ふ事也
 よみ人しらす
 こすやあらんきやせんどのみ川きしのまつのこゝろをおもひやらなん
 とまれとおもふ男の出てまかりければ
 じむてゆくこまのあしおる橋をたになどわかやとにわたささりけん
 物いひ侍ける人の久しうをどつれさりけるからうしてまうてきた
辛の字也やうくとしてこし也
 りけるになどか久しうといへりければ
 としをへていけるかひなき我身をはなにかは人にありとしられん
女の親はらからなきにや
 いとしのひてまうてきたりける男をせいしける人ありけり
 りければ歸りまかりてつかはしける
 あさりするときさうわひしき人しれすなにはのうらにすまふ我身は
橋公頼贈中納言廣相息 終非也
 公頼朝臣いさまかりける女のもとにのみまかりければ
 寛湛法師母中納言公頼室

こすやあらんきやせん 川
 岸の松といひかけて待心
 のうさを思ひやれこ也
 しむてゆくこまのあし古
 今「まてといはれても
 ゆかなんしむてゆく胸の
 足おれ前の棚橋 これを
 本歌にして也昔人は前に
 橋在てかく出行人をと
 めしに我宿にはなげれば
 と「めんよししなすと信
 たる心なるへし
 としをへていけるかひ 不
 肯の身の生かひもなきに
 なましお有ともしられし
 とて久しく見え來さりし
 也
 あさりするときそ 朝すな
 さりするをあさりといふ
 由長明無明抄にあり浦人
 にしらねものゝ流すれば人さかむれば我が女の親はらからに
 さらすして制せらるに比して讀り
 なかめつゝ人まつよひのよふこ島のいつくさなくゆきかへる事をいひて公頼の今の女のもとにのみゆくをそへたる也

おどこのいかにうらまうてこぬ事といひて侍ければ
おもひ給ふ事也
 よみ人しらす
 こすやあらんきやせんどのみ川きしのまつのこゝろをおもひやらなん
 とまれとおもふ男の出てまかりければ
 じむてゆくこまのあしおる橋をたになどわかやとにわたささりけん
 物いひ侍ける人の久しうをどつれさりけるからうしてまうてきた
辛の字也やうくとしてこし也
 りけるになどか久しうといへりければ
 としをへていけるかひなき我身をはなにかは人にありとしられん
女の親はらからなきにや
 いとしのひてまうてきたりける男をせいしける人ありけり
 りければ歸りまかりてつかはしける
 あさりするときさうわひしき人しれすなにはのうらにすまふ我身は
橋公頼贈中納言廣相息 終非也
 公頼朝臣いさまかりける女のもとにのみまかりければ
 寛湛法師母中納言公頼室

人ことのたのみかたさは

忍びてくる人のしわざの
頼かたき事あるをうらみ
てよめるなるへし

おほやけのつかひにいせの

國に 兼輔卿いせの寢宮
へ勅使にて下りて「吳竹
の世々の都さ聞からにと
よみ給ふ事大和物語新勅
撰等に有此時にや

人はかる心のくまは 人を

偽たはかる心の底さ也清
き渚とは伊勢の海を云催
馬樂にあり

たかためになれか命を 長

清は伊勢と八雲抄にあり
そなたにあはんためにこ
そ我命も長くと長濱に宿
りきたれ何にたはかる心
きたなき事はあらんさ也

せきもあへすふちにそ 泪の淵にまよふなわたる瀬知まほしきと也女のもまにかよふ道を知よしも哉さの心也

淵なからひとかよはさし 淵なからなきて人をもかよはさし若人わたりはわか淺き所を見出られんほとにさ也

忍びたる人に

よみ人しらす

人ことのたのみかたさは 声のうちは藤のうちはさおなし心也 にはなるあしのうら葉のうらみつへしな

しのひてかよひ侍ける人 兼輔 今かへりてなとたのめをきておほやけの

つかひに伊勢の國にまかりて歸りまうてきて久しうとはす侍りけ

れば

少將 内侍

人はかるころのくまはきたなくてきよきなきさをいかてすきけん

かへし

兼輔 朝臣

たかためにわれかいのちをなかはまのうらにやとりをしつゝかはこし

女のもとにつかはしける

よみひとしらす

せきもあへすふちにうまどふなみた河わたるてふせをしるよしもかな

かへし

淵なからひとかよはさしなみたかはわたらはあざき瀬をもころ見れ

いせもこそは見め

きてかへる名をのみそ 日

比も心さけたる中なられ

は只に來てかへる名のみ

立也とに何事のうたてい

ふ事もあらしき也きては

から衣の縁下結紐は心と

けぬの枕詞なるへし

たぬのこも何思ひけん た

ぬのは華ぬ也中絶しきは

何思けん也河原にて逢

たれば泪川流達瀬さ讀也

絶るも水の縁語也

いまははやみやまを けち

かきは氣色近き心也郭公

に太輔をそへてよみ給ふ

也

人はいさみやまかくれの

人の心さましくなれば人

の事はしらす我は住習ぬ

所はこのますき也みやまを出てとよめるに答へてうけひくましき心ないへる也

ありしたにうかりし物を 今までもうかりしかは此上にはあはすさても別につらきといふ事もあたましき事を又あはればつ

らきはいつくにそふるつらさそき也

つねにまうてきつゝ物などいふ人のいまはなまうてころ人もうた

く名立るさ也

ていふ也といひいたして侍ければ

きてかへる名をのみうたつから衣したゆふひものころとけねは

左大臣河原にいてあひて侍りければ

内侍たいらけいこ平子

たえぬともなにおもひけんなみた河なかれあふせもありけるものを

大輔につかはしける

左大臣

いまははやみやまを出て郭公けちかきこゑをわれにきかせよ

かへし

人はいさみやまかくれのほどいさすならはぬさとはすみうかるへし

左大臣につかはしける

中務

ありしたにうかりし物をあはすどていつこにそふるつらさなるらん

おもひ侘君かつらきに

右近につかはしける

右大臣師輔公

らき人にはよりかたけれ
と思ひ侘ねは立よるへ
きに木の本の雨もらぬや
かに人目をももらすな

おもひ侘君かつらきにたちよらは雨も人目ももらすささらなん
西宮左大臣高明公
たかあきらの朝臣にふみつかはすとて

也人めをもらすさは人目
をつまてうき名をも立
るな云也つらきを木にそ
へて雨やさりする心によ

おもひ侘君かつらきにたちよらは雨も人目ももらすささらなん
こと女に物いふときもつてもとの内侍のふすへ侍ければ
よしふるの朝臣或説兼輔卿女
云云小野好古

みかけし歌なるへ一奏の
始鼻泰山に上りて俄の風
雨に松の下に雨をしのぎ
て其松を大夫に封せし事

おもひ侘君かつらきにたちよらは雨も人目ももらすささらなん
めも見ぬすなみたの雨のしくるれば身のぬれさぬはひるときもなし
かへし 中將内侍好古本妻

史記にあり或抄云つらきに速なる木の心有木の多き心也

おもひ侘君かつらきにたちよらは雨も人目ももらすささらなん
にくからぬ人のさせけんぬれさぬはおもひにあへすいまかはさなん
たるイ

笛竹のもさふるれをのか世々にはまは伊勢物語にのこよになりければうきくなりけりある詞也
支言云離別してをのれくか世になるを云此歌の心は笛の古音のをはる事あるやうにいさか心はかはるとも離別してをのれくか世にはならされと也よにならずも笛竹の縁也

おもひ侘君かつらきにたちよらは雨も人目ももらすささらなん
めも見ぬすなみたの雨のしくるれば身のぬれさぬはひるときもなし
かへし 中將内侍好古本妻

もとのめの 中將内侍也

おもひ侘君かつらきにたちよらは雨も人目ももらすささらなん
めも見ぬすなみたの雨のしくるれば身のぬれさぬはひるときもなし
かへし 中將内侍好古本妻

めも見ぬすなみたの雨 八雲御抄云ぬれさぬなき名也有因縁云云繼母のまむすめになき名をおほせて置のぬれ衣を
つけし事也こ女に物いふなき名のぬれ衣の泪さへそへて干間なく涙感也

おもひ侘君かつらきにたちよらは雨も人目ももらすささらなん
めも見ぬすなみたの雨のしくるれば身のぬれさぬはひるときもなし
かへし 中將内侍好古本妻

にくからぬ人のさせたる にくからぬ人は彼こ女をいふなるへしおもひを火にうへてさりあへす今やかたはか入さ也
思ふ人故のぬれさぬはさのみ泪の雨にぬる程もあらしと猶心をゆるさぬ返歌也

おもひ侘君かつらきにたちよらは雨も人目ももらすささらなん
めも見ぬすなみたの雨のしくるれば身のぬれさぬはひるときもなし
かへし 中將内侍好古本妻

おほかたは瀬とたにかけし
川の上にては大かた瀬さ
も瀬さもかけていほし只
人の心の深きをこそ瀬さ

おもひ侘君かつらきにたちよらは雨も人目ももらすささらなん
めも見ぬすなみたの雨のしくるれば身のぬれさぬはひるときもなし
かへし 中將内侍好古本妻

は頼むへげれさ也
淵とてまたのみやは 年に
一度七夕の渡ると同し稀
の逢瀬はたさひ淵とても
離れ頼さ也

おもひ侘君かつらきにたちよらは雨も人目ももらすささらなん
めも見ぬすなみたの雨のしくるれば身のぬれさぬはひるときもなし
かへし 中將内侍好古本妻

身のならんことをも知す
波の心もつしまさりけり
さほつしまぬ心也深き
思ひに身の上をまかへり
見れば制する人の心も何
も慎ますさ也其心を舟に
そへて置也

おもひ侘君かつらきにたちよらは雨も人目ももらすささらなん
めも見ぬすなみたの雨のしくるれば身のぬれさぬはひるときもなし
かへし 中將内侍好古本妻

信ぬればいまはたおなしなには
後遺したる也宗祇云信ぬればは思ひのつもりてやるかたなきを云也されは今はあはすも立にし名はおなし名にこそ
あれ身をつくしてもあはんと思ふさへり身をつくしとは難波の縁也水の淺深をしらんかためにたてなく木也此歌は幽玄
林の歌とそ愚案難波の水尾並は清和の御代に始て立き三代實録にみえたり

おもひ侘君かつらきにたちよらは雨も人目ももらすささらなん
めも見ぬすなみたの雨のしくるれば身のぬれさぬはひるときもなし
かへし 中將内侍好古本妻

父の左大臣 或本三教忠の父時平公云誤也是は御匣殿別當の父小野宮左大臣實賴公也其故は時平公延喜九年薨卅九于時敦
忠五歳也其後の事也

おもひ侘君かつらきにたちよらは雨も人目ももらすささらなん
めも見ぬすなみたの雨のしくるれば身のぬれさぬはひるときもなし
かへし 中將内侍好古本妻

わひぬればいまはたおなしなにはなる身をつくしてわはんとぞ思ふ
しのひてみくしけとのへたうにあひかたらふときとて父の左大
臣のせし侍ければ 敦忠朝臣

おもひ侘君かつらきにたちよらは雨も人目ももらすささらなん
めも見ぬすなみたの雨のしくるれば身のぬれさぬはひるときもなし
かへし 中將内侍好古本妻

イナツ時平公女也

おもひ侘君かつらきにたちよらは雨も人目ももらすささらなん
めも見ぬすなみたの雨のしくるれば身のぬれさぬはひるときもなし
かへし 中將内侍好古本妻

もどよしのみこ

おもひ侘君かつらきにたちよらは雨も人目ももらすささらなん
めも見ぬすなみたの雨のしくるれば身のぬれさぬはひるときもなし
かへし 中將内侍好古本妻

いかにしてかく思てふ 此
一言をたに直に述ていは
まほしき也

もろともにいささはいはすは

同穴の中なればたとひ死

山の山をも我いささとさそ

はずは君一人はこすへき

やうふしき也大和物語ニ

「もろともにいささはい

はてしての山なきかは一

人こえんきはせし

かくばかりふかき色にも

我おもひはかく深く侍る

九猶此こまはりを君聞し

れといはむさて菊のうへ

にてよめるなるへし或抄

ニハ移ひ給ふ君か名を菊

花と申さんさ也云云

かうてさへや心ゆかぬ

やうにちかぐよびよせたれは定て本意ならんと思ふに是にてさへや心ゆかす不足なるか也

いさやまた人の心も かうてさへや心ゆかぬいさふに付ていさやまた君か心もしられれば奥にても外にてあへしらはれても只

袖のみぬるゝ也

いかにしてかくおもふてふことをたにひとつてなちてきみにかたらん

公頼朝臣のむすめに忍びて住侍りけるにむつらふ事ありてしぬへ

しどいへりければつかはしける あまたの朝臣

もろともにいささはいはすはしての山こゆともこさん物ならなくに

としをへてかたらふ人のつれなくのみ侍ければうつろひたる菊に

つけてつかはしける さよかけの朝臣

かくばかりふかき色にもうつろふをなを君さくの花といはなん

人のもとにまかりたりけるにかどよりのみかへしたるにからうし

てすたれのもとによいよせてかうでさへや心ゆかぬといひいたし

たりければ よみひとしらす

いさやまた人の心もしらつゆのふくにもとふにも袖のみろひつ

人のもとにまかりけるをあはてのみかへし侍ければみちよりいひ

つかはしける

よるしほのみちくるそら

よる沙のは道くる空もさ

いはん枕詞也逢にさ波に

さいひかけてかへるも波

の縁也心は逢事もなく

歸ると思へは道くるも心

ならずさなり

數ならぬ身は山のはに 山

の端は月の出入所なれば

數ならぬ身は人にもうと

まれておほくの月日を待

過すのみにてさばるゝ事

もなしとなり

たのめつゝあはて年ふる

あはんさはたのめながら

あはて年ふる儂にも猶こ

りす頼む心を哀さおもひ

しれと也

よるしほのみちくる空もおもほぬすあふことなみにかへると思へば

人をおもひかけていひわたり侍けるをまらとをにのみ侍りければ

數ならぬ身は山のはにあらねともおほくの月をすくしつるかな

ひさしういひわたり侍けるにつれなくのみ侍りければ

なりひらの朝臣

古今朝臣歌也但無返歌

たのめつゝあはてとしふるいつはりにこりぬこゝろをひとばしりなん

かへし 伊 勢

夏むしのしるゝまどふおもひをはこりぬかなしとたれか見ざらん

返事せぬ人につかはしける よみ人しらす

うちわひてよはらんこゑに山ひこのこたへぬやまはあらしとそおもふ

返し

やまひこのこゑのまにゝとひゆかはむなしさそらにゆきやかへらん

夏むしのしるゝまどふ 童蒙抄ニ夏の夜火に飛いる青き虫を夏虫といふ。本文青蛾拂燭といへり愚案此歌思ひを火にそ

へたり心は傷としるゝまどふ人の思ひをこりぬ事と悲しと見ると也さてまなびかじをこりてやみ給はぬは笑止まの心也

うちわひてよはらん 山彦に答んと也人の難面てさそといふ事もなきよりかくいへる也

やまひこのこゑのまにゝ 山彦の聲のまにに隨ひゆかは虚空にこそと也

あらたまのさしのみとせ
花もつれなくて年ふる戀
の終にかなふましきにや
さ歎く心也

なかれ出るなみたの河の
近江の海を逢身とうけて
末を頼む心也

雨ふれとふらねとぬるゝ
思ひを火にそへて泪の袖
の思ひにもかはかねあ
やしき也深く心をさ
めてみるへき歌なるへし
露ばかりぬるらん袖の 少
しぬる袖のかはかねは思
ひのすくなき故かと也

つねよりもまふくゝ 逢
道を近江路にそへてよめ
るにやあはてかへる道は
猶まふくゝかへりしと
也

ぬれつゝもくると 夏びきの手ひききたへぬ糸とはされやすき麻糸の事也日比は雨にもまはらすくると見えしかとけふは
又さもなさはくる糸のされたるにやと也

かくいひつかはすほどにみとせはかりになり侍にければ
あらたまのさしのみとせはうつせみのむなじさねをやなきてくらさん
たいしらす

なかれ出るなみたの河のゆくすゑはつるにあふみのうみとたのま
雨のふる日人につかはしける

雨ふれとふらねとぬるゝわか袖のかゝるおもひにかはかねやなら
かへし
露ばかりぬるらん袖のかはかねはさみかおもひのほどやすくなき
女のもとにまかりたりけるに立なからかへしたれば道よりつかは
しける

つねよりもまふくゝゝかへりつるあふみちもなきやとに行つゝ
雨にもまはらすまてきて空物かたりなどしける男の門よりわたる
門よりとをり過とて也
とて雨のいたくふれはなんまかりすきぬるといひければ
ぬれつゝもくると見えしは夏引のてひきにたへぬいとにや有けん

かすならぬ身はうき草

き人に敷まへられぬ身は
よるへもしられぬ身とな
り果心を打捨たる心にや
夕やみはみちも見ぬれと

童蒙抄云駒に任すまは韓
子曰桓公孤竹を伐春ゆ
きて秋歸る迷ひて道を
失ふ管仲曰老馬の智用
ゆへし則馬を放てし
たがひて歸りぬと云

こまにこそまかせたり 心
と來たりしと思ひつれば
駒に任せておはせしと
也此二首大和物語にはは
じめのうた兼盛返歌兵衛
のきみさあり

いつかたにこそつて 始めは我に文をこせしか其後いつかたにこそつてやりて今はかく逢も稀なる中となるそと也鷹は文を
つけてやりし古事あれば也
ありきたにさくへき たとひ疎くとも京に有とたに開へきに今東へおはしては逢にへたりて悲きと也
せきもりのあらたまる 關守のあらたまるとはこそ男をあひ知を云也童蒙抄云鷗に木綿付て出す被のあるにより木綿付鳥
さはいひはしめたる也

人にわすられて侍けるとき

かすならぬ身はうき草と成なゝんつれなき人によるへしられし
おもひわすれにける人のもとにまかりて
夕やみはみちも見ぬれとふる里はもとこしこまにまかせてうくる
かへし

こまにこそまかせたりけれあやなくも心のくるとおもひけるかな
大江氏也
朝綱の朝臣の女に文などつかはしけるをこと女にいひつきて
久しうなりて秋とふらひて侍りければ 是れしめ文つかはしたる女のみし 歌也
いつかたにこそつてやりて鷹かねのあふこまににまはなるらん
おとこのかくはてぬにこそ男をあひしりて侍けるにもとのおとこ
のあつまへまかりけるを聞て遣しける

ありとだにさくへき物を逢坂のせきのあなたをばるけかりける
かへし
せきもりのあらたまると逢坂のゆふつけとりはなきつゝゝるゆく

いつかたにこそつて 始めは我に文をこせしか其後いつかたにこそつてやりて今はかく逢も稀なる中となるそと也鷹は文を
つけてやりし古事あれば也
ありきたにさくへき たとひ疎くとも京に有とたに開へきに今東へおはしては逢にへたりて悲きと也
せきもりのあらたまる 關守のあらたまるとはこそ男をあひ知を云也童蒙抄云鷗に木綿付て出す被のあるにより木綿付鳥
さはいひはしめたる也

ゆきかへり来てもきかなん

關守のあらたまるといへ

るを陳したる歌也ゆき歸

來てもきけ改る關守なし

との心也

もる人のあるさはきけさ

外にもる人有さは儘にき

けさわかせきぬへきやう

もなくせんかたなしとの

心なり

かつらきやくめちに 序歌

也萬城の久米路の岩橋は

二言主の神牛にてかけさ

りしかは中々にてもさい

はんため也ゆかてあるへ

き物をなましぬゆきて別

うかりし心なるへし

申たえてくる人も 一度中

絶じ人なれば今も頼れぬ

この心也

しら雲のみな一むら 白き衣を各きたりしなかくよみて雲には立出るさ詞の縁あれば中に取分て君を思初しこの心也

よそなれさ心ばかりは 物を火にかくればかほく故心をかけて袖のひかたき事をかくよめる也

また女のつかはしける

ゆきかへり来てもきかなんあふ坂のせきにかはれる人もありやど

かへし

もる人のあるとはさけとあふさかのせきもとめぬわかなみたかな

かれにけるおどこの思ひ出てきて物などいひてかへりて

かつらきやくめちにわたす岩橋のなかくにてもかへりぬるかな

かへし

申たえてくる人もなきのつらさのくめちの橋はいまもあやうし

しろきさぬともきたる女どものあまた月あかさに侍けるを見てあ

したにひとりかるとへつかはしらる 藤原有好

しら雲のみな一むらに見えしかとたち出てきみを思ひろめてき

女のもとにつかはしける

よみ人しらす

よそなれと心ばかりはかけたるをなとかおもひにかはかざるらん

かへし

わかこひのきゆるまもなく苦しきはわはぬなけさやもえわたるらん

かへし

きえすのみもゆる思ひはとをけれと身もこかれぬるものにそ有ける

又おどこ

うへにのみをろかにもゆるかやり火のよにもうこにはおもひこかれし

又返し

川とのみわたるを見るになくさまでくるしきことういやすさなりなる

またおどこ

水まさるここのみして我ためにうれしき世をは見せしとやする

またおどこ

水まさるここのみ 川とのみわたるさいふにつけて水まさる心ちのみしてさよめり水まさる川はわたりかたき物なれば我

なさい給ふゆへに川さもわたりかたきのみあれはうれしきあふ淵は見せ給ふまじきこの心にやさかこ返したる歌な

るへし

わかこひのきゆるまも 心を火にそへ歎きを木に

そへて也

きぬすのみもゆる 遠火に

てもこがる事

にそへて 遠くへたてぬても忘れか

たくきぬ思ひなのべた

る歌なるへし 上

うへにのみをろかに

もゆ わつかになるそかにもゆ

る改道火のよもそこには

こかれじとよみてうはへ

はかりなる思ひならんと

云也 川とのみわたるを 川との

みわたるさは我前をわたりながら立よらぬ心なるへし見てはかりはなくさまで立よらぬ事よこおもふ歎きのくるしきの

みまさるさ也 水まさるここのみ 川とのみわたるさいふにつけて水まさる心ちのみしてさよめり水まさる川はわたりかたき物なれば我

後撰和歌集卷第十四

戀歌六

人のもとにつかはしける

よみ人しらす

あふことをよとにありてふみづのもりつらしと人を見つるころかな
かへし

みづのもりもるこのころのなかめにはうらみもあへすよどの川なみ
みづからまてきてよもすから物いひ侍けるはともなくわけ侍けれ
はまかりかへりて

うき世とはおもふ物からあまのとのあくるはつらきものにも有ける
女のもとにつかはしける

うらむれどこふれと君かよとゝもにしらすかはにてつれなかるらん
かへし

あふことをよとにあり 逢
事のよとむこいひかけて
也みづのもりは山城の淀
に美豆森さて有を見つる
こいはん枕詞に置也入雲
御抄にもみづの杜淀に有
さあり爲家抄にも同じ或
説水の守といふ義不用
みづのもりもる此比 霖雨
の森は瀧心也な雨に河
瀧高きは理なれば人恨
す我も君故に晴ぬなめ
すればさのみ恨給そと也
うき世とは思ふ物から 浮
世の万事心になはぬは
今始めぬ事なれば思ひ明
らめながらあふ夜の明る
はつらくおもはるゝと也
うらむれどこふれと
ゝもには一世のほさなと
いふ心也
うらむれどこふれと 雲のより逢に隔りある人を恨むも戀もいかにそなからは知へきしらすと云て難直心也

うらむれどこふれと君かよとゝもにしらすかはにてつれなかるらん
かへし

しつはたにへつるほと也

僻案抄云しつはたとはみ
たれたるよしを云也思ひ
みたれつるほと也といふ

也或抄云しつはたにへつ
るほとは思ひにみたれ
て月日へたるほとといふ
也

へつるよりうすく成にし

たなまれたるをへてのお
れは薄くなる心也薄き中
は絶さるとてもかひなし

こ也

くるこさばつねならずとも
くるもたえじも玉かつら
の縁也常ばさのみ來すこ
も頼む心は絶ましければ

人目をもおもひ給へかしこの心也

玉かつらたのめくる日の 頼めて來る日の數有さても中の絶々あるはかひなければしけくあひみんこ也
いにしへの心はなぐや 古我を思ひし心は今なかりしにやこ也
いにしへの心はなぐやなりしこいへるを其まうけて古も今も我には心なきやらん君かよきをも思ひ
しらすて年へてあるこ也

いひわつらひてやみにける人に久しうありて又つかはしける

しつはたにへつるほとなりしら糸のたえぬる身とはおもはさらなん
かへし

へつるよりうすくなりししつはたの糸はたえでもかひやなからん
おとこのまてきてすき事をのみしければ人やいか見らんとして
くることはつねならずとも玉かつらたのみはたえしとおもほゆるかな
かへし

かへし

玉かつらたのめくる日の數はあれとたぬくにてはかひなかりけり
おとこの久しう音つれさりければ

いにしへの心はなぐやなりにけんたのめしことのためて年ふる
返し

いにしへの心はなぐやなりしこいへるを其まうけて古も今も我には心なきやらん君かよきをも思ひ
しらすて年へてあるこ也

たはたりしむかしたに、物
いはさりしそのかみさへ
きて見えし人の今は前渡
りしても立よらぬ事をか
くよむ也

年ころひさしう有つる二
させばかりのとしころ絶
て久しうきたらてありつ
るこの心也

わすられてさしふる里の
忘れられてさしふる古郷な
れば中々あたなる音つれ
せてもあれかし何に一聲
はなとつるゝそさ也

とふやきて杉なき宿 しろ
しなくさもさふやと我心
見に杉なき宿にきておは
せと戀しさをしるへにてわがさふらひしこの心なるへし
露のいのちいつともしらぬ はかなき露命のいつ消へきもしらぬ世に情もなくつらさのみはなき思置るゝそと也なるゝ
も露の縁ふるへし

かり人のたつぬる鹿は 鹿は狩人にあはぬやまにのかるゝ物なれば我身に比してかくより印南野は掃磨也物をうけひかぬ
をいなむさいふ詞にそへたるにや

男のたゝなりけるおりにはつねにまでさけるが物いひてのちはか
へわたりをしつゝ有
とよりわたりけれとまでささりければ

たえたりしむかしたに見しうき橋をいまはわたるとをどのみさく
いひわひて二とせばかりをともせずなりにける男の五月はかりに
まできて年ころひさしうなりつるなどいひてまかりにけるに
わすられてさしふる里の郭公なにゝひとこゑなきさてゆくらん
たいしらす

とふやとて杉なきやとにさしにけれとこひしきことうしるへなりける
つれなき人なるへし いひやりに
物いひ侘て女のもとにつかはしける
露のいのちいつともしらぬ世の中になどかつらしとおもひをかるゝ
女のほかに侍けるをうごにををしふる人も侍らさうければ心つか
たしはかりにこの心也
らとふらひて侍ける返事に遣しける

かり人のたつぬるしかはいなみ野にあはてのみころあらしはしけれ
をまたの水ならなくにかくはかりなかれうめてはたぬんものかは
おどこのまうてこでありくゝて雨のふるよおほ笠をこひにつかは
したりければ これひらの朝臣の女いませ

しのひたる女のもとよりなとかをともせぬと申たりければ

右 大 臣九條

月になにまつほほどおほく過ぬれば雨もよにこじとおもほゆるかな
はしめて人につかはしける よみ人しらす
おもひつゝまたいひをぬ我こひをおなしてゝるにしらせてしかな
いひわつらひてやみにけるを又おもひ出でとふらひ侍ければさた
めなき心かなといひてあすか川の心をいひつかはして侍ければ
あすか川のうちになかるればうこのしからみいつかよとまん
おもひかけたる女のもとに あさよりの朝臣 朝頼右兵衛督 三條右大臣一男

ふしのねをようにうさゝしいまはわかおもひにもゆるけふりなりけり
あすか川の心を「世の中
は何かつねなる飛鳥河さのふの淵を今日は瀬なる 古今
あすか川のうちに 流るればに鳴るればをそへてふるへし心のうちに戀鳴るればたさび一たひはやみたりさもよとむへ
きにあらすと也 心明也

山田の水ならなくに 山
田の水は秋のうちは絶る
物なれとそれなられば我
中は絶ましきになともせ
ぬとて疑ふ事なかれさ也
おほかさ さし笠也
月にたにまつほき 雨とよ
歌林長材云もよは夜の心
也愚案月にたに待ほさ度
々過てこの人なればいは
んや雨夜に來ましきさお
もふさ也終來ましき心な
らんと歎く心なるへし
おもひつゝまたいひ初め
五文字いはて程ふる心有
同心あるやうに知せさき
さ也

しるしなき思ひこそ 是は
 實之歌に「しるしなき煙
 な雲にまがへつゝ世をへ
 て富士の山さもえなん此
 詞にてしるしなき思ひを
 そきくさよめるにやかこ
 さばかりはかこつけ斗也
 そなたの思ひを富士の煙
 さの給へとかこつけはか
 りならんそなたの思ひさ
 いふしるしもあければさ
 の心なるへし
 いひさしてさよめらるなる
 池の井樋をさしきめて水
 なさむるを云かけて親
 の制し給ふさきくがそれ
 にさよめられ給はんか又
 猶我を思給はんかいつかたに思寄給そき也

いかにしてこきかたらはん
 忍ひくになげきのした
 になく中なればいかにし
 て語らはんさ也木下に鳴
 子規にそへてよめるなり
 おもひつゝへにける年を
 年ふれば物に馴る物也思
 ひつゝのみへたる年をし
 るへにて物思ひの心が馴
 たると也戀しき人には馴
 はせてさ心にふくめたる
 歌なるへし

我ならぬ人すみのねに 我
 か住んと思ひしに我なら
 ぬ人の住てうらめしき心
 を住江難波の浦見さいひ
 かけたる歌也
 ちこりゆく水には 芦まよ
 ふ江さば芦の茂りてうつる影のまかふ也濁る水には影も見ぬれば芦まよふ江を目をとめても見すさいひて笛をさよめ
 すして返す心を隠し願によめる也
 すかはらやふし見の里 菅原伏見大和也古今にあれまもおしよみしより此歌にも中絶した荒しき讀也
 らばやふる神にも 此神は鳴神をよめるなるへし中のへたより行ないはんきてかくよむ也

返し

よみ人しらす

しるしなき思ひとろきくふしのねもかこはかりのけふりなるらん
 いひかはしける男のおやいといたうせいすと聞て女のいひ遣しけ
 る
 いひさしてさよめらるなる池水のなみいつかたにおもひよるらん
 おなし所に侍ける人の思ふ心侍りけれといはてしのひけるをいか
 なるおりにかわりけんあたりにかきておとせりける
 しられしなわかひとしれぬてゝもてさみをおもひの中にもゆども
 心さしをはあはれと思へど人めになんつゝむといひて侍ければ
 あふはかりなくてのみふる我こひを人めにかゝることのわひしさ
 題しらす

夏衣身にはなるともわかためにうすさこゝろはかけすもあらなん
 源とゝのふ 左衛門佐整
 参議等子
 いかにしてこきかたらはんほどさすなげきのしたになげはかひなし
 おもひつゝへにけるとしをしるへにてなれぬるものはこゝろなりけり
 文などつかはしける女のこと男に付侍にけるに遣しける

我ならぬ人すみのねのさしに出てなにはのかたをうらみつるかな
 どのふかれかたになり侍にければとめをさたる笛をつかはす
 ちこりゆく水には影の見ぬはころあしまよふ江をどゝめても見ぬ
 菅原のおほいまうちさみの家に侍りける女にかよひ侍けるおとこ
 中たねて又とひて侍ければ
 すかはらやふしみの里のあれしよりかよひし人のあどもたねにさ
 女のおとこをいとひてさすかにいかおほねけんいへりける
 ちばやふる神にもあらぬ我中の雲井はるかになりもゆくかな

いかにしてこきかたらはんほどさすなげきのしたになげはかひなし
 おもひつゝへにけるとしをしるへにてなれぬるものはこゝろなりけり
 文などつかはしける女のこと男に付侍にけるに遣しける

ちはやふるかみにも何か
かく人をへたてなすしわ
さはそなたにこそはさ也
なれ雲のにさはそなた
の我と隔らるゝ心の心也
然るに我中をしも神にも
何かたさへ給ふらんさな
るへし

うさしつみふちせにさはく
我うき戀にうき洗み身を
やつして心にもさまゝく
思ひさはくより鳩島の淵
瀬に浮洗み足のいさなき
ありさまを思ひやる心な
るへし

かひに人の物いふと聞て
甲斐さといふ女なるへし又
はかうちさとは又は河内といふ本もありさの小駐なるへし是をイ本ニハ又はかうちさかひき書つゝけたるにや
松山に波たかき音を 思ふ心は我にこそ人はあらした松山の波越るさきしはうちめしき事さの心也我より越るは波の縁也
さしてこそ思ひし物を 彼笠をさして来よと思ひしにさもなかりしよとの心をかひなく雨のもるさ讀なるへし
もるめのみあまたみゆれば そなたにはもる人目のあまたさみゆる物を知らないはいかて笠さしてゆかんさ也もるめは雨の
縁さしては三笠の縁也

返し

ちはやふるかみにもなにかたとふらんをのれ雲井に人をなしつゝ
女三のみこに

うさしつみふちせにさはくには鳥のうこものどかにあらしとる思ふ
又はかうちイ又はかうちかひに人の物いふと聞て
かひに人の物いふとさして 藤原守文

松山に波たかき音うさこゆなる我よりこゆる人はあらしを
おどこのもとに雨ふる夜かさをやりてよひけれどこそさりければ
よみ人しらす

さしてこそおもひし物をみかさ山かひなく雨のもりにけるかな
かへし

もるめのみあまたみゆれば三笠山しるゝいかゝさしてゆくへき

女のもとよりいといたくな思ひわひうとたのめをこせて侍ければ
なくさむることのはにたにかゝらすはいまもけぬへき露のいのちを
もとよしのみこのみそかにすみ侍ける頃今こんどたのめてこそすな
りにければ 兵衛兼茂朝臣女

人しれすまつにねられぬあり明の月にさへころあさむかれけれ
しのひて住侍ける人のもとよりかゝるけしき人に見すなどいへり
元 方

立田川たちなは君か 立田
川はたちなはの枕詞聲
樹森はいはての枕詞也皆
大和の名所也心は明也
うたの野はみゝなし山か
宇陀野耳無山皆大和なれ

は取合せたり宇陀野さひひ宇多院に比して也耳なし山なればさかてこたへぬ心なるへし
みゝなしの山ならずともよふことりなにかはさかんとさならぬねを
返し 宇多院の女五のみこ 依子鬘宮母
大納言女

立田川たちなは君か 立田
川はたちなはの枕詞聲
樹森はいはての枕詞也皆
大和の名所也心は明也
うたの野はみゝなし山か
宇陀野耳無山皆大和なれ

は取合せたり宇陀野さひひ宇多院に比して也耳なし山なればさかてこたへぬ心なるへし
みゝなしの山ならずともよふことりなにかはさかんとさならぬねを
返し 宇多院の女五のみこ 依子鬘宮母
大納言女

こひわひてしぬてふ 戀徒
て死ぬるさいふ事はいま
たなきに我戀死て世のた
めしにあらん心の心也
かけ見ればおくへ入ぬる

さへは出らんは外へは也
ほのかなる影をみれば奥
へにけし君ゆへに泪の
外へ出るはいかゞ也
しらすりし時たに 始め見
も知さりし時たにこへて
いかゞ今更に道まかふそ
とよみて逢し人に又ねあ
はぬ歎きをよめる也

あかすして枕のうへに あ
ひそめし事を夢路といひ
なして讀也あかて覺て別
し夢路を又尋ゆかまほし
さ也

なごもせすなりもゆく 逢かよはする名は立ながら其人は音もせす成ゆく歎きをよめり音もせすなりもゆくなき皆鈴の縁也
こねぬてふ名をな恨う こねぬるさいふ名を立ててさのみ悔恨みそ近付きよらんを我おもふほかにさ也ならんさいふ同鈴の
縁也

つれなく侍ける人に たゝみぬ
こひわひてしぬてふことはまたなきに世のためしにもなりぬへきかな
たちよりけるに女にけていりければ遣しける
よみひとしらす

かけ見ればおくへ入ぬるさみによりなどかなみたのとへはいつらん
わひにける女の又あはさりければ
しらすりし時たにこねしあふ坂をなどいまささらに我まごふらん
女のもとにまかりりめてあしたに

春宮藏人日向守
か け も と 隆基藤原氏
相模守博文子

あかすして枕のうへにわかれにしゆめちを又もたつねてしかな
おどこのとはすなりにければ よみ人しらす
をともせすなりもゆくかな鈴鹿山之ゆてふ名のみたかくたちつゝ
かへし

こねぬてふ名をなうらみそすゝかやまいとゝまぢかくならんと思ふを
なごもせすなりもゆく 逢かよはする名は立ながら其人は音もせす成ゆく歎きをよめり音もせすなりもゆくなき皆鈴の縁也
こねぬてふ名をな恨う こねぬるさいふ名を立ててさのみ悔恨みそ近付きよらんを我おもふほかにさ也ならんさいふ同鈴の
縁也

わかためにかつはつらしと

かつはつらしと見ると云
かけて木をこるにそへて
かくつらしと見る人にこ
りにこりたればかやうの
戀はすまじさ也

あふこなき身さは 運期な
き身さは知ふから戀して
歎きこりつむはよき事か
はさ也あふこなき戀する
はよき事あらればよし

くさやうの戀し給ふな
さ也爲家抄云^{アノコト}なげ木^キ芹^ノ
也

あさこに露は 戀しきの
みいふ心なるへし
まぢかくてつらき 近な
らつらきはうきながら其

うきは物にもあらず戀しきのわりなきよりは猶堪忍もこよからんさ也
つくしなる思ひちめ河 染河筑前也一念思ひそめてはよきむ時もなくふかく成まさらん心を河の縁語にて讀也
わたりてはあたになる 伊勢物語に「染河を渡らん人のいかてかは色になるてふ事のなからん 此心にてわたりては化々し
く好色になるといふさよめり下句はさやうのあた人にあはじ心つくしにやならんさ也

わたりてはあたになるてふ染河のこゝろつくしになりもころすれ
まぢかくてつらさをみるはうけれどもうきはものはこひしきよりは
女のもとにつかはしける 藤原 さねた、<sup>左馬頭眞忠左大臣
恒佐子</sup>
つくしなるおもひそめ河わたりなは水やまさらんよとむとさなく
かへし よみ人しらす

女に物いはんとてきたりけれどこと人に物いひければかへりて

わかためにかつはつらしとみやま木のこりともこりぬかゝるこひせじ
かへし

あふこなき身とはしるゝ戀すとてなけさこりつむ人はよきかは
人に遣しける かいせん法師戒仙

あさこに露はをけども人こふるわかここの葉はいろもかはらす
きて物いひける人のおほかたむつましかりけれどちかうはあは
すして よみ人しらす

まぢかくてつらさをみるはうけれどもうきはものはこひしきよりは
女のもとにつかはしける 藤原 さねた、<sup>左馬頭眞忠左大臣
恒佐子</sup>
つくしなるおもひそめ河わたりなは水やまさらんよとむとさなく
かへし よみ人しらす

わたりてはあたになるてふ染河のこゝろつくしになりもころすれ
まぢかくてつらさをみるはうけれどもうきはものはこひしきよりは
女のもとにつかはしける 藤原 さねた、<sup>左馬頭眞忠左大臣
恒佐子</sup>
つくしなるおもひそめ河わたりなは水やまさらんよとむとさなく
かへし よみ人しらす

わたりてはあたになるてふ染河のこゝろつくしになりもころすれ
まぢかくてつらさをみるはうけれどもうきはものはこひしきよりは
女のもとにつかはしける 藤原 さねた、<sup>左馬頭眞忠左大臣
恒佐子</sup>
つくしなるおもひそめ河わたりなは水やまさらんよとむとさなく
かへし よみ人しらす

に愛着の道みなもさ遣し
さいへるたくひなるへし
こふれさもあふよなき 戀
れさも連夜なき身は夢路
にも忘草生るやらん夢に
も其人をみぬさ也

世の中のうきはなへても
世のうきさてもなへては
うからず頼むに付ては人
の恨めしき事もあれば人
を頼むさいふ限りそうき
怨もあるさ也

夕されは思ひそ茂き こん
やこしやは來んかこさら
んかの不定なる也
いさばれてかへりこしち
山に入こそ道もまさへい

とはれて歸りくるにはいられとも迷ふさ也歸り來しとそへて白山と讀也
人なみにあらぬ我身は 數ならぬ身の歎き也蘆の根の底に流るを下にねになくさ添て也
白雲のゆくへき山は 浮雲の身のしるへを頼む心を雲風にうへて也
世の中にな有明の 世にある物さもせられぬ身のつきなき思ひにまさふ歎きを讀るにや

たいしらす

瀬をばやみたえずなかるゝ水よりもたえせぬものは戀に有ける
古今こふれともあふよのなきは
こふれともあふよなき身は忘れ草ゆめちになへやおひしけるらん
世の中のうきはなへてもなかりけりたのむかきうらうらみられける
たりめたる人に
夕されはおもひそしけきまつ人のこんやこじやのさためなければ
女に遣しける
源よしの朝臣

いとばれてかへりこしちのしらやまはいらぬにまどふ物にう有ける
たいしらす
よみ人も
人なみにあらぬ我身は難波なるあしのねのみそしたになかるゝ
白雲のゆくへきやまはさたまたらすおもふかたにも風はよせなん
世の中になをありあけの月なくてやみにまどふをどはぬつらしな

さたまらぬ心ありと女のいひければつかはしける
贈太政大臣
あすか川せきてとゝむるものならばふちせになるとなどかいはれん
久しうまかりかよはす成にければ十月はかりに雪のすこしふりた
るあしたいひ侍ける
右 近
身をつめはあはれどる思ふ初雪のふりぬることとたれにいはいまし
源たゝあさらの朝臣十月はかりに床夏を折て送侍ければ
よみ人しらす

あすか川せきてとゝむる

君のせきさめ置ぬゆへ我
不定成そと也此歌戀の三
に何かいせんともあり
身をつめはあはれそ身
をつめはさば我身をつみ
て人の痛みををしはかる
心もふりぬる事さば身の
ふるされたる事也我身の
古ぬる事を誰にかたらん
やうもなきにつけて初雪
のふりぬるも哀と思ふさ
也

冬なれさきみのかきねに
まことなつの花を常住なる
事にそへてなるへしむへ
は宜の字尤といふ心也古
今一あな戀しいまも見て
しが山かつの垣保にさけ
る大和撫子 常夏撫子同
草也

しら雪のけさはつもれる

白雪のけさはつもれるおもひかかなわはてふるよのはともへなくに

白ゆきのつる思ひも心
 は明也古今つね「君が
 おもひ雪とつもらはたの
 まれす春よりのちは……
 わかこひしきみかあたりを
 こひしのしは助字也こひ
 を火にそへて我こひのは
 なれば雪も空にきん
 也
 山かくれさせぬ雪の雪
 の松にかゝる心を君を待
 にかゝるをそへてよめる
 也

あらたまのとしはけふ 年
 のこゆるな道坂をこゆるにいひかけて年はけふあすにこゆへけれとも我は君に道坂をこゆるまじきにやま歌く心也

かへし
 よみひとしらす
 白ゆきのつるおもひもたのまれすはるよりのちはあらしとおもへは
 心さし侍る女みやつかへし侍ければ逢事かたく侍けるを雪の降に
 遣しける
 わかこひしきみかあたりをはなれねはふるしら雪もららにさゆらん
 かへし
 山かくれさせぬ雪のわひしきはさみまつのはにかゝりてふるふる
 物いひ侍ける女に年のはての比はひつかはしける
 藤原とさふる時雨トキヲ
 わらたまのとしはけふあすにこゆへしあふふかやまをわれやまくれん

後撰和歌集卷第十五

雑歌一

仁和のみかどさかの御時の例にてせり川に行幸し給ける日
仁和三年四月十三日教仕
 在原行平朝臣
 寛平二年歳七十六

さかの山みゆきたえにしせり川のちよのふるみちあどはありけり
 おなし日たかゝひにてかりきぬにつるのかたをぬひて書付たりけ
 る
 おきなさひ人などかめそかりころもけふはかりとろたつもなくなる

雑歌 さまゝの歌ましは
 り入たる故也
 仁和のみかどさかの御時の
 例にて 袖中抄云帝皇系
 圖に嵯峨深草の御時に芹
 河行幸といふ事はしるさ
 す光孝天皇仁和二年十二
 月十四日有二月河行幸一
 云云愚案但此集ニ嵯峨の
 御時の例とあれば嵯峨の
 帝も野行幸有し例にて光
 孝天皇も如此なるへし

せり川に 袖中抄に大鏡に深草の帝の比の芹河行幸に琴の爪をおとし給へるを昭宣公拾ひて奉給ふ所に極樂寺を建立し給ひ
 し事をひきて鳥羽の南に芹河あり是なりといへり師説嵯峨にあり千代の古道葛野郡にあり宗家卿さかの山千世の古道あり
 へめてさ新古今によませ給へは芹河嵯峨なるへき事勿論歎云云
 さかの山みゆきたえにし 八雲御抄云さかの山は行平詠非山只天皇の御事を山といへり愚案嵯峨の天皇野行幸のち絶た
 りしを今光孝天皇の并興の御事を千代の古道跡は有けりとよめりみゆきを深雪にそへて雪消の道の跡さめ行心はへによめ
 るなるへし爲家云嵯峨之山也非野ヨミクセなり
 おなし日たかゝひにて 伊勢物語におほたかのたかゝひにてさふらはせ給ひけるさ有時也
 おきなさひ人などかめそ 傑案抄云翁さひは老く猶されすけるよし也七十の中納言猶僧飼のさうそくからしくしと思ひてよ
 まれたるにや袂に袖を縫たる也愚案行平此時六十九歳なればかやうの供奉もけふはかりなれば翁されし狩衣も人なまかめ
 そと也越もなくと云に我もの心をこめたり

行幸の又の日なん致仕の表奉りける

札記七十而致仕云云致仕はツカヘチヤムルミヨビ也

いまにてはなごかは 年きりさば樹木の花枝ならさるを云也友則の無官を比して也

はるくのかすはわすれす有なから花さかぬ木をなにうへけん
返し
とものり
贈太政大臣

春々の也大和物語三條右大臣歌にも「春々の花はちるとも咲ぬへこと有春

いまにてはなごかは花のさるすしてよろとせあまるとしきりはする

このご同心也花咲ぬ木さは友則のみつからいへるなるへし

はるくのかすはわすれす有なから花さかぬ木をなにうへけん
受領して外國にゆきめぐる事也
外吏にしはくまかりありきて殿上おとりて侍ける時兼輔朝臣のも
平な
中興 季長子 大和物語に 近江介云云

殿上おとりて侍ける時 中興 蔵人なりしか 巡 時 のち殿上をおとりて受領せしなるへし

よどもに岑へふもとへおりのほりゆく雲の身はわれにそありける
またささきになり給はさりける時かたはらの女御たちをねみ給ふ
けしきなりけるときみをと御さうしに忍びて立より給へりけるに
御たいめんはなくて奉り給ひける 嗟 峨
后 嘉智子仁明母后贈 太政大臣橋清友女

よどもに岑へ麓へ よこもには一生なごの心也 殿上を岑さいひ殿上おとりしを麓と云也吏務にのみかつらふさまを雲に比して讀也
ことしけしはしは 後の御方へ御出を妬む人あれは夜更て人しれすおはしませごの心也雲の間は事しけしはしは立ておはせ其程になく露は我出あらん時はらひまいらせんと也しははたてれといふさてふするにはあらぬ心はいはんとての下句なるへし

ことしけしはしはたてれよひのまををけらん露はいててはらはん

てる月をまさ木の 僻案抄

家に行平朝臣まうてきたりけるに月の面白かりける夜さけなとた

云まさきのつなごは正木の 葛の網になひて柳木を引事にそへたり感涙面白き月をもて此人とめんの心なるへし

うへてまかりたらんとしけるほどに河原 左 大臣寛平七年落

かきりなきおもひのつなご 同抄云おもひのつなご思緒 愁緒別緒心緒なきいふ事 の心歎愚案我に限なき思ひのつなごあれは正木のかつらより給ふにも及ばじ

かきりなきおもひのつなごなくはこる正木のかつらよりもなやまめ
世中をおもひうして侍けるころ 業 平 朝 臣
すみわひぬいまはかきりとやまさとにつま木こるへさやともとめてん
我をしりかほにないひうと女のいひて侍ける返事に
かきりなきおもひのつなごなくはこる正木のかつらよりもなやまめ

すみわひぬ今はかきりと 伊勢物語ニハ京をいかく思ひけんひんかし山にすまんご思入てと有て身をかくすへき宿もとめてん

はちすのはいをとりて
一本ニハ此歌次の瀧の糸なみの下にあり
よみ人しらす

さあり歌の心は明也爪木は薪也

あしひきの山におひたる 序歌也或抄云我を知らほにはいひそと女のいふに答てあふ深山木の朽木とも知ましき也

はちすのはいにそ 僻案抄云是ははすの菊と云物也愚案字彙云菊 菱藕根之小者云云纏路に洗る身は泥中のはすのはいと思ふ也

はちすのはいにそ人はおもふらん世にはこひちの中におひつゝ

はちすのはいにそ 僻案抄云是ははすの菊と云物也愚案字彙云菊 菱藕根之小者云云纏路に洗る身は泥中のはすのはいと思ふ也

はちすのはいにそ人はおもふらん世にはこひちの中におひつゝ

伊勢のうみのつりの 正義
 云々を夢氣なるこそへた
 り心ふが物思ひ洗める
 心なり
 しら川の瀧のいせ見ま 瀧
 の糸を最見まほしとそへ
 舞りまいりて見まほし切
 れきみたりにはよせ給ふ
 まじき也みたりにも糸
 の縁也
 白河のたきのいそなみ 序
 歌系をいそなみつまなる
 きいひがけて也夜を待て
 ませ申さぬのたはふれ
 也

蟬丸ニ一條禪師の東齋師
 蟬丸ニ式部卿致親王の雑色也盲目にて琵琶を得たり云云三光院御覽此問書に行かふ人を見てきあれは盲目といふは
 誤地との給へり此旨云在明の時の道人也常に髪をそらす世人驚き疑す或は仙人さといふ也
 これるこのゆくもかへるも 師云是此相坂の關は東路にゆく人も都へ歸る人もこのをわかれつゝさりてはしるもしめぬも
 又來てあふ所にてあり之也此旨云なもては旅客のゆくもこのさま也下心は會者定難の心也ゆくも歸るもさは流轉の心也師生
 死流轉をて前世の業下なりて此世に生れて此世の業にひかれて又未來の生を得る也かくのこころ生れがはり死にかはるは
 こそ生死流轉といふ也心つか生死をばなれて涅槃にいたり侍ちん此歌も是や此生死輪廻のさまよと觀んたるゆきそ

すかたあやしと人のわらひければ
 伊せのうみのつりのうけなるさまなれとふかきこゝろはそこに沈めり
 小一條太政大臣忠平贈貞信公
 おほさおほいさうちさみの白河の家にまかりわたりて侍けるに人
 入のつほねに也
 のさうしにこもりて
 中
 しら川の瀧のいせ見まほしけれとみたりに人はよせしものをや
 かへし
 おほさおほいさうちさみ
 白河のたきのいそなみたれつゝよるをそ人はまつといふなる
 相坂の關に菴室をつくりてすみ侍けるにゆきかふ人を見て
 丸

これるこのゆくもかへるもわかれつゝしるもしらぬもあふさかのせき
 丸

さためたる男もなくて物思ひけるころ

小野小町

あまのすむらちこく舟
 たためたるつまもなく深ひ
 たるさまにて世をわたる
 身のほさを楓なき舟に比
 してよめり女は三従の禮
 あり其中年にては男を定
 てそれにしたかひて世を
 過すへき物なるへし
 ななしもあらす伊物に只
 直つあるへきと同心也始
 の女に只其まもあらす
 物いはんさいひ遣し也
 はまらとりかひなかり 我
 身を千鳥に比して也
 法皇寺めぐり 宇多法皇諸
 寺をめぐらせ給ふ元亨釋
 書委
 このみゆさちとせかへて
 童蒙抄傳の部に此歌あり山伏さば僧をいふ也此御幸を千年もかへすして見まほしき我らも供奉し時をえんと也楓をそへて
 也
 ほめ申心也今はかやうに讀ましき也

あまのすむらちこくふねのちをなみ世をうみわたる我ろかなしき
 わひしりて侍ける女心にもいれぬさまに侍ければこゝ人の心さし
 あるにつき侍けるをなをしもあらず物いはんと申つかはしたりけ
 れと返事もせず侍ければ よみ人しらす
 はまらとりかひなかりけりつれもなき人のあたりはなさわかれども
 法皇寺めぐりし給ける道にて楓の枝をおりて
 素性法師

このみゆさちとせかへても見てしかなかゝる山ふしとさにおふへく
 西院のささおほんくしおろさせ給ておこなはせ給ひける時かの
 院の中島の松をけつりてかさ付侍ける
 をとにさく松かうら嶋けふる見るむへもこゝろあるあまのすみけり
 集ニハあらせなん見まほし
 サイ井正子院職皇女淨和后

童蒙抄傳の部に此歌あり山伏さば僧をいふ也此御幸を千年もかへすして見まほしき我らも供奉し時をえんと也楓をそへて
 也
 ほめ申心也今はかやうに讀ましき也

五節のまひ姫にてもしめし
とめらるゝ源氏乙女
巻細流云舞姫を其まゝと
り給ふ事善相公の意見
に見えたり愚案二條后も
十七歳にて五節の舞姫に
て其まゝ入内なりしたく
ひ也

くやしくそあまつ 五節は
天女をなぞらへたればあ
まつ乙女と成にけるまよ
めり
すまひのかへりあるし 此
集第六秋中ニ注

中將にてまかりて 相撲左
方勝時は左大將家にて
カレリ
還 聖せられて左近の中
將少將等まいるる也
人のおやの心はやみに 心明也大和物語には兼輔朝臣のむすめ 事を延喜帝に奉りていかゞ思召らんと思歎きて帝へ讀て奉給
ふごち自然共家集にも此集の趣に似たり
ふにはかたなにいも 難波海は何にも枕詞水屋壘は深きの枕詞也何ばかりの物ならねと深き志を見すると也みなつくしに
難波をへてより

五節のまひ姫にてもしめしとめらるゝことやあると思ひ侍ける
をさもめらるゝりければ 藤原のしげかぬむすめ

くやしくろあまつをどめと成にける雲ちたつぬる人もなきよに
太政大臣の左大將にてすまひのかへりあるし侍ける日中將にて
まかりて事をばりてこれかれまかりあかれけるにやんことなき二
三人とめてまらうとあるしさけあまたひのちるひにのりて
事也
子どものうへなど申ける次にて 兼輔朝臣

人のおやの心はやみにあらねども子をおもふみちにまどひぬる哉
女どもたちのもどにつくしよりくしを心とすこと
大和物語ニ、海國島風の遊女云云
大江玉淵朝臣のむすめ

なにはかたなにいもあぢすみをつくしふかきこゝろのしるしはかちる

二品式部卿陽成院第三
元長のみこ住侍ける時てまさくりに何いれて侍ける箱にか有けん
下おひしてゆひて又こん時にあけんどものかみにさじをさて
出侍にけるのちつねあさらのみこにどりかくされて月日久しく侍
てありし家に歸りて此箱を元長のみこにをくるとて
中務

つねあさらのみこにさり
常明親王 二品刑部卿本
名將明延喜第五
あけてたに何にかは 浦島
子事日本紀万葉童抄
等に委水江の浦島か子蓬

茶の神女に逢て不老不死
なるべき物の故郷に歸り
て神女か形見の箱を明て
見しより俄に老てうせし
事也此古事な思へばこの
箱をもあけて何せん也
月日へて有し家に歸てと
いふ陶書に心を付へし
年をへてにこりたにせぬ

彼新司治方があるしまつ
けはんための屏風の歌也
玉もかへりてすむまは童抄云もるこしに孟嘗といふもの合油の太守たりき其所もさより珠をとりに米にかへたりしか
るにさきの太守むさぼりて民をして玉をさらしむつみてみづから玉たらまらにうつりさりぬ合油に玉なし肌死ぬる
者道にみづり孟嘗ゆきのぞみて一年の間にさりたる玉又歸れり云云愚案蒙米に孟嘗 還珠とあり歌の心は忠房の國司のほ
と年をへて吏務にこりなければさひ江の玉も歸り住んせ也證心を添て讀也
兼輔朝臣宰相中將より 延喜五年任中納言一超三上藤五人一八年兼右衛門督

兼輔朝臣宰相中將より 延喜五年任中納言一超三上藤五人一八年兼右衛門督

あけてたになに、かはせんみつり江のうららしまのこをおもひやりつ、
忠房朝臣つかみにて新司はるかたかまうけに屏風てうしてかの
國の名ある所にゑにかへせてさひ江といふところにかけりける
た、みね

年をへてにこりたにせぬさひ江にはたさもかへりていさうすむへさ
兼輔朝臣宰相中將より中納言になりて又の年の弓のかへりたち
のあるしにまかりてこれかれ思ひをのふるつゝるに

兼輔朝臣
玉もかへりてすむまは童抄云もるこしに孟嘗といふもの合油の太守たりき其所もさより珠をとりに米にかへたりしか
るにさきの太守むさぼりて民をして玉をさらしむつみてみづから玉たらまらにうつりさりぬ合油に玉なし肌死ぬる
者道にみづり孟嘗ゆきのぞみて一年の間にさりたる玉又歸れり云云愚案蒙米に孟嘗 還珠とあり歌の心は忠房の國司のほ
と年をへて吏務にこりなければさひ江の玉も歸り住んせ也證心を添て讀也
兼輔朝臣宰相中將より 延喜五年任中納言一超三上藤五人一八年兼右衛門督

賭弓 選立 嬰 年中行
 事歌合注云賭弓と云事は
 天皇弓場殿に望て弓を御
 覽する也中春に弓をみる
 事は禮記なきにも侍るに
 や是は左右近衛左右兵衛
 四府の舍人との射侍也
 左右大將射手の奏をさる
 大かた近衛の管領にてあ
 れば事果て後大將射手に
 嬰たふ也是をへりあ
 るしとは申にや愚案選
 立ノ嬰ノ同

ふるさとのみかさの山はとをけれとこゑはむかしのうとからぬかな
 わはちのまつりごととびとの任はてのほりまうてきてのころかね
 すけの朝臣のわはたのいへにて 粟田拾芥神岡北云云 み つ ね
 ひさうへし人はむへこそ老にけれ松のこたかくなりにけるかな
 人のむすめに源のかねさかすみ侍けるを女の母聞侍ていみしうせ
 いし侍ければ忍ひたるかたにてかたらひけるわいたに母しらすし
 てにはかにいさければかねさかにけてまかりければつかはしける
 ●女のは

ふるさとのみかさの 大將
 小山田のおどろかしにもこさうしをいとひたふるににけしきみかな
 中將をみかさ山さいふ事前二註兼輔卿もと中將にて今中納言なればふるさとのみかさの山は遠けれと讀給ふ也下句は名
 聲さて其人の名譽をこまといふにや今納言さて其名聲さのみ昔にかはらすといはんさて昔のうとからぬ哉となるへし
 あはちのまつりごととびと 淡路権出権なまつりごととびとよむ也四ヶ年の任限果て上京也
 ひさうへし人はむへこそ 一任四ヶ年のほさに人も老松も長せしと也むへは宜の字也
 母しらすしてにはかにいさければ かねさか忍ひぬるをもしらて毎の遠慮なく女のあるかたへきたりし也
 小山田のおどろかしにも ひとふるは一向さいふ間に引板とて山田の鹿をさるかしにいひかけて也我としてそなたを驚さん
 とても來ぬにひたふるにもたらにけ給ひしと也

大臣めしありて 任大臣也
 承平三年二月十三日仲平
 任右大臣左大將如元
 齊宮のみこ 系三寛平皇女
 母高藤公女
 いかてかのとしきりもせぬ
 仲平公兄弟各三公にのほ
 り榮ふに左方公はうせ給
 ひなとすれば女御うちや
 みてかくよみていとこの
 齊宮へまいらせ給ひしな
 るへし齊宮御母は定方公
 の妹也

定方公承平二年八月四日薨
 三條右大臣身まかりてあくる年の春大臣めしありとさして齊宮の
 みこに遣しける
 大和物語いかにかく
 いかてかのとしきりもせぬたねもかなあれたるやとにうへて見るへく
 かの女御左のおはいさうちさみにわひにけりとさしてつかはしけ
 る 齊宮のみこ系子

春こまにゆゆてのみ 小野
 宮の左大臣は仲平公の甥
 なれば年切もせずといふ種と讀給ふ也
 おもひさやさみか衣を 勸物云叙三位一時着二大臣袍一流例也餘案抄云さきむらさきは三位の袍を云也 袍は一位より
 三位まで同色四位紫五位緋六位緑四位叙三位一時着二大臣袍一也 庶明卿參議正四位下左大弁にて天曆五年に權中
 納言に任じ從三位に叙する時九條右大臣 袍をつかはしける歌也今世ニハ四位偏に公卿に同て着也愚案思ひの外の昇進
 をよるこひ給ふ心なるへし
 いにしへも契りて 餘案抄云飛立めへしとは任中納言悦喜自愛の由也愚案前世の契にてかゝる悦ひに逢 袍を給ふにや
 さの心也紀有常衣を得て是や此天の羽衣と讀し心もあるにや天人の羽衣の心也

大和物語 花さかり春はみにこん
 春こまにゆゆてのみ見ん年さうりもせずといふたねはおひぬとかさく
 庶明朝臣中納言になり侍ける時うへのさぬ遣すとて
 右 大 臣師輔公
 おもひさやさみかころもをぬきかへてこまむらさきのいろをさんどは
 かへし もろあさらの朝臣
 いにしへもちさうりてけりなうちはふきとひたちぬへさあまのはころも

後撰十五 雜一
 二百十七

ふるさこのならの都のな
れにけりさは着馴たる也
いたく古たる衣なればか
くよめるなるへし

ふりぬきて思ひも 此衣を
古きとて思ひ捨たらば老
たる大輔の身にこそへて

古き物を捨るゝ恨らやせ
んさ世大輔が古たるさ
はんさでの戯れ也うちみ
は衣の縁也あやなはあら
きなしと同

なかれての世をはたのます
なかれての世とは行末の
事也あはにきぬるは池
と消ぬると同心水の池と

思ひきけて時にあはぬ身
さ思へばと也
くらうとよりかうふり 六位藏人四年奉公の後必巡露さて五位になし給はるをかうふり給はる云也六位も藏人は昇殿なる
を五位に成て藏人なはなるれば殿上をおるゝ事也
うはたまのこよひはかりそ 緋衣五位也明れば殿上人ならはよそにみんさ也
人わたすことたになきを 長柄橋は古ぬる事にいへり橋は人渡す儀あり我はさやうの體もなきに何しが徒に古ぬらんさ也

宿衣也よるのものなるへし
まきたかどののものを取たかへて大輔かもとにもてきたりけれ
は 大 輔

ふるさこのならのみやこのはしめよりなれにけりとも見ゆるころもか
返し まきたか 雅正

ふりぬきて思ひもすてしから衣よりへてあやならみもろする
世の中の心にかなはぬなど申ければ行さきたのもしき身にてか
る事あるましと人申ければ 大江千里

なかれての世をはたのます水の上のあはにさえぬるうき身とおもへは
藤原のさねさかくらうとよりかうふりたまはりてあす殿上おりん
りなんさ
としける夜酒たうへけるつゐてに 兼 輔 朝 臣

うはたまのこよひはかりそあけころもあけなはさみをよりにこそ見り
法皇御くしおろし給ひてのころ 津國也 七 條 后 滿子

人わたすことたになきをなにしかもなからの橋と身のなりぬらん
御かへし い せ

ふるゝ身はなみたの中に
ふるゝ身は古ぬる身也老
たる身は泪の中にある故
に河上の橋と人あやまち
て見るらんさ世伊勢が身
の確なるへし

ひとりのみながめて年を
敦實親王仁和寺におはせ
し故仁和寺宮と號す獨の
み詠て年を古郷さ仁和
寺かよみ給ふなるへし出
家のうちの御さまにや

まめなれさあた名は まめ
は眞實也風流島は肥後也
ぬれ衣はなき名也名はた
はれ島もさき名にてた
はれたる事もし我もま
めなれさあたなりさばあ
た名なるへしと也

年をへてたのむかひなし 常盤の松も色かはれば年へし中も頼かたしと也
へたてける人の心の 人の心のうきと云かけて也浮橋はあやうき物なれば枕詞に置て橋階を文にそへてよめり我を隔てかく
し給ふさまなあやうきまでにはの見しと也

ふるゝ身はなみたのなかに見ゆればやなからのはしにあやまたるらん
京極のみやす所あまになりて戒うけんとて仁和寺にわたりて侍け
れば あつみのみこ 敦實親王 天曆四年出家

ひとりのみながめて年をふる郷のあれたるさまをいかに見るとら
女のあたなりといひければ あさつなの朝臣 参議朝綱 大江玉淵子

まめなれとあたなはたちぬたはれしまよるしらなみをぬれさぬにきて
あひかたらひける人の家の松の梢の紅葉たりければ よみひとしらす

としをへてたのむかひなしときはなる松のこす糸のいろかはりゆく
男の女の文をかくしけるをみてもとのめの書付侍ける 四のみのむすめ俊成卿の本にあり 四條御息所のむすめ

へたてける人の心のうきはしをあやうきまでもふみ見つるかな

小野好古朝臣西の國のうての使 討手使也伊豫海賊
スミトモツ
 純友追討事也小野好古
 勸物云朱雀院御宇天慶元年正月右少將二年正五位
 下三年兼追討凶賊使大和
 物語に野大貳好古すみと
 もかさはきの時うての使
 にさされて少將にてくた
 りけり云是也

小野好古朝臣にしの國のうての使にまかりて二年といふ年四位に
只今五位少將也
 はかならずまかりなるへかりけるをさもわらすなりにければか
 賊使にてある事也
 ることにしもさくれにけることのやすからぬよしをうれへをくり
 て侍ける文の返事のうらにかきつけてつかはしける
 源公忠朝臣 號滋井右大弁 大藏卿國紀子
 たまくしけふたごせあはぬさみか身をわけなからやはあらんと思ひし
 かへし
 小野好古朝臣
 わけなからとしふることは玉くしけ身のいたつらになればなりけり

玉くしけふたごせあはぬ
 ひあけなからなさいはんためになけり童蒙抄云あけなからやはさは五位の緋衣をきなからやはさいへる也愚案かく西國に
 さまよひ給ひて二年あはぬ君をよも四位にはあり給ふへし赤衣なからにてやはかおはさんとおもひしと也
 あけなからとしふる事は 玉くしけ身をいはんとて也かく五位の緋衣なから年をふるも何ゆへなればかゝる追討使にさ
 れて外國に苦しみていたつらなる身さなるゆへ也都にあらは四位にならん物たと也純友天慶四年に居るひて其年の五月
 二日好古從四位下になり給へり五十八歳

後撰和歌集卷第十六

雜歌二

おもふ心ありて前太政大臣によせて侍ける
忠仁公 いひやるを云也

在原業平朝臣

たのまれぬうき世の中をなげきつゝ日かけにおふる身をいかにせ
拾芥云彌勒在志賀郡
 やまひし侍てあふみのせき寺にこもりて侍けるにまへの道より閑
于女 丈六十佛二尊如意輪
 院の石山にまうてけるをたのいさなんゆき過ぬると人のつけ侍
 ければをひて遣しける
 としのさの朝臣

あふさかのゆふつけになく鳥のねをさゝどかめすうゆきすきにける
本院也
 前中宮の宣旨贈太政大臣の家よりまかり出てあるに彼家にとこに
 ふれて日くらしといふ事なん侍ける
其案にいひそめし願言なるへし
 宣

前太政大臣 良房公也太政
 大臣久しく絶て文徳の御
 時良房公任し相續て基理
 公又任しければ良房を前
 といひ基理を後と云也
 たのまれぬうき世の中を
 おほやけのかしこまりに
 てこもり給ひしほきの
 事にやそれを日陰に生る
 身とよめるなるへし業平
 は忠仁公の家來なれば此
 歌を申給へるにこそ
 あふさかのゆふつけに 古
 今一蓬坂の木綿付鳥にあ
 らばこそさみのゆきとな
 なくくも見ゆ 日陰八雲
 御抄云ゆふつけ鳥は木綿
 付て蓬坂に被故也愚案四
 境の祭の事なり此歌ゆふ
 つげにさ八夕附にさいひかけて夕に鳴鳥をも聞きかめす行過給ふよ閑院が立よらぬをこころなるへし
 みやまよりひなき聞ゆる 彼日くらしと云願言を出の日晚にそへて其願言を今も絶て消ぬへしと也只本院を懸しきさいはん
 ため也

日くらしのこゑを戀しみ

さほど戀しくて思ひ消る

さならは早くも来たれり

しこ也深山邊異木となり

昔損しにや

ちのはれしがもの河原に

古今一笹のくまびのくま

河に駒さめてしはし水か

へ影なかにみん 此歌を

少取つて中の醫の詞を

のこちて大段をばはしこ

りまり給へと尋へる心な

るへし影斗たにみんと也

わがのりしこをうしとや

我のりしなうしとて死た

るにやといひて半をそへ

てりまり草葉にのる露

の命きは牛は草を食て命

をのふる物なるへし

かくてのみやむへし物か

心は明也

みこしなうしとて死た

るにやといひて半をそへ

てりまり草葉にのる露

の命きは牛は草を食て命

をのふる物なるへし

かくてのみやむへし物か

心は明也

御時北野にも大原にも行

幸あり 爲家抄云是は野

行幸也鷹狩御覽のため也

神社ほのちの事也云云愚

案みこしなうしとて死た

るにやといひて半をそへ

てりまり草葉にのる露

の命きは牛は草を食て命

をのふる物なるへし

かくてのみやむへし物か

心は明也

戒仙 戒仙ほうし也大和物

語にかひせうさあり

いつれなかな雨ともわかん

山ふしは法師の事也雨中

の物倍しきの泪をよめる

なるへし

おひひにはきゆるものそき

おもひを日にそへて今朝しも

おきて歸りしうさ也日に霜の

めつらしやむかしなからの

ら山なれば珍じやといへる

宇治の網代にされる人 網代

うち川の波にみなれし 水馴

返し

日くらしのこゑをこひしみけぬへくはみやまはどりにばやもさねかし

河原に出て被へし侍けるにおはひさうちさみもいてあひ侍りけれ

は

あつたへの朝臣の母棟梁女

爲家言たてしさいふ事歎云云

ちかはれしかも河原に駒とめてしはし水かへ影をたに見ん

大和物語にはおほきか牛をかりてあり

人のうしをかりて侍けるに侍にければいひつかはしける

開院のこ

わかのりしことをうしとやさねにけん草葉にかゝる露のいのちは

延喜御時賀茂臨時祭の白御前にてさかつきとちて

三條右大臣

かくてのみやむへさものかちはやふる賀茂のやしろのよつつよを見ん

おなし御時小野の行幸にみこし岡にて

糺紀左大臣仲平公

みこしをかいくろのよにとしをへてけふのみゆさをまちて見つらん

戒仙のふかき山寺にこもり侍けるにこと法師まうてきて雨にふり

こめられて侍けるに

よみ人しらす

いつれをかな雨ともわかん山ふしのおつるなみたもふりにこるふれ

これかればひて夜すから物かたりしてつとめてをく侍ける

おさかかせ

おもひにはきゆるものそきしりなからけさしもおきてなにくつらん

わかう侍る時は志賀につねにまうてけるをとしおひてはさみ侍

らざりけるにまみ侍て

よみ人しらす

めつらしやむかしなからの山の井はしつめるかけそくちはてにける

宇治のあしろにされる人の侍りければまかりて

大江興 俊甲豊少目

うち川の波にみなれし君ませはわれもあしろによりぬへきかな

おもひを日にそへて今朝しもいふてにはの詞を霜さひひかけてよめりおもひに

おきて歸りしうさ也日に霜のきゆる心ないひかけておきても霜の縁語也

めつらしやむかしなからの 長良の山井ないひかけてこは昔なからにて

ら山なれば珍じやといへるなるへし

宇治の網代にされる人 網代守とてあま水魚の使さても有さやうの事にて居る人

うち川の波にみなれし 水馴と見馴さをそへて網代は水魚のよる物なれば我も見馴し君に立よらん也

ふきつるれこる ねこ
こるは根幹の心也動にて
調するを根所高くも也故
ある腐なれば初秋の風は
手馴もせしと也 五葉集

朱雀院にや 院のみかど内におはしまし いまた位にわたらせ給ける時也
まつるとて 小貳のめのと

こころしてまれにふき
小貳乳母の念を入れて進せし
肩なれば山下嵐の心なき
たくひにはなさしと也
はかふくてたねなん 此男
絶々に語らふ中にやはか
なく絶ん物から何におほ
くもかへんさまめしけな
く思ふも也蜘蛛の葉づくに
うへて也

返し 大
こころしてまれに 秋かせをい 風なれば山おろしにはなさしとるおもふ
おとこのふみおほくかさてとひひければ 草子なきかへせしにや

むかしよりくらまの山と
くらまをくらま心にてま
るこゆるゆへにやこころを
くらま古人の名付たる
らんさの心也
雲のちのはるけき 雲居路
也男の心のかはる事はなさにいかなる風の傳にや 雲居の縁也

はのなくてたえなんくもの糸ゆへになにかおほくかへん すらん
くらまのさかをよるこゆとてよみ侍る ひるい
むかしよりくらまの山といひけるはわかこと人もよるやとえけん
男につけてみちのくにへむすめをつるはしたりけるにうのおとこ
心かはりたりとさして心うしとおおのいひつかはしたりければ
讀人しらす

あま雲のうさたる 浮たる
事とは願しからぬ心也尤
さやうには聞しかさ猶心
もさなく心も空に成しと
也母のこころ誠に哀なる
へし
われはおしやらねば人に
忍ぶ中なれば破へきをや
ればおしと也なつかしき
文ながら有て人に見ねん
よりば鳴鳴も返さんにし
かじと也かへしわふる心
をこめてなくくさいふ
也

かへし 女のは
あま雲のうさたることいさし かどなをうこ ろはらになりにし
たささかにかよへりけるふみをこひかへしければ其文に具じてつ
かはしける もとよしのみこ

もち月のこまより 望月の
胸をいひかけて月の木間
より遅く出し故山路たと
りてまいるこころの心を願
也

やれはおしやらねば人に見ねぬへしなくくもなをかへすまされり
延喜御時御馬をつかはしてはやくまいるへきよしおほせつかはし
たりければすなはちまいるておほせとてうけ給はれる人につかは
しける 素性法し

もち月のこまよりを早く出つればたどるくろやまはこねける
やまひして心ほろしとて大輔につかはしける

藤原あつとし定家本如此
い宮少將行成之本如此云云
よるつよとちさりしこと い たつらにひとわらへにもなりぬへきかな
返し 大
かけていへはゆしき物を万代とちさりしことやかなはさるへき

藤原教致 清信公一男母左大臣時平女天慶六年藤人右近少將九年十一月正五位下天曆元年卒
よるつよとちさりしこと い たつらにひとわらへにもなりぬへきかな
かけていへはゆしき 万代と契し事はかなはさるへきまやらの事をいけていへは い まなりしきたなの給ひそとの心也

素性法し つるい
もち月のこまよりを早く出つればたどるくろやまはこねける
やまひして心ほろしとて大輔につかはしける

あま雲のうさたる 浮たる
事とは願しからぬ心也尤
さやうには聞しかさ猶心
もさなく心も空に成しと
也母のこころ誠に哀なる
へし
われはおしやらねば人に
忍ぶ中なれば破へきをや
ればおしと也なつかしき
文ながら有て人に見ねん
よりば鳴鳴も返さんにし
かじと也かへしわふる心
をこめてなくくさいふ
也

素性法し つるい
もち月のこまよりを早く出つればたどるくろやまはこねける
やまひして心ほろしとて大輔につかはしける

あま雲のうさたる 浮たる
事とは願しからぬ心也尤
さやうには聞しかさ猶心
もさなく心も空に成しと
也母のこころ誠に哀なる
へし
われはおしやらねば人に
忍ぶ中なれば破へきをや
ればおしと也なつかしき
文ながら有て人に見ねん
よりば鳴鳴も返さんにし
かじと也かへしわふる心
をこめてなくくさいふ
也

素性法し つるい
もち月のこまよりを早く出つればたどるくろやまはこねける
やまひして心ほろしとて大輔につかはしける

あま雲のうさたる 浮たる
事とは願しからぬ心也尤
さやうには聞しかさ猶心
もさなく心も空に成しと
也母のこころ誠に哀なる
へし
われはおしやらねば人に
忍ぶ中なれば破へきをや
ればおしと也なつかしき
文ながら有て人に見ねん
よりば鳴鳴も返さんにし
かじと也かへしわふる心
をこめてなくくさいふ
也

素性法し つるい
もち月のこまよりを早く出つればたどるくろやまはこねける
やまひして心ほろしとて大輔につかはしける

あま雲のうさたる 浮たる
事とは願しからぬ心也尤
さやうには聞しかさ猶心
もさなく心も空に成しと
也母のこころ誠に哀なる
へし
われはおしやらねば人に
忍ぶ中なれば破へきをや
ればおしと也なつかしき
文ながら有て人に見ねん
よりば鳴鳴も返さんにし
かじと也かへしわふる心
をこめてなくくさいふ
也

素性法し つるい
もち月のこまよりを早く出つればたどるくろやまはこねける
やまひして心ほろしとて大輔につかはしける

あま雲のうさたる 浮たる
事とは願しからぬ心也尤
さやうには聞しかさ猶心
もさなく心も空に成しと
也母のこころ誠に哀なる
へし
われはおしやらねば人に
忍ぶ中なれば破へきをや
ればおしと也なつかしき
文ながら有て人に見ねん
よりば鳴鳴も返さんにし
かじと也かへしわふる心
をこめてなくくさいふ
也

素性法し つるい
もち月のこまよりを早く出つればたどるくろやまはこねける
やまひして心ほろしとて大輔につかはしける

あま雲のうさたる 浮たる
事とは願しからぬ心也尤
さやうには聞しかさ猶心
もさなく心も空に成しと
也母のこころ誠に哀なる
へし
われはおしやらねば人に
忍ぶ中なれば破へきをや
ればおしと也なつかしき
文ながら有て人に見ねん
よりば鳴鳴も返さんにし
かじと也かへしわふる心
をこめてなくくさいふ
也

素性法し つるい
もち月のこまよりを早く出つればたどるくろやまはこねける
やまひして心ほろしとて大輔につかはしける

あま雲のうさたる 浮たる
事とは願しからぬ心也尤
さやうには聞しかさ猶心
もさなく心も空に成しと
也母のこころ誠に哀なる
へし
われはおしやらねば人に
忍ぶ中なれば破へきをや
ればおしと也なつかしき
文ながら有て人に見ねん
よりば鳴鳴も返さんにし
かじと也かへしわふる心
をこめてなくくさいふ
也

素性法し つるい
もち月のこまよりを早く出つればたどるくろやまはこねける
やまひして心ほろしとて大輔につかはしける

あま雲のうさたる 浮たる
事とは願しからぬ心也尤
さやうには聞しかさ猶心
もさなく心も空に成しと
也母のこころ誠に哀なる
へし
われはおしやらねば人に
忍ぶ中なれば破へきをや
ればおしと也なつかしき
文ながら有て人に見ねん
よりば鳴鳴も返さんにし
かじと也かへしわふる心
をこめてなくくさいふ
也

素性法し つるい
もち月のこまよりを早く出つればたどるくろやまはこねける
やまひして心ほろしとて大輔につかはしける

あま雲のうさたる 浮たる
事とは願しからぬ心也尤
さやうには聞しかさ猶心
もさなく心も空に成しと
也母のこころ誠に哀なる
へし
われはおしやらねば人に
忍ぶ中なれば破へきをや
ればおしと也なつかしき
文ながら有て人に見ねん
よりば鳴鳴も返さんにし
かじと也かへしわふる心
をこめてなくくさいふ
也

素性法し つるい
もち月のこまよりを早く出つればたどるくろやまはこねける
やまひして心ほろしとて大輔につかはしける

あま雲のうさたる 浮たる
事とは願しからぬ心也尤
さやうには聞しかさ猶心
もさなく心も空に成しと
也母のこころ誠に哀なる
へし
われはおしやらねば人に
忍ぶ中なれば破へきをや
ればおしと也なつかしき
文ながら有て人に見ねん
よりば鳴鳴も返さんにし
かじと也かへしわふる心
をこめてなくくさいふ
也

素性法し つるい
もち月のこまよりを早く出つればたどるくろやまはこねける
やまひして心ほろしとて大輔につかはしける

あま雲のうさたる 浮たる
事とは願しからぬ心也尤
さやうには聞しかさ猶心
もさなく心も空に成しと
也母のこころ誠に哀なる
へし
われはおしやらねば人に
忍ぶ中なれば破へきをや
ればおしと也なつかしき
文ながら有て人に見ねん
よりば鳴鳴も返さんにし
かじと也かへしわふる心
をこめてなくくさいふ
也

素性法し つるい
もち月のこまよりを早く出つればたどるくろやまはこねける
やまひして心ほろしとて大輔につかはしける

ちるを見て袖にかくれと
あられのもろきを海邊な

れば波の花そよ也荒海
波の花さいふ心也

南殿に紫雲殿は物見の女
房など誰ともなくさふら

ふ所どかや
すけむと朝臣 藤輔臣春宮

少進利部大判事参議玄上
男

たちさばく波間を もくつ
に香をそへたり人さばか

しき所にてかし玉へるを
謝せる心也かつくは藩層

取上る心也
かつきてし沖のむくつを

その海松和布をからせ
よとは我にま見えよこの心をそへていへり

かきりなくおもふ心は 大切に思ふ人の装なれば心をつくすさいひかけて一筑波根のかのもこのに陸はあれきなとよみし

間をうけてかく心つきでぬひつれこの装いかゝ氣に入侍んかき也

おもひて出てさふことの身の死て無ともふりなはかく有て思ひ出て訪問も誰か見ん生かへりたればこそ見れさいひ

てとばさりに恨をこめていへる心也

霞のふるを袖にうけてさびけるを海のはどりにて
よみ人しらす

ちると見て袖にうくれとたまらぬはわれたる波のはななるありける
ある所のわらは女五節見に南殿にさふらひてくつをうしなひてけ

りすけむとの朝臣くら人にてくつをかして侍けるをかへすとて
たちさばく波間をわけてかつきてしおきのもくつをいつかわすれん

かへし
輔臣朝臣

かつきてしおきのもくつをわすれすはそのみるめをわれにからせよ
人の装をぬはせ侍るにぬひてつかはすとて

よみ人しらす
かきりなくおもふこゝろはつくはねのこのもやいかゝあらんとすらん

おとこのやまひしけるをさふらはてありくしてやみかたにとへり
ければ

おもひ出てさふことの葉を誰見まし身のしらくもととなりなましかは
は

みろかおとこしたる女をあらくはいはてとへと物もいはさりけれ
は

忘れなんとおもふこゝろのつくからにこのはさへやいへはゆしき
男のかくれて女を見たりければ遣しける

かくれぬてわかうきささを水の上のあはともはやくおもひきえなん
世中をどかく思ひわつらひけるほどに女どもたちなる人猶わかい

はん事につさねどかたらひ侍ければ
いとこゝろいさやしら波たかければよらんなきさうかねてかなしき

いたくことこのひよしをどきの人のいふとさして
高津内親 王植武皇女

なをさ木にまかれる枝もある物をけをふきさすをいふかわりなき
帝に奉給ける
嗟 職 后 禮林皇后委于
元亨釋書

うつろはぬこゝろのふかく有ければこゝらちるはな春にあへること
あるイ

物は有ましきをなして疵を求ていふ事のわりなきよき也漢書云吹毛求疵

うつろはぬこゝろの 傳案抄云此御歌誰も心得たる人なきにや巨々等散花世人の物いひふと乱たりきにや又うつろはて長

閑に春に逢りきにや心得す云々口訣

玉たれのおみめのまより
 寒きと云に添て我思ひな
 いひ入んさ也火を入ん
 いひかけて也爲家抄義
 しらなみのたちさばはかれ
 女に立さばはかれて立歸り
 とは身なうしと思ふ泪
 にぬれじ也波の立と云
 ふり身なうしほ添て也
 此方にあへす立さばはかれし
 此方に取あへばこそあら
 めさかなきにあやしやと
 也
 たうちともたのまさらなん
 たうち直也衣關八雲抄
 陸奥云々たへは人に直
 にいへば隔心もあらし
 頼むべからず衣は身に近
 く關る物なから衣の關と
 て隔る縁あはれはと也
 あはぬまは戀じき道は 蓬堀しきの心まこひをいへんさての歌也道を知るといふよりなと逢ふそよめり心は明なるへし
 いかなりしふじにかいどの 思ふ人のふせへ恨るさまの度々来ていさくる氣色なきを歎く心なるへし糸の縁にて讀る歌也

これかれ女のもとにまかりて物いひなどしけるに女あなさむの風
 やと申ければ
 よみ人しらす
 玉たれのおみめのまよりふく風のさむくはそへていれんおもひを
 おどこの物いひけるをさばきければかへりてあしたにつかはしけ
 る
 しらなみのたちさばはかれてたちしかは身をうしははる袖はぬれにし
 かへし
 とりもあへす立さばはかれしあた波にあやしやなに袖のぬれけん
 題しらす
 たうちともたのまさらなん身に近きころものせきもありといふなり
 友たちの久しくあはさりけるにまかりてあひてよみ侍りける
 あはぬまは戀じきみちもしりにしをなどうれしきにまこひを
 題しらす
 いかなりしふじにかいどのみたれけんしるてくれどもとけす見ゆるは
 人のめにかよひける見つけるれて 賀朝法 師山法師云
 身なごとも人にしられし世中にしられぬ山をしるよしもかな
 返し
 もとのおどこ
 世の中にしられぬ山に身なごともたにのころのいはておもはん
 山井三條坊門北原西永頼三位家云云
 山の井のさみにつかはしける よみ人しらす
 をどのみきへてはやまし淺くともいさぐみ見てんやまのぬの水
 やまひしけるをからうしてをこたれりとききて
 しての山たどるくもこねなくでうさよのなかになにかへるらん
 たいしらす
 かすならぬ身もちにへてよし山たかさなほきをおもひこりぬる
 かへし
 よしの山こねんところかたからめたらんけさのかすはしりなん

身なごとも人にしられし
 爲家抄に身投共也云々世
 に面目なければ人知ぬ山
 を求て身投ん也
 世の中にしられぬ山に
 とひ世にしられぬ山に身
 なごともかゝる放逸無
 常の人は谷の心にもにく
 み思はん也北山遺文に
 列強争 闘 横峰 煉 賸
 又曰 洞 愧 不 敢 明 詠 云 群
 猶 誓 叩 谷 心 寒
 たにのみきへてはやまし
 よそに聞てのみはあらし
 さ也山井君といふに付て
 也
 しての山たどるくも
 ける世に何の輪廻をや
 死出山をたとりつゝ越んこぞ幸ならめ也
 かすならぬ身もちに 持荷也敷ならぬ身もちて高貴の人の及ばぬ戀の歎を思ひこりし心を高山に荷を持木こるは堪た
 き心にぞへてよめり
 よしの山こねんこぞ 敷ならぬ身といふにあたりて也高く及ばぬ山をこゆるはかたぐさもこりけん歎きの敷は知んさ也

後撰十六 雜二 二百二十九

敷ならぬ身になく 帝を殿
のしら玉に比して未さけ
させ給はぬ事を光り見え
さてよめり此歌の作者
大和物語には若狭の御さ
有小註の釣殿のみこと
光孝皇女配陽成院と
紹運録にあり

なにかたみきはの声の
厚歌也声の葉のかせにひ
るかへる心を恨みてとい
はんとて也るなたのうら
めしきゆへに我心もさけ
ぬそこ也

わするさばうらみ 「誓願
のさかへる山の椎葉の葉
かへはすさも君はかへせ
し 拾遺にもあり古歌也
此歌をうけて葉かへはす
さも君はかへしこそいひつれ椎は紅葉せれば君をかへんさは思はぬを忘るゝさは恨そこ也誓願は誓の意名さかへるは毛
たかふるこも袖中抄に有
なちこちの人めまれ 心問也大和物語には兼盛の遣しけるさ有

陽成院のみかどときさくとのゐにさふらはせ給けるをひさしうめ
しなかりければたてまつりける 武
敷ならぬ身にをく宵のしら玉はひかり見えさす物に有ける
まかりかよひける女の心とけすのみ見侍ければ年月へぬるを
ま心さけぬさ男のいひし也
いささちかゝる事といひつかはしたりければ
よみ人しらす

なにかたみきはの声のをひ風にうらみてうふるひとの心を
女のもとよりうらみをこせて侍ける返事に
わするさばうらみさらなんはしたかのどかへるやまのしむはもみちす
ひかしおなし所に宮つかへし侍る女の男につきて人の國におちる
たりけるをさつつけて心ありける人なればいひつかはしける
をちこちの人めまれなる山さどにいへるせんとはおもひさやさみ

身なうしと人しれぬ 零落
の身を人に見えん事うし
きて人しれぬ世界を尋出
てかく雲ふかき山にすむ
さの心也人しれぬ世をさ
尋れ住山ならぬかは其心
はへにてすむ山よとの儀
なり大和物語には此返歌
なし

かへし

身をうしと人しれぬ世を尋ねし雲のやへたつ山にやはあらぬ
おとこなど侍らすして年ころ山里にこもり侍ける女をひかしあひ
しりて侍ける人道まかりけるつわてに久しうさこゝろさつるを
におはすよこ也
こゝになりけりどていひいれて侍ければ
土 左

あさなげに世のうき事を忍ひつゝなかもせしまに年はへにけり
山さどに侍けるにむかしあひしれる人のいつよりこゝにはすむら
どとひければ
閑 院かんぬのこさお
なし

春やこし秋やゆきけんおほつかなかけのくち木と世をすくす身は
題しらす
貫 之
世の中はうき物なれや人こどのどにもかくにもさこえくるしき
よみ人しらす

あさなげに世の あさなげ
古今の岡也朝夕さおふし
なかもせしまにも小町か
間ばかりをされり心は朝
夕うき世を忍ひつゝ味る
ほきに年をへて久しう申
通せさりしきなるへし
春やこし秋やゆきけん
つよりこゝには住そと問
こたへ也陰の朽木の如く
にて過る身は春秋のゆきさ
もおほつかなければいつより
住さもおほつすとの心也
世の中はうき物なれや
とするにもかくするにも人言
の問は苦しきに世はうき物そと也
むさし野は袖ひつ 武蔵野の露に袖のぬるほさこ也思ふ人のゆかりの床しさにさまゝ尋てもえあはぬ事なごよめるにや

大あらしのもりの草 古今
大荒木の森の下草若れ
は駒もすさめする人も
なし 此歌にて我身若や
しねらんかりそめにも
ふ人なきと世草のるにそ
へてごめり

あはれてふごころそ 其方
のおた名は申さて只御た
めを哀さのみ口のはに
くるのやうなるは人を思
ふにこそはあぢめさの心
世口のはにかゝるやと添
でかくあるやさいふなり
ふごかせのたのちり 風
のしたの塵こそ立やすか
らめさしなきに名の立や
すき事なき俗歌の心なり
ふるさとのさほの河水 佐
保河は奈真なれば古郷の
讀でもさ通知たる中の人
なればかひなき給へば明也

いとまにてこもりゐて侍ける比人のこはす侍ければ

壬生 忠 岑

大あらしのもりの草とや成にげんかりにたにきてとふ人のなき
ある所にみやつかへし侍ける女のわた名たちけるかもとよりをい
れか上はうごになんくちのはにかけていはるなとらみて侍けれ
は
よみ人しらす

あはれてふごころつねの口のはにかゝるや人をおもふなるらん
たいしらす
伊 勢

ふくかせのしたのちりにもあらずにさもたちやすさわかうき名かな
春日にまうてける道にさは河のはとりにはつせより歸る女車の逢
て侍けるに藤のあきたるよりはつかに見いれければあひしりて侍
ける女の心さしふかく思ひかはしなからは、かる事侍てあひはな
れて六七年ばかりになりける女に侍ければかの車にいひいれ
侍ける
閑院左大臣冬國公
ふるさとのさほの河水はふもなをかくてあふせは流れしがあけり

ちかぬ 藤原千兼俊子か夫
なり
わかやをいつならしてか
楢の葉はならしかほこ
はん 枕詞也我宿をいつ立
ならし給ひて駒頭に折に
おこせ給ふぞと云り千兼
か見聞前を揮りていへ
るなるへし

ならのはの葉守の神 八雲
抄云はもりの神柏木にあ
り葉を守也袖中抄云樹神
也万の木を守る神也心は
明也俊子かもとに千兼あ
りしを比して讀給ふ也
かへりではこゝろやたかはん
此笛を返すに歸りてはこ
ゝろもたかひわへしつらく
にけ給ひし夜のたかみと
思へは其つらしとおもふ恨みのこゝろにもつらんとの心なるへし 怨者 其吟態云々
一ふしにうらみなはてそ かのみ一ふしにも恨給ひそ笛の聲のうらにも我酒を忘れぬ心あればと也笛には吹人のこゝろうつ
る物なれば也 文選馬融 長笛賦云通響 感物驚神 喻激致賦 効志云々一ふしは竹の聲也

枇杷左大臣より侍てならの葉をもとめ侍ければちかぬかあひしり
て侍ける家にとりにつかはしたりければ
と し こ

大和物かたりニハいつかはきみかならしはの
わかやをいつならしてかならのはのならしか波にはおりにをこする
かへし
枇杷左大臣

大和物かたりかはすとして
よみ人しらす
のわしたにつかはすとして
よみ人しらす

いへしてはれにやたつへき音にやなはんの心也
かへりてはこゝろやたかはん笛竹のつらさひとよのかたみとおもへは
かへし
一ふしにうらみなはてそふた竹のこゝろのうちにもおもふこゝろあり

人につぐたよりたに 我名
を人に告る便りも足下な
らばはなし彼駒もすさめ
すかる人もなしといへる
草の身なればさ也

兼忠朝臣 參議治一卿貞元

親王子母昭宣公之女兼忠

を仲平へ預し也
むすひなきしかたみの 此
子ともたにのこし給はず
は忍ふたれもあるまじき
せめて是たにあればこそ
母君を戀忍ふたれさもな
れこの心を籠をむすひて
草をつみ入る事にうへて
讀也

うれしきもうさも心は ち
ことなき人のさばせ給ひ
て嬉しきにも涙こぼれ物
思ひのうきにも落涙する心をかくふりり万法唯一心々外無別法の理也
おしからてかなしき物は 世の心にかなほ身はすつるともおしからすなからさすかに世をそむくへさかたもしられは
かなしき身也と也

もとより友達に侍ければ貫之にわひかたらひそ兼輔朝臣の家にな
つさをつたへさせ侍けるに其名つさにくはへて貫之にをくりける

み つ ぬ

人につぐたよりたになしおはあらしのりしたなる草の身なれば

兼忠朝臣の母身まかりにければかねたをは故枇杷左大臣の家兼忠母の兄也

にむすめをばささいの宮にさふらはせんどあひさためてふたりな

らまつ枇杷の家になたし送るとてくはへ侍りける

兼忠朝臣の母の乳母

むすひをさしかたみのこたになかりせはなにしのふの草をつまひし

物思ひ侍ける比やんことなきたかさ所よりとはせ給へりければ

よみ人しらす

うれしきもうさもころはひとつにてわかぬものはなみたなりけり

世中の心にかなほぬ事申けるつゝてに

貫 之

おしからてかなしき物は身なりけりうささよるむかにかたをしらねは

思ひのうきにも落涙する心をかくふりり万法唯一心々外無別法の理也

おしからてかなしき物は 世の心にかなほ身はすつるともおしからすなからさすかに世をそむくへさかたもしられは
かなしき身也と也

おもふこと侍けるころ人に遣しける

よみ人しらす

おもひ出るとさうかなしき世中はうらゆく雲のはてをしらねは

たらしらす

おはれどもうしどもいはしかけるふのあるかなさかにはぬるよなれば

哀てふことになくさむ世中をなとかかなしといひてすくらん

はりまのくにたかたといふ所に面白き家もちて侍けるを京に

て母か思ひにて久しうまからてかのたかかたに侍る人にいひつか

はしける

物おもふとゆきても見ねはたか方のあまのときやはくちやしぬらん

延喜御時どきの藏人のもとにそうしもせよとおほしくつはしけ

る

ゆめにたにうれしども見はうつゝにてわひしきよりはなをまさりなん

み つ ね

おもひ出るとさき悲きそ

らゆく雲のはてをしら
ねはさしはんとて也かく
果知ぬ世と思ひ出ればや
るせなく悲也

おはれさもうしども 晴始
のほあるかなきに消ぬ
るといはんとて也哀さも
うさ世も一向にいばし
はかなき世なればとの心
也

哀てふことになくさむ 悲
しき事哀さいふ事に慰
む世なるとか哀さいひ慰
る人もなくて悲とのみに
我は過る身そこの心にや
物おもふとゆきても 母の
裏の物おもふとて行ても
見ねはさそ荒はてげんさ
の心也

ゆめにたにうれしきも 身の遠隔なるへしたとひはかなき夢にたに嬉しきも見はかなしとて現の俗しきには猶まさらん
物をさ也

いそののみみといふ寺に 石

上寺大和也持芥云磯上寺

號三寶蓮寺云々

後撰和歌集卷第十七

大和物語には小野小町と

いふ人むつきに清水にま
うてにけりなこなひなさ
してきくにあやしうたふ
こと法師の聲にてらぎや
うしたらにむもし少時
大徳にやあらんと思ひて
なご有て此歌あり

いはのうへに旅ねを 石上
寺ふはばいはのうへとよ
めるにや只旅ねのさまな
るへし昔の衣は桑門の眼
世若に昔は生ものなれば
世心明也

世をそむく二げの衣は 只
一重きたるとてさなわら
疎くしくすけなじいさ諸共に着てれんこ也戲言なるへし大和物語には此返歌してかいつやうに失にけり云々
あふこの年きり 木實のすくなくなる年年初といへばなけ木こそへてみの敷ふらぬまよめり逢事の中絶たる歌きに歌
ならぬ身となりしづめるさなるへし

雜歌三

いそののみみといふ寺にまうて、日のくれにければ夜あけてまかり
かへらんとてとまりて此寺に遍昭侍りと人のつけ侍ければ物い
ひ心みんとていひ侍ける 小 町

いはのうへに旅ねをすればいとさむしこけのころもをわれにかさなん

かへし

遍昭集ニ山ふじの云云

世をそむく二げの衣はたゝひどへかさねはうどしいさふたりねん

法皇のかへり見給ひけるをのちくは時をどろへありしやうにも

わらすなりにければ里にのみ侍てたてまつらせける
せかるのきみ清和院君

あふこの年きりしぬるなけきには身のかすならぬものにも有ける

女のもとよりわたに聞ゆる事などいひて侍ければ

右大臣

あたるもなさはあらすありなからわか身にはまださゝもならばぬ
たいしらす よみひども

みや人とならまほしきををみなへしのへよりさりのたち出てくる
かしてまる事侍て里にのみ侍けるを忍ひてさうしにまいれりける
おほいさうさみのみなどかをとせぬと恨ければ
おほつけの御氣色にたかへる心也
禁中の房也
右大臣師輔なるへし

大輔

わか身にもあらぬ我身のかなしきはこゝろもことになりやしにけん
人のむすめに名たち侍て よみ人しらす

世の中をしらすなから津の國のなにはたちぬる物に有ける
なき名たち侍けるころ
よどいもにわかぬれさぬとなる物はわふるなみたのさするなりけり

あたるもなさはあらす
心明也
みや人とならまほしきを
宮仕へを望める女の女郎
花の露間に立るを見てよ
めるなるへし我宮人とな
らまほしきを女郎花も同
し心にて立出くるかとの
心にか
わか身にもあらぬ我身 君
の御氣色をかふりて身
を身でもせの身の悲しさ
は心さへ我心ならぬ物と
なりけるやちんちんへ
も音つれ申さしりしと也
世の中をしらす 津の國の
は難波をへて世の好色
のわざもしらすなから名
には立てて歌く心也しら
すなからも返酬をそへた
るへし
よどいもにわかぬれ 心は明なるへし

前坊おはしまさす ささの

東宮也延喜皇子保明親王

延長元年三月廿一日薨

隆 號三文彦太子

うけれもかなしき物を

大輔あまりに歎けは立后

の日いまししきてかく

しければ「俗ねれば今は

さ物を思へさも心に似ぬ

は泪成けりとよみし事大

和物語に有此五文字も我

なからいまししきうけ

れども猶悲しき物を人は

疎むらんさ也

かなしきもさも知にし

前坊の御事はなへて悲き

もさも知にしを誰をい

ましくして分て疎み捨へ

さされば大輔計を思ひ捨

やうもなしさ也

道しらの物ならなくに

ゆくへき道はしれてある

なかくふまよふ人もあり

さ也文をそへて也

しらかしの雪もさぬぬる

雪なとにこそ道もまよ

はれ白がしの雪もさぬぬる

山路を誰ふみまよはん

さ也そなたへの文そさ也

万葉「足引の山路もみ

す自慍の枝もさなくに

雪のふれぬは

いふことのためは物なら

はがらちきりたがへて

後にはささきもささく

し物なと也

前坊おはしまさすなりての比五節の師のもとにつかはしける

舞妓の師也大師小師さて有 大 輔 前坊御乳母 但馬守源朝女

うけれもかなしき物をひたふるにわれをやひとのおもひすつらん

かへし よみ人しらす

かなしきもさもしりにしひとの名をたれをわくとかおもひすつへき

大輔かさうしにあつたの朝臣のものへつかはしける文をもてた

かへたりければつかはしける 大 輔

道しらの物ならなくにわしひきの山ふみまよふ人もありけり

かへし あつたの朝臣

しらかしの雪もさぬぬるわしひきのやまをたれかふみまよふへき

いひちさうてのちこと人につきてとさへて

いふことのためは物ならはがらちきりたがへて後にはささきもささくし物なと也

よみ人しらす

いふことのためは物ならはがらちきりたがへて後にはささきもささくし物なと也

よみ人しらす

いふことのためは物ならはがらちきりたがへて後にはささきもささくし物なと也

よみ人しらす

伊 勢

おもかけをわひみしかすになすときはこのみころしつめられけれ

かしらのしろかりける女を見て

ぬきどめぬかみのすちもてあやしくもへにけるとしのかすをしるかな

題しらす よみ人も

なみかすにあらぬ身なれば佳よしのさしにもよらすなりやはてなん

つさもせすうさことのほおはかるをはやくあらしのかせもふかなん

いと忍ひてかたらひける女のもとにつかはしける文を心にもあら

ておとしたりけるを見つけてつかはしける

しまのくれありにかよふあしたつのふみをくあどは波もけたなな

ひかしおなし所に宮つかへしける人としころいかにうなどいひを

こせ侍ければつかはしける 伊 勢

身はやくなき物のことなりにしをさぬせぬものはこのなりけり

つさもせすうさ 世につさせぬうさ世の葉のおほきを風に落葉するこころあらせまほしき心にや

しまのくれありに 有磯は越中也忍ひてかよはせしを島がくれなきならへてよめり忍ぶ中の文は跡なく消の果よと也

はせて落すはつらしき恨む心をふくめたり

身はやくなき物の 零落の身も猶心をとおとぬ心哀也

おもかけをわひみし 忘り

れぬ人を其時は免有し彼

時は角有しなき其情をあ

ひ見し度くのありさま

になして見る時は心を押

洗めしせらるるも也賊

に幽玄の堺に入すは及ま

しき歌にや

ぬきどめぬかみのすち 物

の数はぬきどめてしるる

へきにと也白髪にて髪を

知心也

なみかすにあらぬ身 並敷

に也人なみくの敷にあ

らぬ身は人にも放ち捨ら

る心なるへし扱なみ敷

を波にそへて岸にちよら

すなきよめり無心也

つさもせすうさ 世につさせぬうさ世の葉のおほきを風に落葉するこころあらせまほしき心にや

しまのくれありに 有磯は越中也忍ひてかよはせしを島がくれなきならへてよめり忍ぶ中の文は跡なく消の果よと也

はせて落すはつらしき恨む心をふくめたり

身はやくなき物の 零落の身も猶心をとおとぬ心哀也

むつまじきいもせの山妹
昔山紀伊也妹と兄にそへ

はらからの中にいかなる事か有けんつねならぬさまに見侍りけ
れは
よみ人しらす

つれならぬ隔心のさま
を雲になそちへてよめり
くちかたは 我と配合は
たかひとけたかき心
るへ心

むつまじきいもせの山の中にさへへたつる雲のはれすもある哉
女のいどくらへかたぐ侍けるを相はなれにけるかこぞ人にむかへ
られぬさまとておとこのつかはしける
わかためにをさにくかひはしたかの人の手にありとさくはまことか
くらなむある所にこひにつかはしためけるに色のいとあしかりけ
れば

わのためになきにくかりし
女を塵に比してなめり心
は明也調音爲家抄には
あかたさはこらへがた
き義也云可難所好
こゑにたはまひはれと 日
ひなほひふりこゑに立
てははれせしるしき也此
絶子の色は我れに御心
めらすはまこるしき也
たきつせのはやがらぬの
早瀬には音あるに早か
あはれ音を和故たはひのひ見すとも音たにきかんと思ふ中に音も聞かて恨む心なるへし
みな人にふみみせけりな人に見文をみせしと聞傳へしがさわりしよな奥はしらす先其しむは淺しと恨む心を隔ぶみする
は心になせたまあり淺きも河の縁語也水無瀬河山城也

こゑにたはまひはねとせるし日なしのいろはわかためらすきなりけ
たきつせのはやがらぬをそちみするみすともををたきかたと思へは
人のもとに文つかはしけるおとこ人に見せけあときつてつかはし
けり
よみ人しらす

たきつせのはやがらぬの
早瀬には音あるに早か
あはれ音を和故たはひのひ見すとも音たにきかんと思ふ中に音も聞かて恨む心なるへし
みな人にふみみせけりな人に見文をみせしと聞傳へしがさわりしよな奥はしらす先其しむは淺しと恨む心を隔ぶみする
は心になせたまあり淺きも河の縁語也水無瀬河山城也

みな人にふみみせけりな人に見文をみせしと聞傳へしがさわりしよな奥はしらす先其しむは淺しと恨む心を隔ぶみする
は心になせたまあり淺きも河の縁語也水無瀬河山城也

大貳藤原興範 大和物語に
は野大貳と有小野好古の
事也檜垣家集には只國守
神拜に出玉ふ道に計有
て難さもなし兩説にや先
此集にては興範なるへし
因幡介正世九男中納言經
主曾孫

つくしのしら河といふ所にすみ侍けるにまへより大貳藤原の興範
朝臣のまかりわたるつるてに水たべんとてうちよりてこひ侍けれ
は水をもて出てよみ侍ける
大和物語は玉のわかくるかみも家集果てかしらの髪も
年ふればわかくるかみもしら川のみつはくむまで老にける哉
かしこに名たかくことこのむ女になん侍ける
しぞくに侍ける女の男に名立てかゝることなんある人にいひさば
けといひ侍ければ
つらゆき

年ふればわかくるかみも
正義云水者派までといひ
て三輪組までこそへたり
三輪組は老人のまりの
るかたち也左右の膝立て
やとしたる貌也下所愚案

かへりくる道にうけさはまどふらんこれになすらふ花なきものを
かすすともたちとたちなんうき名をはことなし草のかひやなからん
たいしらす

此正義誤おほけれと又さるへき所々あれは用之
かしこに名たかく 檜垣の廻の事也大和物語につくしに有けるひかきのこといひけるはいさうありおまきて世なへける
物になんありける清輔後皇子云肥後國遊君云々
しそく 親族也二説子息云々如何
かゝることなんある人に かやうになき名立ちる人を人にいひことはれと云也
かすすともたちとたち 事なし草をかすすとも也心はさやうのことなしとつくるひきはぐさもかやうに立に立たる名はさり
かへされじき也

かへりくる道にうけさはまどふらんこれになすらふ花なきものを
かすすともたちとたちなんうき名をはことなし草のかひやなからん
たいしらす

かへりくる道にうけさは
我も見てこし花を人の見にゆきて一宿せしをこなたにて思ひやる心にや或抄又我もさ迷ひし女に

かへりくる道にうけさはまどふらんこれになすらふ花なきものを
かすすともたちとたちなんうき名をはことなし草のかひやなからん
たいしらす

かへりくる道にうけさは
我も見てこし花を人の見にゆきて一宿せしをこなたにて思ひやる心にや或抄又我もさ迷ひし女に

かへりくる道にうけさはまどふらんこれになすらふ花なきものを
かすすともたちとたちなんうき名をはことなし草のかひやなからん
たいしらす

かへりくる道にうけさは
我も見てこし花を人の見にゆきて一宿せしをこなたにて思ひやる心にや或抄又我もさ迷ひし女に

かへりくる道にうけさはまどふらんこれになすらふ花なきものを
かすすともたちとたちなんうき名をはことなし草のかひやなからん
たいしらす

かへりくる道にうけさは
我も見てこし花を人の見にゆきて一宿せしをこなたにて思ひやる心にや或抄又我もさ迷ひし女に

かへりくる道にうけさはまどふらんこれになすらふ花なきものを
かすすともたちとたちなんうき名をはことなし草のかひやなからん
たいしらす

人の逢後朝を思ひやる心
にや
おほそちをゆきかふ鳥の

女のもとに文つかはしけるを返事もせずしてのちくは文を見も
せてとりなんをくと人のつけられは

よみ人しらす

又も路は鳥のみ行かよひ
て人の踏みぬを文見ぬ事
にそへて也鳥の雲路こそ
人のふみぬ物さいへ人
さして心さす文を見ぬは
情なき事さはいはんさて
也

おほそちをゆきかふ鳥の雲路をう人のふみ見ぬものといふなる
さのすけに侍けるおとこのまかりかよはすなりにければかの男の
あねのもとにうれへをこせて侍ければいと心うき事かなといひつ
かはしたりける返事に

きのくにのなくさの一名草
濱を慰む心にいひかけて
貝ありなと濱の縁によめ
り事のいふかひ有て憐
愍し給へは我心もすこし
慰むと謝したる心也

きのくにのなくさのはまは君なれやことはいふかひありとさへつる
すみ侍ける女宮つかへし侍けるを友たちなりける女おなし車にて
つらゆきか家にまうてきたりけり貫之かめまらうとにあるしせん
とてまかりおりて侍けるほどにかの女をおもひかけて侍ければ忍
ひて車に云入侍ける

此集巻二に「跡みれば心
なくさの濱千鳥とあるも
慰むにうへて也

波にのみぬれつる物をふく風のたよりうれしきあまのつり舟

まらうきにあるし 彼同車の女房を客也これがあるしもてなさんさて内へいれしほとにさ也
波にのみぬれつる物を 此女を思ひて涙にぬれてのみ有しを嬉しきたより同車しておはせじさの心也

こさなしひに 事ありかは
ならず何さなきさま也二
年程外に有し間に若もや
この女の心見は何さなく
かといひやるさの心也

おとこの物にまかりて二とせはかりありてまうてきたりけるをは
とへてのちにことなしひにこと人になたつときしはまこと也と
いへりければ

みどりなるまつほさ過は
女の歌也縁ふる松さそへ
て二年計の程待ほさ過て
男のこすは我も少は心が
はらてはさの心を下葉計

みどりなるまつほさすきはいかてかはした葉はかりも紅葉せさらん
故女四のみこの後のわさせんとてはたいしのすをなん右大臣も
とめ侍るとさへて此すをくるとてくは侍ける

おもひ出のけふりや なき
人の佛になりしこのみを
見給ふに付てもおもひ出
給ふ思ひの煙やまさらん
と也菩提子なれば佛にな
れるこのみさ也

おもひ出のけふりやまさんなき人のほどけになれるこのみ見ばきみ
かへし

道なれるこのみ尋て 菩提
は梵語にて道と翻譯せり
されは道成就の葉さいへ
る心にて此ほたいじを尋出て我に心さし給ふを悦ふに付て音をなくさ也北の方の愁傷にさりあへ給はぬ心は面自にや
いつこにも身をははなれぬ 我に影のつきさへはいつこにも床ごと影に二人なるさ也

道なれるこのみたつねて心さしありと見るにそねをはましける
さためたるめも侍らすひとりぶしをのみすと女どもたちのもとよ
りたはふれて侍ければ

右大臣

よみ人しらす

いつこにも身をははなれぬ

いつこにも身をははなれぬかけしわれはふす床ごとひひとりやはぬる

風霜にいろも心も しゆる
はさきは木なれば我心も
君にかはらねば我に似た
るうへ木ともあるしきは
我木の主なれば也此五文
字習三風霜之難記とい
ふ期詠の詞也

山ふかみあるしに 山深き
所にあるもまき似たる木
は世に見ぬぬ色そまほめ
たるこころ也

大井河うかへる舟の 浮る
に船飼るをそへてなるへ
しうふれの篝火に照され
てなぐら山も名のみくら
くてあきらかななりと也
あすか川我身ひとつの 飛

皇河の瀧瀬の事前註我身
の浮沈になべての世を恨
事とさ也彼大かすの我身一つのさかちにと讀るに同
世の中をいとひかてら 世をいとひかてら志賀に來てもさすかにいとひも果られすともこのうきながらありけりこの心を
長真山をへてよめり志賀に崇福寺とあり是を志賀寺と云 兼宗

前栽のなかにするの木の おひて侍とさしてゆきあさらのみこのも
とより一木こひにつかはしたりければはへてつかはしける

風霜にいろもこころもかはらねばあるしににたるうへ木なりけり
かへし 寛平皇子母京極御息所或伊勢
行明のみこ爲延喜御子

山ふかみあるしににたるうへ木をば見えぬいろとるいふへかりける
大井なる所にて人々酒たうへけるつゐてに
なりひらの朝臣

大井河うかへる舟のかゝり火にをくらのやまも名のみなりけり
たいしらす よみ人も

あすか川我身ひとつのふちせゆへなへての世をもうらみつるかな
思ふ事侍ける比志賀にまうて、

世の中をいとひかてらにこしかともうき身なからの山にろ有ける

ちいば侍ける人のむすめにしのひてかよひ侍けるをさすつけて
勸事也 忍びて又女のもこにきたりし也

かうしせられ侍けるを月日へてかくれわたりければ雨ふりてぬま
かりいて侍らてこもりゐて侍けるを父母さすつけていかはせん
するどてゆるすよしいひて侍ければ

したにのみはひわたりつるあしのぬのうれしき雨にあらはれにけり
人の家にまかりたりけるにやり水に瀧いと面白かりければかへり
てつかはしける
たさつせにたれしら玉をみたりけんひろふとせしに袖そひちにき
法皇よしの、瀧御らんしける御供にて

源昇朝 大納言民部卿
左大臣融二男

法皇御製

いつのまにふり積る 瀧の
白あはの流出るを山の間
より雪のくつれおつるさ
見ゆればかくよめり山の
かひはあはひ也又峽なり
みやの瀧むへも 白玉さち
て瀧の音するを玉のひらきと聞なしてむへも名におひて流けりとよませ給ふ玲瓏玉のこゑ也
菅家御記云昌泰元年十月廿五日宮瀧につきてあそふ立やすらふに日の暮る事もしらす其瀧のありさまめぐり三四町ばかり
たかくさかしかられと音はいと高くはやく流れたる岩につもれる雪のくつれかゝるかこさし水の中の所々に大なる石あり
あひさる事遊きは一丈あまりちかきは七八尺下

みやの瀧むへも名におひて聞えけりおつるしらあはの玉とひへけは
あひさる事遊きは一丈あまりちかきは七八尺下

かからへは人の心も人の
心の今はつらきもなから
へは嬉しき世をみるへけ
れさも露命を堪ましけれ
はかなしきと也

人のもとよりひさしう心ちわつらひてほどくしぬへくなんあり
つるといひて侍ければ
閑院大君宗子朝臣女
もろともにいさとはいはてしての山いかてかひどりこぬんとはせし
月夜にこれかれして

ほとしぬへくはほと
んと死へかりしと也
もろともにいさとは心明

をしなへてみねもたいらになりなくん山のはなくは月もかぐれし
かんづけのみねお

也大和物語にもあり
をしなへてみれも伊勢物語には月もいらしなき有て紀有常か歌とあれさ作物語の儀也
らなをしなへて山もなく平地になれかしとよめると有云々

後撰和歌集卷第十八

雑歌四

かはつを聞て

よみ人しらす

わかやどにあひやどりしてなくかはつよるになればやものはるなしき
心不置なる女なるへし
人々あまたしりて侍ける女のもとに友たちのもとより此比は思ひ
さためたるなめりたのもしき事なりとたはふれをこせて侍ければ
たさ江こく芦かり小舟さし分てたれとかわれはさためん

男のはしめいかに思へるさまにか有けん女のけしきもとけぬをみ
男の詞也 思外なるけしき也
てあやしくおもはぬさまなる事と云侍ければ

みちのくのおふちの駒ものかふにはあれころまされなつくものかは
参朝臣也寛五年右少将右衛門督御少思
少將にて内にさふらひけるとさあひしりたりける女藏人のさうし
につばやなぐいおいかけをやとしをさて遠き所にまかり侍けり此
女のもとより此おいかけををこせてあはれなる事などいひて侍け

わかやどにあひやとり
ひ屋が下に鳴蛙なきいふ
事も有て人の屋にも睡な
くへし我も夜はさびしく
物悲き心より我に相宿り
の蛙も夜になれば物悲き
いさよめる也
思ひさためたるなめり 心
の不定を改めて頼しき事
と戯れし也
たまはこく芦刈小舟 玉江
越前也芦かり小舟はさし
分ての枕詞也おまた知か
たらふ男なれば誰をたれ
ささし分て我は定めんや
うもなじさなるへし
みちのくのおふちの 尾歌
尾のまたら成也但八雲抄
には陸奥故名云々のかふ
は野飼に除なそへて也さぶちの駒も野に放てはなつかぬことく我も君除く故なつきがたしと也
監 胡録 経 老懸

遠き所にまかり 作者部類云源寛平五年右少将延喜元年左遷

いつくさて尋ねきつらん

八雲御抄玉がつら老醫の

事云々善朝臣いま左邊の

身なれば昔の我ならなく

にとよめるなるへし

あさこに見し都路の 久

しう上らさりし事を都の

道絶るさよゆりこあや

まりにとは都へたてし身

なればあやまりでもさひ

こそ人なし也

いつしかさまつちの山の

八雲に眞土山東國駿河に

あり又紀伊にも有云々い

つじかとまつさいひかけ

てまちでもさばればよそ

にきくも也

いせわたる河し袖より 爲

家抄いせさは五十瀬との

けり五十重五十日なといふ

うきぬも也我名を寄たり

ひこめたに見ぬ山路 人目も

る返事に

いつくさてたつねきつらん玉かつらわれはむかしの我ならなくに

たよりにつきて人のくにかたに侍て京に久しうまかりのほらさ

りける時に友たちにつかはしける よみ人しらす

あさこに見し都路のたえぬればことあやまりにとふ人もなし

とをき國に侍ける人を京にのほりたりとさよてあひまつにまうて

さなからとはさりければ

いつしかさまつちの山のさくらはなまらてもよろにきくかかなし

たいしらす

いせわたる河し袖よりなかるればとふにとはれぬ身はうきぬなり

北邊左大臣信盛職第

ひとめたに見えぬやまらにたつ雲をたれすみかまのけふりといふらん

おとこの人にもあまたとへわれやあたなるこゝろあるといへりけ

れは

あすからはふちせにかはるこゝろとはみなかみしもの人もいふゆり

あすからはふちせにかはるこゝろとはみなかみしもの人もいふゆり

あすからはふちせにかはるこゝろとはみなかみしもの人もいふゆり

あすからはふちせにかはるこゝろとはみなかみしもの人もいふゆり

あすからはふちせにかはるこゝろとはみなかみしもの人もいふゆり

あすからはふちせにかはるこゝろとはみなかみしもの人もいふゆり

あすからはふちせにかはるこゝろとはみなかみしもの人もいふゆり

あすからはふちせにかはる

水上下を皆上下の人とい

ひひけて也心はあざらひ

也 古今「飛鳥河瀬は瀬に

なる...

文おこする人ありき 此女

のこゝへ人の文やる事有

き聞て也

あさうのたり 舞案抄云あ

さうのたりとはなぞく

かたりといふ事歎捨還に

はなぞくかたりさかき

たり

いまこんといひしばかりな

まつにけむへし消へし也

舞案抄云さくさめの刀自諸人一同之説しうさめの名よし金吾も被申ければさてこそは腰岐入

道羅綱朝臣説とてむすめ伊豫三位申けるは異説ありさくさめの年といふは早蕨早苗の早の字若草初草の草未通女たなやめ

初瀬めなさいふめの字若草めの年にてまつにきぬへしとよめる歎始平懐の事ならは詞にあさうかたりの心をさきてと

くへしともおほす少つねになき事なればやあとうかたりといふへき愚案照昭袖中抄云さくさめとは能因の歌枕にはし

うさめを云といへり八雲御抄さくさめしうさめをいふ也匡房説之由俊頼抄にありとさきは順和名負謂二老女一爲レ眞刀自二

字者誰也照昭同義下年は或抄若く盛の心也又六十老たる心歎云々然共舞案御説可用

かすならぬ身のみ物うくおもほはてまたるゝまでもなりにけるかな

つねにまうてくどてうるさかりてかくれければつかはしける

よみひとしらす

ありとさく音羽の山のはとさすなにかくるらんなくこそはして

源よしの朝臣從四位下 左近中將

いつくさてたつねきつらん玉かつらわれはむかしの我ならなくに

たよりにつきて人のくにかたに侍て京に久しうまかりのほらさ

りける時に友たちにつかはしける よみ人しらす

あさこに見し都路のたえぬればことあやまりにとふ人もなし

とをき國に侍ける人を京にのほりたりとさよてあひまつにまうて

さなからとはさりければ

いつしかさまつちの山のさくらはなまらてもよろにきくかかなし

たいしらす

いせわたる河し袖よりなかるればとふにとはれぬ身はうきぬなり

北邊左大臣信盛職第

ひとめたに見えぬやまらにたつ雲をたれすみかまのけふりといふらん

おとこの人にもあまたとへわれやあたなるこゝろあるといへりけ

れは

あすからはふちせにかはるこゝろとはみなかみしもの人もいふゆり

あすからはふちせにかはるこゝろとはみなかみしもの人もいふゆり

あすからはふちせにかはるこゝろとはみなかみしもの人もいふゆり

あすからはふちせにかはるこゝろとはみなかみしもの人もいふゆり

あすからはふちせにかはるこゝろとはみなかみしもの人もいふゆり

あすからはふちせにかはるこゝろとはみなかみしもの人もいふゆり

人のむこのいままうてこんといひてまかりにけるか文をこする人

ありとさよて久しうまうてささりければあとうかたりの心をとり

てかくなん申めるといひつかはしける

女のは

いまこんといひしばかりをいのちにてまつにけむへしさくさめのとし

かへし

かすならぬ身のみ物うくおもほはてまたるゝまでもなりにけるかな

つねにまうてくどてうるさかりてかくれければつかはしける

よみひとしらす

ありとさく音羽の山のはとさすなにかくるらんなくこそはして

ありさきく音羽の山の
くる人な郭公にそへて
よめり心は明なるへし
物にこもり 佛神なきに籠
る也

正月をこなひて 修正さ
の勢也 或抄

したうつ 穢也
あしのうらのいさきた 声

の浦八雲御抄云難波也足
の由にはよめれども声也
愚案したうつのきたなけ
なるを足のうらこそへて
いへり心明也

ひとこころたさへてみれば
人の心のうつり易きにた
さへは白露も猶久しと也
世中さいひつる物か 世のはかなき事とも思ひつゝけて世の中さいふ物は是か扱もかけるふのあるかなきかのほこの事哉
さ也

かくはかりわかれの 彼友達の女の男に捨られたるを同じ心になけきて其女の心に成て我ははかなきよめり心は明也
ちりにたつわが名 塵のこころ立心也イ千名に立は色々立名也爲家抄云枕とも哉さは枕は物を知物也或抄云枕は物を知さ
へは我名を立る内裏の人達の心を枕にせば我何事もなき事を知んにと也「知さいへは枕たに」

あふことのかたみの 蓬草
のかたきこそへて形見の
琴のと也此隣の人に懸想
してかりし琴をも形見さ
讓て返す次手に云よる也
なみたのみしる身の 身の
うきと思ふ時は涙こぼる
れば泪はうきを知物也其
外我歎く心ん哀州人のし
るよしと哉さいはんとて
枕も哉さ也枕は物を知
物なれば也

あひにあひて物思ふ 古今
戀五の歌なり
あはれてふこころしるしは
哀さいへはきて其哀のし
るしの別に有さいふにはなけれと又哀なる事を見聞ては哀さいはてはあられわさそ也

物にこもりたるにしりたる人のつほねならへて正月をこなひてい
つるわかつきにいときたなけなるしたうつをおどしたりけるをど
りてつかはすとて

あしのうらのいときたなくもみゆる哉波はよせてもあらはさりけり
たいしらす

ひとこころたさへて見ればしら露のきゆるまもなをひさしかりけり
世の中といひつる物かかけるふのあるかなきかのほどにる有ける

友たちに侍ける女年ひさしくたのみて侍けるおとこにとはれす侍
りければもろともになけきて

かくはかりわかれのやすき世の中につねとたのめるわれうはかなき
つねになき名たち侍ければ 伊 勢

ちりにたつわが名さよめん百敷の人のこころをまくらどもかな
あたなる名たちていひさはかれける比ある男はのきへてあはれい
かにうとどひ侍ければ こそちかむまこ

うきことをしのふるあめのしたにしてわかぬれきぬははせとかはかす
となりなる琴をかりてかへすつゝめてに よみ人しらす

あふことのかたみのこゑのたかければわかなくねども人はさかなん
たいしらす

なみたのみしる身のうさもかたるへくなけくこころをまくらどもかな
物おもひける比 伊 勢

あひにあひて物おもふ比の我袖にやとる月さへぬるゝかはなる
ある所にてすのまへにかれこれ物かたりし侍けるを聞てうちより
女のこゑにてあやしく物のあはれしりかはなるおきなかなといふ
をきいて つらゆ

あはれてふこころしるしはなれともいはてはなこころあらぬものなれ

あだ人の心といひし 此古
こと追て可考

うつろはぬ名になかれ 名
になかれたる河さそへて

也竹の葉は色かへぬ心也
我心のかはらぬに比して
よめり

ふかき思ひそめつこ 戀部
五に五文字ふかく思ひこ
かはりていてたり

こゝろなき身は草木 秋歌
の中に身は草葉にもとあ
りて出たり

身のうさをしければした
正義云はしたは半といふ
心也たこへは昇進もせず
沈みもはてれば苦しく思
ひ捨かたき心なるへしへ
みはへしといふ詞也
雲路をもしらぬ我さへ 此
歌故郷に歸るきて人に別おしむにやけふは鷹にそへて雲路をもしらぬ我さへ鷹さ諸聖にさ也
またさから思ひこき 此歌は思ふ人の少きよりふかく頼めて其親はらからまて懸に尋れさふ人を悦びて其親なきの讀るにや

女どもたちのつねにいひかはしけるを久しう音つれさりければ十
月はかりにあだ人の心といひし言の葉はといふふることはいひつ
かはしたりければ竹のばにかきつけてつかはしける
よみひとしらす

うつろはぬ名になかれたる河竹はいつれの世にか秋をしるへき
題しらす 贈太政大臣時平公

ふかきおもひそめつこといひしここのはいつか秋かせふきてちりぬる
返し 伊 勢

こゝろなき身は草木にもあらなくに秋來る風にうたかはるらん
たいしらす

身のうさをしければしたになりぬへみおもへはむねのこかれのみする
よみ人しらす

雲路をもしらぬ我さへもろこるにけふはのりとりなきかへりぬる
またさから思ひこき色にうめんどやわかひらさきのねをたつぬらん

見ぬもせぬふかき心 口に
て斗心ふかき由かたりて
人よりは思ひまされりと
思へるは如何と也其心の
實も不實も見ぬされはこ
也
御ときのおろし 御時服の
おろしにや正義云御とき
おろしを給はせとは御衣
の古きを給ふ也或本に御
ときのおろしを替たる誤
也云々但四本をもちて見
合するに御ときおろしと
書る本なし仍て御時のを
用ゆ
いせのうみにさしへて 伊
勢の父繼隆伊勢守にて任國に有しほま伊勢もそひわたりし心にや見るめかつくに御服をそへてよめり
あはたの家 いま粟田口といふわたりにや捨芥には神樂岡云々前註
あしひきの山のやまきり 心は明也峰の白雲は立しよらねはさいはんとて也人も立よらねは山莊のかひなき心也山島イ本心得
かたし或抄に身を山島に風して云也云々猶いさ
我ならぬ草葉も物は 我のみ物思ひて袖に露をくかと思へは草葉も露にぬれしは物をおもふにこそき也
ひさこゝろあらしの 人の心のをけなきに泪に目も霧ふたかり思ひしほるゝを寒風をいためる楯にそへてよめり

見ぬもせぬふかき心をかたりてはひとにからぬとおもふものかは
伊勢か亭子院にまいるてさふらひけるに御ときのおろしたまはせ
たりければ
いせのうみに年へてすみしあまなれどかゝるみるめはかつかさりしを
あはたの家にて人につかはしける かねすけの朝臣
あしひきの山のやまきりのかひもなしみねのしら雲たちしよらねは
左大臣の家にてかれこれ題をさくりて歌よみけるに露といふもし
をぬて 忠國密院次官 藤原たゝくに伊與守連承子

我ならぬ草葉もものはおもひけり袖よりほかにをけるしら露
人のもどにつかはしける 伊 勢
ひとこゝろあらしのかせのさむければこのめも見ぬす枝るしほるゝ

後撰 十八 雜四 二百五十五

うきながら人を忘れん

こころあるはうきながら猶

忘れかたければかばるへ

くも我は覺えず也我心

こそさいふに人の心はか

はりたる儀をふくめたり

すのすかり 爲家すの

てし也師念珠のさうそく

也

うたねのこころに きみか

なきつるは越つるにそへ

てなるへし心は明也

かひもなき草の統に 彼す

かりの玉を露に比して何

にさむすしておちさまり

しそさ也彼法師の歌なる

へし

おもひやるかたも 何と心

のやるがたもなぐるし

きは心のまよふときものつねならん也

すむしにたまらぬ 心明也詞書のむらこの内侍或本に灌子かたはらにかけり又或抄にはむしこの内侍と有て由は名御は

實既の詞と云々

こと人をあひかたらふとさへてつかはしける

讀人不知

うきながら人をわすれんことかたみわかこころかはらさうけれ

ある法師の源のひとし参議等の朝臣の家にまかりてすのすがりをおと

しけるをあしたにをくるとて

うたねのこころにたまれるしら玉はきみかをさつる露にやあるらん

返し

かひもなき草のまくらにをく露のなにきなておちとまりけん

たいしらす

思ひやるかたもしられすくるしきはこころまよひのつねにやあるらん

むかしをおもひ出てむらこの内侍につかはしける

左大臣

すむしにをどらぬねこそなけれむかしの秋をおもひやりつゝ

さかほの花につけてつかはしける よみひとしらす

ゆふくれのさひしき物はあさかほのはなをたのめるやとにそ有ける

左大臣のかせ侍けるさうしのおくにかきつけ侍ける

つらゆき

はそやま峯のあらしの風をいたみふることのはをかきそあつむる

たいしらす

世の中をいとひてあまのすむかたもうさめのみころ見ぬわたりけれ

むかしあひしりて侍ける人のうちにさふらひけるもどにつかはし

ける

山河のをとにのみきくもしさを身をはやなから見るよしもかな

人にむすられたりとさく女のもとに遣しける

よみ人しらす

世の中はいかにやいかに風のをどをさくにもいまは物やかなしき

禁中なむかしの身ながらに見まほしき也身をばやなからは河の水尾の早きに我身を早くの世のまよにての心を添たり

世中はいかにやいかにいかにやいかに重詞也世の中ありさまはいかにあるそやま問詞也

ゆふくれのさひしき朝か

ほはあしたのほとはかり

なれば是をたのみては夕

にさひしき也一人のみ

有て伴ふ物もなき事ない

はんさて也

はそやま峯のあらし序

歌也峰の風いたく吹て落

葉をかきあつむる事をそ

へて古き詞を書集参らす

也也柞山は山城也

世の中ないとひて うき世

を厭離して厄となりてす

む所にも猶憂目は有さ也

海士の住所には浮たる和

布のある事にそへてよめ

うちに侍ひ 禁中也

山河のをとにのみ 今ほ里

にのみ住て音にのみきく

禁中なむかしの身ながらに見まほしき也身をばやなからは河の水尾の早きに我身を早くの世のまよにての心を添たり

世中はいかにやいかにいかにやいかに重詞也世の中ありさまはいかにあるそやま問詞也

よのなかはいささも 不知
さもいさや重詞也世の人
の事はしらす我は秋の上
に秋のそひたるやうに思
しき也

たさへ来る露さひと 露に
身をむかしよりたさふれ
はたさへくる也露にひ
さしきさいふよりわか思
ひにもさねんさやすと
也

さうかにのそらにすか た
ねのは畢ぬ也中絶たりと
思へは蜘蛛のいとより心ほ
そしき也

風ふけはたねぬと 風に絶
たりさみゆる蜘蛛のいと又
かきつぐなれば我中絶果まじきそと也
名にたちてふしみの 伏見をふす事に用ひて床に紅葉をしげは也此は金歌
我もおもふ人もわするな 風の吹やまぬやうにたかひに思ひて忘れまじきと也
あしひきの山したさきみ 八雲御抄云云み雲也云々わわのことは如我也山下ひさて鳴鳥も我こそくつれに物おもふらんや
さばめらしき也

かへし
よのなかはいささともいさや風の音は秋にあさうふこころすれ
たいしらす
よみひとも

たさへ来る露とひとしき身にしわれはわかおもひにもさねんとやする
つらかりける男のはらからのもとにつかはしける

さかかののらにすかける糸よりもころほろしやたねぬと思へは
かへし

風ふけはたねぬと見ゆる蜘蛛のいと又かきつめてやむとやはさく
ふしみといふ所にて

名にたちてふしみの里といふ事は紅葉をどこにしげはなりけり
題しらす

我もおもふ人もわするなありう海のうらふくかせのやむとささもなく
山田法師

あしひきの山したさきみなく鳥もわかことたねす物おもふらめや
はおもはし

かきつぐなれば我中絶果まじきそと也
名にたちてふしみの 伏見をふす事に用ひて床に紅葉をしげは也此は金歌
我もおもふ人もわするな 風の吹やまぬやうにたかひに思ひて忘れまじきと也
あしひきの山したさきみ 八雲御抄云云み雲也云々わわのことは如我也山下ひさて鳴鳥も我こそくつれに物おもふらんや
さばめらしき也

神無月のついたちころめのみうかおとこしたるを見つけひひなど
してつとめて

よみ人しらす

いまはとて秋はてられし身なれどもさうたちひとをわやはわする
十月はかりむかしおもしろかりし所なりとて北山のはどりにこれ
かれあろひ侍けるつゐてに

かねすけの朝臣

おもひ出てさつるもしるく紅葉はのいろはむかしにかはらさりけり
おなし心を

坂上是則

峯たかみゆきでも見へき紅葉はをわかるなからもかさしつるかな
しはすばかりにあつまよりまうでさける男のもとより京におひし
りて侍ける女のもとに正月つゐたちまでをどつれす侍りければ
よみ人しらす

まづ人はさねとさけともあら玉のとしのみこゆるあふさかのせさ
る也

降たのみゆきでも 見るよりかさは手なふれて興まざるへく高くのほりてもみるへきを居ながらがさすといひて紅葉の髪
深く所の興ある心を云也

まづ人はさねとさけ 待人は東よりさねるときけともきたりはせてとこのみ逢坂をこねきたりしき也さねは來ぬ也

いまはとてあきはてられ
こと人に思ひかへられし
故わさ果られし身は秋な
そへてよめり霧立人とは
八雲御抄にへたてたる人
なにいふ云々かくいまはこ
あさ果られても其我を隔
てし人をえ我は忘れすこ
也秋果られしさいふより
霧立人さよめり
おもひ出てさつるも しる
くはいらしるく也思ひ出
て來たるしるしいらしる
く紅葉はむかしにかはら
す也也色は昔にかはらす
さいふに所こそむかし
やうにもなけれと含めた
る也

後撰和歌集卷第十九

離別歌

みちのくにへまかりける人に火うちをつかはすとてかきつけ侍け

る
かりくにうちてたく火の煙あらはこゝろさすかをしのへどろおもふ
わひしりて侍ける人のあつまのかたへまかりけるに櫻の花のかた
にぬさをさしてつかはしける
よみひとしらす
あた人のたひけにおれるさくら花あふさかまてはちらすもあらん

とをくまかりける人に饑し侍ける所にて
橘直式部大輔從四位上
長門守長成男

おもひやるこゝろはかりはさはらしをなへたつらん峯のしら雲
しもつけにまかりける女に鏡にうへて遣しける
よみ人しらす

ふたこ山どもにこねねとますかみそこなるかけをたくへてうやる
思ひやる心ばかりは 峰の雲は行客の跡へたつとも我思ひやる心は雲にもさほりなくあるへきをとも
ふたこ山どもにこねね 二子山は八雲にも下野云云なるかけは古今「ます鏡そなるかけにむかひわて此詞を用てこ
もにはゆかれとも我影を鏡にそへやる」と也

おりくにうちてたくひ
爲家抄云さすかは腰刀也
煙を付たりといへり或抄
云心さすか云に色々の
既あれとも只心さしあれ
はぞくれつらんと思へこ
云心を得る也火にも香の
ある物なれば忘香さいふ
也忍へは思ひしたへの心
也兩賦可隨所好
櫻の花のかたに さくらの
形にぬさをさして或は紅
葉の形なとも絹紙なと
なして道祖神の手向にち
らするとそ
あた人のたむけに 化人
旅立ため道祖の手向に
折し櫻花又逢見る迄はち
るなと也運坂を遠にそへて也
思ひやる心ばかりは 峰の雲は行客の跡へたつとも我思ひやる心は雲にもさほりなくあるへきをとも
ふたこ山どもにこねね 二子山は八雲にも下野云云なるかけは古今「ます鏡そなるかけにむかひわて此詞を用てこ
もにはゆかれとも我影を鏡にそへやる」と也

しなのへまかりける人にたきものつかはすとて
す る か

しなのなるあさまの山もゆなればふしのけふりのかひやなからん
とをき所へまかりける友たちにひうちをへてつかはしける
よみ人しらす

このたひも我を忘れ物ならはうち見んたひに思ひ出なん
京に侍ける女をいかなる事か侍けん心うしとてとめ置いていな
はの國へ罷ければ
む す め
うちすてさみかいなはの露の身はさぬはかりありと頼むな

伊勢へまかりける人どくいなんど心もどなかるどきとて旅のてう
どなどどらする物からたうかみにかきでどらする名をば馬とい
ひけるに
人の名也
おしとおもふ心はなくて此たひはゆくむまにむちをおほせつるかな
返し

まなのなるあさまの 駿河
が薫物なれば富士の煙と
よみり淺間の煙名高けれ
は富士かひなしさひげ也
このたひも我を忘れ 此障
をみんたひに我を思ひ出
よといふにうては火出る
事をそへてよみり
うちすてさみかが 君かゆ
かほさいふを稻葉の露と
うけて因幡の國をそへた
り思ひさえて死なぬ斗也
ある物とも思召なと也
さくいなんど心もどなかる
早く伊勢へ行んとほこふ
る事を心もどなかるどき
て鏡はしなからかく讀
さ也
おしとおもふ心はなくて
別をおしと思ふ心はなくてゆく馬に鞭をあててなひやるさ也さくゆかんさ心もどなかるにあたりし心なるへし
きみかてなけれゆく 離行に枯行を添て也君か手ははなれて野かひにはなたるのかなしき也枯野にて馬のまくさもなき
所へはなさる心なそへて也

きみかてをなけれゆく秋の末にしも野かひにはなつむまろかなしき
所へはなさる心なそへて也

いまはとて立かへり行 不
破關のくくに也親のす
む所なればふる里さよむ
なるへし心は明也

身なわくるこさの 一つの
身を二つに分て京にもあ
り此人にもしたひゆく事
はしかたければ影斗をそ
へてやるさ也

物うく覺る まめくし
らすさの心也

はつかりのわれも空 旅行
人の妻なこの歌にや我も
心空に戀しき別なればと
並初鷹のは空なるさいは

ん枕詞にて下に旅にや
いふも鷹の縁なるへし
いとせめて戀しき旅 ほこ
なく都に歸す事に我事を
も思ひて衣をわへして夢
なもてかしの心をへてなるへし古今「いとせめて戀しき時ほうは玉のよるの衣を返してそめる
から交たつ日を 我たつ日なもよそにきく人は夢を待て返すほこのほとなるさも戀しきも思ひ給はし物なと也から交はた

つ日の枕詞也
こひしはこつても 戀
路へゆく人の戀しくは歸
る馬にこつてもすつ
きに我宿になつれよと
也

わすれてはいつあひみんと
いつまては生るさ限りあ
る命ならねはいまわかれ
てはいつみんと思ふらん
せんかたなき事と也
そむかれぬ松のちとせ 舞
葉抄云さよ／＼は友／＼
さいふ事歎こさ歌にもあ
りそむかれぬといふ心も
おほつかなし了簡も及は
す
さも／＼としたふ涙の心
は明なるにや

わかるれさあひもおしまぬ
百敷は伊勢と別る事を何
とも思はぬにわれは何さてかく名残のおこさき也亭子院おりにさ給へは伊勢も退出する事を讀也

おなしいへに久しう侍ける女のみのくくに、おや侍けるとよらひ
にまかりけるに 藤原さよた、

いまはとて立かへりゆくふるさとのふはのせきやに都わするな
とをき所にまかりける人に旅の具つかはしけるか、みのはこのう
らにかきつけてつかはしける 大鑑則善 おほくはのりよし

身をわくることのかたさにます鏡かけはかりをうさみにるへつる
此たひの出たちなん物うく覺るといひければ
よみ人しらす

はつかりのわれもうらなるほどなれば君もものうさたひにやあるらん
あひしりて侍ける女のひとのくに、まかりけるにつかはしける
公忠朝臣

いとせめて戀しき旅のから衣ほどなくかへす人もあらなん
返し
をん

からこるもたつ日をよろにきく人はかへすばかりのはともこひとを
返し
をん

三月はかりにこゝの國へまかりける人にさけたうへけるつるてに
よみひとしらす

こひしはこつてもせんかへるさのかりかねはまつわかやとになけ
る馬にこつてもすつ
きに我宿になつれよと
也
善祐法師伊豆の國になかされ侍ける時
伊勢

わかれてはいつあひみんと思ふらんかきりある世のいのちともなし
題しらす
よみ人しらす

ろひかれぬ松のちとせのほどよりもとも／＼とたにしたはれろせし
返し
とも／＼としたふ涙のうふ水はいかなるいるに見せてゆくらん
正養云寛平九年七月廿五日御位を善宮にゆつり給ふ善宮十三才
亭子院のみかどおりお給ふける秋弘徽殿のかへにかきつけゝる
伊勢

わかるれとあひもおしまぬも／＼しきを見たらんことやなにかかなしき

身ひさつにあらぬばかりを
 おひめさせ給ひてのちは
 寧ろ院の御身一つに百敷
 はあらぬ斗なるを伊勢は
 なへての帝に仕りてもな
 らば百敷を見さらん何に
 さまでわかれをおしむそ
 也
 わかれゆくみちの雲居に
 別る人の雲居はるかに道
 へたへれば我ままる心ま
 て空になる也道の雲居
 にみちのくもをへ雲居と
 いふよりそらになるよ
 めり
 いづて猶かさざり山に 笠
 取山は山城也笠にさりな
 して露けき時は笠を取り
 ければ笠に身をなして露けき旅の道にそはまほしき心也
 かさざりの山と頼し 心は明也
 君かゆくかたにあり 涙河伊勢也いせに有さはいへと先別を思ふ袖に流るる也
 袖ぬれてわかればすこも さたりとを見んとはゆくとなひひそいふに對して着たりと來たりをそて也まなのかは助字也

みかど御覽して
 身ひとつにあらぬばかりををしなへてゆきめくりてもなどか見さらん
 みちのくにへまかりける人に扇てうしてうたゑにかせ侍ける
 よみ人しらす
 わかれゆくみちのくもになり行はとまるこゝろもそらにこるなれ
 ひねゆきの朝臣のむすめみちのくにへくたりけるに
 いかて猶かさざり山に身をなして露けきたびにそはんどうおもふ
 かへし
 かざりの山とたのみしきみをよきてなみたの雨にぬれつゝるゆく
 おどこのいせの國へまかりけるに
 君かゆくかたにありてふなみた川まづは袖にうなかるへらなる
 旅にまかりける人にさうろくつかはすとてうへてつかはしける
 袖ぬれてわかればすこもからこるもゆくとなひひそたりとを見ん
 返し
 わかれちはこゝろもゆかすからこるもされはなみたそささたちける
 旅にまかりける人に扇つかはすとて
 ろへてやるあふきのかせし心あらはわかおもふ人の手をなはなれろ
 友則かむすめのみちのくにへまかりけるにつかはしける
 しけもとのむすめ
 さみをのみしのふの里へゆくものをあひつの山のはるけきやなる
 つくしへまかるとていささよこの命婦に送侍ける
 小野好古朝臣
 どしをへてあひみる人の別路はおしきものころいのちなりけれ
 出羽よりのほりけるにこれかれ馬のはなむけしけるにかはらけど
 りて
 源のわたる渡
 ゆくさきをしらぬなみたのかなしきはたぐめのまへにおつるなりけり
 平のたかどをかいやしき名とりてひとのくにへまかりけるに忘る
 などいへりければたかどをかめのいへる
 わするなどいふになかるゝなみた川うき名をすゝく瀬どもならなん

わかれちはこゝろも 心も
 ゆかすさば心にかはなほ
 儀也心はゆかれと泪は先
 立と也
 そへてやるあふきの わか
 志やる願なれば彼旅行の
 人に隨へと扇に云也
 さみをのみしのふの 信夫
 里會津山奥州也君を忍ぶ
 さそへてかく戀忍ぶに達
 ここのはるけきはなそや
 也也會津を達しそへて也
 さしなへてあひみる 別て
 も命あらは年へて又もあ
 らへければ別のおしきに
 そへていのちこそおしけ
 れと別て年へん心の五も
 じ也
 ゆくさきをしらぬ 行きき
 の遠瀬をしらぬ泪也ゆく
 ささしらぬといふより只目の前にさたり
 わするなさいふに流るるさき名をすゝくとは高遠かいでさき名をすゝくまほしきものなるへし河ささいふに付てよめる也

返し
 わかれちはこゝろもゆかすからこるもされはなみたそささたちける
 旅にまかりける人に扇つかはすとて
 ろへてやるあふきのかせし心あらはわかおもふ人の手をなはなれろ
 友則かむすめのみちのくにへまかりけるにつかはしける
 しけもとのむすめ
 さみをのみしのふの里へゆくものをあひつの山のはるけきやなる
 つくしへまかるとていささよこの命婦に送侍ける
 小野好古朝臣
 どしをへてあひみる人の別路はおしきものころいのちなりけれ
 出羽よりのほりけるにこれかれ馬のはなむけしけるにかはらけど
 りて
 源のわたる渡
 ゆくさきをしらぬなみたのかなしきはたぐめのまへにおつるなりけり
 平のたかどをかいやしき名とりてひとのくにへまかりけるに忘る
 などいへりければたかどをかめのいへる
 わするなどいふになかるゝなみた川うき名をすゝく瀬どもならなん

わがらさまに、かりそめに
といふ事也

我をのみ思ひつるか、敦賀

は越前也思ひつるこそへ

て也歸山も同國也我をの

みおひひつるさならは歸

るい迷す程ながらんこ也

敦賀郡怒我の脱（脱）

君をのみいつはたと思ひ

伊津波多越前也我をのみ

思ひつるかといふなうけ

て君をのみいつはたと遠ん

と思ひこしなれば往來の

道はき遠途にもあるまじ

き物から別うきさの心也

秋ふかくたひゆく人の心

明也彼古今集の「紅葉は

なむかの手前できこみ」

紅葉の錦神のまに／＼なごの心なるべし

みちはなむかき秋ささもにゆくさは九月晦日也心はあきらかなるへし引歌同前

まぢわひてこひしく舟路なごの旅ゆく人に置くにや戀しくなりは尋れゆかんにあさあるかたをゆけとめてゆかんとある

わひしりて侍ける人のあからさまにこしの國へまかりけるにぬさ
手向の辭也
心さすとして
よみ人しらす

我をのみおもひつるかのこゝならはかへるの山はまとはさらまし
返し

君をのみいつはたとおもひこしなればゆきゝのみちははるはからしを

秋旅にまかりける人にぬさを紅葉の枝につけてつかはしける

秋ふかくたひゆく人のたひけにはもみちにまざるぬさはなかりき

西四條の齋宮の九月晦日（伊勢群行也）たり侍りけるともなる人にぬさつかは

すとして

もみちはをぬさどちらしてたひけつ、秋とともはやゆかんとすらん

物へまかりけるひとにつかはしける

大 輔

伊 勢

まぢわひてこひしくならはたつぬへくあどなき水のうへなぢとゆけ

贈太政大臣時平

こんどいひて別るゝたにもあるものをしらぬけさのましてわひしき

返し

まぢはよとわかれしときにはませばわれもなみたにおほくれなまし

はるかすみはかなくたちてわかるともかせよりほかにたれかとへへ

返し

めに見ぬ風にてゝるをたくへつゝやはかすみわかれこりせめ

かひへまかりける人につかはしける

さみの代はつるのこほりにあねてきねさためなきよのうたかひもなく

舟にて物へまかりける人に遣しける

をくれす心にてりてこかるへき波にもどめよふね見ぬすとも

やらは霞の別れこそせめ我た／＼心は見えまじき也

さみの世はつるの郡に、越前甲斐也あえてきれば鶴の千年にあやかりて来よき也不定の世は又の逢瀬（逢瀬）に長命にあへ

さ也

なくれす心にのりて、是も伊勢の歌なるへし舟にてゆく人に我もなくれす心にのりてこかれんこ也心にこひこかるゝ事な

のく／＼なるへし心にのりてこかるゝはふねは見えずとも波の上に来て見よこがるゝ心はいつはりならねはごの心也

舟なくはあまの川まで波

かへし

よみ人しらす

に求め舟見えずとも

舟なくはあまの川までもどめてんこきつしほのなかにさねすは

いふにこたへて舟なくは

ふねにて物へまかりける人

天河までも尋来てんこ也

かねてよりなみたる袖をうちぬらすうかへるふねにのらんとおもへは

下句は心にのりてこがる

返し

せ

へきといふにこたへて

をさへつゝ我は袖にそせきとむる舟こすしほになさしと思へは

やうに心にのりてこきつ

とをさ所にまかるとて女のもとに遣しける

なきえすたにあらはさ也

つらゆき

正義に博望澤河の心と云

羈旅歌

云誤なるへし

わすれしとことむすひて別るればあひ見んまてはおもひみたるな

かれてよりなみたそ なみ

ある人いやしき名とりて遠江の國へまかるとてはつせ川をわたる

たそ袖をうちぬらすは波

とて讀侍ける

よみ人しらす

の打て袖ぬらす心をそへ

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

て也心は明也

とて讀侍ける

よみ人しらす

なまへつゝ我は袖に 我な

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

みたなも舟こす沙になさ

よみ人しらす

しとて袖にをさへてせき

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

さむるさ也

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

わすれしとことむすひて

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

こきつむすひては殊便に結びて契也

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

二人してむすびし紙を獨して

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

此心也

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

羈旅 たひのうた也 左傳云羈旅之臣杜預註云羈奇。旅。客云々

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

いやしき名とりて 是も左遷の時ニヤ

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

はつせ河わたる瀬へやにこるらん世にすみかたさわか身と思へは

名にしおはゝあたにそた

たはれしをを見て

はれさ名におふならは賦

名にしおはゝあたにる思ふたはれ島なみのぬれきぬいく世さぬらん

ならじたはれはせじこ

あつまのかたへまかりけるに過ぬるかたゆかしくおほえけるほど

思ふに波のぬれ衣をいく

に川をわたりにけるに波のたちけるをみて

世きて風流島といはるら

業平朝臣

心と也此集十五朝綱歌に

と

大に同して伊勢物語歌に

と

小異也

と

川をわたりにけるに いせ物

と

かたりさこ也

と

いさしくすきゆくわたの

と

此五文字只にもあるに彌

と

といふ心の詞也玄旨曰波

と

の打よせては歸りくす

と

るをみて我は田舎来めし

と

て行に波はうちやましく

と

かへるさよめり餘情かき

と

りふし

と

みやこまでたごにふり

と

音にふりくるは耳にふりたる心也さて雪の縁也雪蓋難さを行つきたさきそへて雪居道の行着かた

と

き所と也白山は越前さ八雲に在

と

いひつきてさりかたく 其女に語ひ付てあかす立ち離て逗留せし也

と

らんこさなき 止事を得の公事にて立別る也

と

と

と

と

と

山さとの草葉の露はしけのみの
 しがころも真珠抄云露の
 かはりの衣を見えたり露
 葉山里の草露しけるへ
 ければ此きぬを露の代に
 めはてもさよとなり

土佐よりまかり 貫之集に
 延長八年さとのくに下
 きて承平五年に京にのほ
 りてとあり此陶香のさま
 土佐日記をうつされたり
 さ見ゆ日記には廿日の月
 出にけり山の端もなく
 海の中よりそ出くる云云
 ふりさけみれば 古今の仲
 慶也土佐日記には青海
 原ふりさけ云云

みやこにて山のはに 心は明也
 信都にて山の端にみしは
 仲磨の春日なる三笠の山
 にさ故郷を思へる心をうつし
 海より出て
 こは青海原ふりさけみれば
 とよみしを思やりし心とぞ
 水びさのしら糸はへて 瀬を
 へて也或抄云いこの糸は取
 て水にて引物なればつく云也
 日くらしの山路を 日曉の山
 入雲御抄云見つくしつ云云
 このすまは木末也伊勢物語
 に雪いと白くこのすまに降
 たり云云歌
 心は明也

山さとの草葉の露はしけからん
 みのしろころもぬはすともさよ
 土佐よりまかりのはりける
 舟のうちにて見侍けるに山
 のはならて
 月の波のなかよりいつるやう
 にみえければむかし安倍の
 なかまろ
 かもろこしにてふりさけ見
 れはといへる事を思ひやりて
 つらゆき

みやこにて山のはに見し月なれど
 海よりいてうみにこういれ
昌泰元年十月廿日菅原御記前に記す
 法皇宮の瀧といふ所御らんし
 ける御供にて

菅原右大臣聖嗣

水びさのしら糸はへてさるは
 たを旅のころもにたちやかさ
 ねん
 みちまかりけるつめてに日く
 らしの山をまかり侍て
 日くらしの山路をくらみさよ
 更てこのすまことに紅葉て
 らせる

草まくら旅さなりなは 草

枕は旅の枕詞也旅となり
 なはさは旅ならはさ云詞
 也雲は山へに懸れば山邊
 旅に旅宿する事をいふ云な
 り

水もせにうきたる時 水の
 面に紅葉の浮たる時はし
 からがの内外のさいふ
 分ちも見えず皆紅葉なる
 さ也うちさのを隠し題な
 るべし

花さきてみならぬ物は 波
 の花をよめり古今一わた
 つみのかさしにさせる白
 妙の波もてゆへるあはち
 島山 是を本歌なるべし
 あじからの關の山路を 旅
 路の物心細きには行あふ
 人こそにむつまじからん
 ことにはさいみの足柄山な
 ことには一入なるべし

僧正聖賢 元亨釋尊四日釋聖賢讚州人光仁帝之後也延喜二年爲僧正

はつせへまうつとて山大和也のへといふわたりにて讀侍ける

伊勢

くさくら旅となりなは 山のへにしら雲ならぬ我やどらん
 うちとのといふ所を 宇治殿融公別業令平 等院其地也
 水もせにうきたるときは しからみのうちのどのとも見えぬもみちは
 海のはどりにてこれかれせうえうし侍けるつめてに

花さきてみならぬものは わたつ海のかさしにさせるおきつしらなみ
 おつまなる人のもとへまかりける道にさかみのあじからのせきに
 て女の京にまかりのはりけるにあひて

眞靜法師御導師

あじからのせきの山路をゆくひと はしるもしらぬもうどからぬかな
 法皇とをさ所に山ふみし給ひて京にのへり給ふに旅のやどらし給
 ふて御どもにさふらふ道俗に歌よませ給けるに

僧正聖賢

人ことけふくさのみ
けふは都近きわづらひ
毎日こひらるゝ心なるへ
し心は明也

てる月のなかるゝみれば
月の流れ入ゆくまを見れば
は空と海と一つさのみ
ゆれば銀河の出る渡は海
そさ也此歌土佐日記には
大渡さいふ所に舟かへり
とあるほかに讀り

くさまぐら紅葉むしる 草
枕は旅は也紅葉は秋興
の時なるへし今の旅れを
彼秋興の時にせましかは
かぐは旅懐の心なくたか
んやとなるへし

思ふ人ありてかへれば
つじかのつまづつ宵さ
いつじかあはんと妻を思ふ心に鹿の妻待事をいひかけてかの猿丸の歌の詞にて秋を悲しきなとよめり九月はかりと詞書に
あり鹿も鳴へし
草まぐらゆふてばかりの 草枕結手斗の何事なれば露泪かくはあふそと也

人ことけふくさのみ
けふは都近きわづらひ
毎日こひらるゝ心なるへ
し心は明也

てる月のなかるゝ見ればあまの河いつるみなどはうみにるありける
たいしらす
くさまぐら紅葉むしるにかへたらはこゝろをくたくものならましや
京におもふ人侍て遠き所より歸りまうてさける道にとまりて九
月はかりに 讀人不知

おもふ人ありてかへればいつじかのつまづつよひの秋かなしき
草まぐらゆふてばかりのなになれや露もなみたもをさかへりつゝ
宮の漣といふ所に法皇おはしましたりけるにおほせことありて
素性法師

あさ山にまごふ心
よしの興
あさ山にまごふ心をみやたきの漣のしらあはにけちやばてん

あさ山にまごふ心 よしの興
あさ山にまごふ心をみやたきの漣のしらあはにけちやばてん

慶賀 いはひの歌也

女八のみこ 延喜第八の皇

女元良親王の北方にて佐

賴王の母ふりかし紹運孫

佐賴王の系圖ニ在

元良のみこ 陽成院第一皇

子三品兵部卿

よるつ代の霜にも うしろ

やすくは心もさながらの

心也霜にも枯ぬ菊はうつ

ろはんかと思ふ心もさな

さもなきと也元良の親王

の御堅固を比して也万世

の星霜を添て也

雲わくるあまの羽衣 天人

の衣をきては父君の千年

なも見るへしと也天上の

壽命は劫なふるといへは

也玄朝の遺したる裝束を

羽衣とほめて父をも賀したる心也

ことしよりわかかなにそへ 嬉しきを積んさいふに摘をそへて也

かうふりしける 元服をも叙爵をもいへとは是は元服なるへし

後撰和歌集卷第二十

慶賀

女八のみこ元良のみこのために四十賀し侍けるに菊の花をかさし

におりて

藤原伊衡朝臣 參議兵衛督
左中將敏行子

よるつ代の霜にもかれぬしらさくをうしろやすくもかさしつるかな

アツシ 明子中納言敦忠女作者部類 敦忠子時參議

典侍あきらけいこ父の宰相のために賀し侍けるに玄朝法師のもか

ヌケシヤイ 御匣殿別當

らさぬひてつかはしたりければ 典侍あきらけいこ

雲わくるあまのはころもうちさてはさみかちとせにあはさらめやは

題しらす

太政大臣眞信公

ことしよりわかかなにうへて老の世にうれしきことをつまんばかりる

章明三品彈正尹延喜皇子母兼輔女

遊樂也

のりあきららのみこかうふりしける日わろひし侍けるに右大臣かれ

これ歌よませ侍けるに

つらゆき

ことのねも竹も千年の 琴

も笛も千年の聲するはた

れも祝ひ奉る心あるに

よりて其心の物のねにか

よふ也と也逸者其吟樂心

也正義云万歳樂千秋樂等

な千年の聲云也

もとせさいはふな 思人

のため百年も不足也

かうふりし裝着 裝着は女

の裝を着初る事にて男の

元服とおなし心也

おほはらやなしほの 大原

は春日大明神にて藤原の

祖神なれば左大臣の君達

を小盞の山の小松原さよ

めり元服裝着は男女生長

のはしめなればはや木高かれさなるへし

うちよする波の花 藤なみの花さいへは打まかせて波の花を藤をふそらへてよめり千世なまつ松風も春に成て波の花も咲し

と也

さみかため松のちさせも 君かためにいはは松の千年も限有て盡る期あれば神代の天神地神の御壽命の久しかりしたたと

へまほしき也

ことのねも竹もちとせの聲するは人のおもひにかよふなりけり

賀のやうなることし侍ける所にて よみ人しらす

もとせといはふを我はさなからおもふかためはわかすそ有ける

實頼公

左大臣の家のこのをんなこかうふりし裝着侍けるに

家果承平五年十二月左衛門のかうのこのおと女君達云云

つらゆき

おほはらやなしほの山の小松はらはやこたか、れ千世の陰見ん

人のかうふりする所にて藤の花をかさして

よみ人しらす

うちよする波の花こそ咲にけれ千世まつかせや春になるらん

女のもとにつかはしける

さみかため松のちとせもつさぬへしこれよりまさん神のよもかな

年星をこなふ 本命星子
 年人食狼星丑亥年人巨門
 星刀戌年人祿存星卯酉
 年人文曲星辰申年人
 廉貞星巳未年人武曲星午
 年人破軍星未其年のひ
 さをのくまつりをこな
 ふ也

女檀越 檀那さいふとおな
 し昔言故事云僧道稱三施
 主一曰檀那

もよこせにやこそせ 三本
 如此イヤこそを一本如此
 念珠の百八の数をなそら
 へていへるなるへし心は
 明也念珠をかりて年星を
 こなふ女に我此念珠にて年來檀那長久を祈りきたりし其法験を君見さらんやといひ遣也玉は念珠也
 けうそくをなさへて 臆足なをさへてまさせこの心也万代までに花盛を心閑に見て花を押しへておはせこの心也臆足杖なま
 賀の時の具也

御本たてまつる 書籍にや三史五經のたくひなるへし爲家抄或説に御手本云々
 きみかためいはふ心の 聖代の政事を學せ給へは國家安全の本なればなるへしまこに深き忠節の心なるへし大政大臣は師
 二箇一人一儀三形四海一令に見えたり

年星をこなふとて女檀越のもとよりすゝをかりて侍ければくはへ
 てつかはしける

もよこせにやうとせうへていのりくる玉のしるしをさみ見さらめや
 左大臣の家にけうそく心さしをくるとてくはへける

僧都 仁 教

けうろくををさへてまさせへよろつ代にはなのさかりをこころしつかに
 今上師のみことさえし時太政大臣の家にわたりおはしきしてかへ
 らせ給ふ御をくり物に御本たてまつるとて

太政大臣 眞信公

きみかためいはふこころのふかければひしりのみよのあとならへどろ
 御返し

今上 御 製村上天皇天慶九年
 四月廿八即位

をしへをくことたかはすは

教へたかはすはいよく

たかき道なりとも跡まき

はずつとめまなはせ給ふ

へし世帝位の山口しる

き御製なるへし

やま人のこれる新は 新

りつむに年なつむをそへ

て也此歌も前のこまく眞

信公歟

さしのかすつまん 重荷に

小付云事あれは也年高

きうへに猶久しき年なつ

まんとするは彼をもに

こつけするにてありきな

るへし

きみかためうつして 千世

もこもれるは竹の縁也心

は明也

をのゝえのくちんも 千賀

か仙翁の基を見て斧の柄朽し事なるへし君か世のあるかきりうち心みよ也君か代のつきん限なき今はよむまじき事に

をしへをくことたかはすはゆくするの道とをくともあどはまどはし

今上梅つばにはおはしきし時たきこらせたまつり給ひける

やま人のこれるたききはきみかためおほくのとしをつまんとそおもふ

御返し

さしのかすつまんとすなるをもにいはいとこつけをこりもろへなん

冷泉院にや天曆五年七月立太子村上第一

東宮の御前にくれ竹うへさせ給ひけるに

きよた

きみかためうつしてうふるくれ竹にちよもこもれるこちこそすれ

院の殿上にて宮の御かたより基盤いたさせ給ひけるこいしけのふ

たに

をのゝえのくちんもしらす君かよのつきんかきりはうちここつみよ

西四條のみこの家の山にて女四のみこのもとに

右大臣

命婦いさよ

雅子内親王 築山也 勳子内親王延喜皇女

朱雀院也 昌子女王にや

命婦いさよ

をのゝえのくちんもしらす君かよのつきんかきりはうちここつみよ

西四條のみこの家の山にて女四のみこのもとに

右大臣

命婦いさよ

なみたてる松のみどりの
 並立る也此松の枝をいつ
 れさわかす折もて千させ
 をなからへ見んに誰と
 はみん君さこそ見めさな
 るへし雅子と勳子御連枝
 なるを思ひて並立る松の
 みどりの枝分すこ讀給ふ
 なるへし勳子内親王の
 ち雅子内親王も右大臣の
 北方に成給ひて公季公を
 うみ給へり其心はへをこ
 めて此歌を心得侍るへき
 にや枝わかすこいふに心
 を付へし

なみたてる松のみどりの枝わかすおりつちよをたれどかは見ん
 十二月はかりにかうふりするどころにて

いはふことありと^{てい}なるへしけふなれとどしのこなたに春もきにけり
 哀傷歌

あつとしか身まかりけるをまたさかてあつまより馬ををくりて侍
 ければ

またしらぬ人もありけり東路にわれもゆきてうすむへかりける
時平 延喜九年四月薨卅九 小一條にや
 わにのにくにて一條にまかりて 太政大臣眞信公子時
 春の夜の夢のうちにもおもひきやきみなきやとをゆきて見んとは
權中納言左兵衛督

いはふことありとなるへし 年内立春有し十二月なるへしかる元服ふといはふ事有きてにやしはすのけふなれと春のきた
 るさの心を或抄云世上は年の暮なれと榮花の春にあふさ也年のこなたに春の來たるさは年内に榮花にあふ心也云云雅師
 既可然

あつとし 敦敏藏人右少將天曆元年卒清慎公息
 またしらぬ人もあり 東路には此人のうせしをしらす我もゆきてすまはかふる事しうてあらんを也哀深きにや榮花物
 語にもこのうたを書のせたり
 春の夜の夢の中にも 夢にも思はざりし事と也

返し

やと見ればねても心は明
 也此歌作者あるへきに諸
 本如此猶多本可勘
 先帝おはしまさて 醍醐天
 皇延長八年九月廿五日崩
 はかなくて世にふる 山階
 の宮さは醍醐天皇の御廟
 なるへし江次第十一延喜
 帝御陵を後山階といひて
 醍醐寺の北に在云云
 山しなの宮の草木と 彼御
 廟の草木と君なりなは我
 は其草木の葉にぬれんこ
 いひて泪をよめるなるへ
 し君とは定方をいへり
 わかれにしほさをはて 別
 にしほさへは去年時望卒
 去の比一周忌の程なり戀
 じき事限なければ服の果
 をしも果さは思はずも也
 たねもなき花たに 上句は彼文の散うせぬ心なるへし下句のなきかたみのこたにあからんさは雅子内親王の御腹に爲光公
 生給其外子共腹々に子有しかと勳子はうみ給はざりし事歎き給ふなるへし

やと見ればねてもさめても戀しくてゆめうつともわかれさりけり
 先帝おはしまさて世の中思ひ歎てつかはしける

三條右大臣

はかなくて世にふるよりはやましなのみやの草木とならましものを
 返し 兼 輔 朝 臣中納言兼輔

山しなの宮のくさ木と君ならはわれはしつくにぬるはかり也
トキモチノ
 時望朝臣身まかりてのちはての比ちかくなりて人のもとよりい
 かに思ふらんといひをこせたりければ

とさもちの朝臣の妻

わかれにしほさをはてどもおもはえずこひしきことのかさりなければ
勳子内親王右大臣師輔公北方天慶元年十二月薨卅五
 女四のみこの文の侍けるに書付て内侍のかみにをくり侍ける

右大臣

たねもなき花たにちらぬ宿もあるになどかかた見の子たになからん
 去の比一周忌の程なり戀
 じき事限なければ服の果
 をしも果さは思はずも也
 たねもなき花たに 上句は彼文の散うせぬ心なるへし下句のなきかたみのこたにあからんさは雅子内親王の御腹に爲光公
 生給其外子共腹々に子有しかと勳子はうみ給はざりし事歎き給ふなるへし

むすひなきしたねなら共
此御文に勳子のみこの結
ひ置給ひしたれの御子な
られき見れば戀忍ふたれ
さなるも也彼「と」めな
く形見のこたにの歌にて
讀り

こゝら世をさくかなか
巨々等也おほき事也おほ
くの世の事を聞か中にも
わきて此事の悲しきには
泪もなきつくしなんさ也
さく人もあはれてふなる
哀といふなる也心は明也
いたつらにけふや暮なん
けふの元三はむかしに
はられど先帝おほしまさ
ねは物のほへもなくて徒
にけふや暮なんと也先帝
御在世のけふこそまことの元三なりしと也
なくなみたふりにし年の 泪降とそへて新年にも古年にかはらす泪種をぬらすと也
ひさのよのおもひにかなふ 我心のまゝあらは先帝にをくれ申ましき物をさ也イ三條右大臣と作者有

返し

むすひをさしたねならねども見ることにいとゝしのふの草をつむかな
女四のみこの事とふらひ侍とて 伊 勢

返し

こゝら世をさくかなかにもかなしきは人のなみたもつきやしぬらん
よみ人しらす

返し

さく人もあはれてふなるわかれにはいとゝなみたうつさせさりける
先帝おほしまさての又のどしの正月一日にをくり侍ける
三條左大臣

返し

いたつらにけふやくれなんあたらしきはるのはしめはむかしなからに
兼輔朝臣

返し

なくなみたふりにし年の衣手はあたらしきにもかはらさりけり
かさねてつかはしける
ひさのよのおもひにかなふものならばわか身はさみにかくれましやは

返し

御在世のけふこそまことの元三なりしと也
なくなみたふりにし年の 泪降とそへて新年にも古年にかはらす泪種をぬらすと也
ひさのよのおもひにかなふ 我心のまゝあらは先帝にをくれ申ましき物をさ也イ三條右大臣と作者有

れぬ夢にむかしのかへを
色葉集云祐盛云是は常の
人の胸に夢にもかへにも
なと云間也壁に見るさ
ふは深き故有切利天に七
寶宮殿有其壁には人の昔
のありさまこんする末の
身の姿皆うつりてみゆる
也夫は夢にも非ず現にも
あらす此歌は家の壁に書
たる手を見るがかの切利
天の壁に昔の事のうつり
たるに似たるをよせてよ
めり正法念經也 なき
人の事は夢ならでは見ま
しきには是は正しく其人の
手を壁に見ればれぬ夢に
昔のかへを見つるこゝとより下句は心明也
夕くれはねになくをしの 心明也
女郎花かれにし野へに 北方せ給へる事を比して也まつさく花とは只今給へりし萩なるへし獨りみに住身はかゝる萩をも
またて早く見る事よきとましくても見すま也
なき人のかけたに 心はむらりか也

女の身まかりてのちすみ侍ける所のかへにかの侍ける時かきつけ
て侍ける手を見て

兼輔朝臣

ねぬ夢にむかしのかへを見つるよりうつゝに物そかなしけりける
あひじりて侍ける女の身まかりけるをこひ侍けるあひたによふ
けてむしのなきければ 閑院左大臣冬嗣公

夕くれはねになくをしのひとりしてつまこひすなるこゑのかなしき
七月はかりに左大臣の母身まかりける時に思ひに侍けるあひた
ささいの宮より萩の花をおりて給へりければ 太政大臣貞信公

女郎花かれにし野へにすむ人はまつさく花をまたでともみす
なくなりにける人の家にまかりてかへりてのあしたにかしてなる
人につかはしける 伊 勢

なき人のかけたに見えぬやり水のろこはなみたをなかししてろこし
昔のかへを見つるこゝとより下句は心明也
夕くれはねになくをしの 心明也
女郎花かれにし野へに 北方せ給へる事を比して也まつさく花とは只今給へりし萩なるへし獨りみに住身はかゝる萩をも
またて早く見る事よきとましくても見すま也
なき人のかけたに 心はむらりか也

ひざりゆくことこそ 奈良

の双ひては重れ飼也母君
と立双ひぬし事なるへし
母のありし時の事思ひ出
たる心あはれ深くこそ是
も伊勢歌也

すみそめのこきも 鈍色の
さいてにつけても法皇の
御服の悲しみさりかされ
て思ふ心なるへし彼さい
て色色有し故こきも薄き
もこよめるにや

きのふまで干世と 心明也
哀なる歌也

先坊 文彦太子延喜廿一年
三月廿一日薨

あら玉のさしこえくらし
年越來らし也愁に春をも
覺の心有常もなきは尋常ならぬ也初驚さいふもよのつれならぬ音をなく心にていへるなるへし可付心
ねにたてゝなかね日は 心は明也むかしの春を思ひやるさは思ひ出る心なるへし
もろごもにおさぬし 前坊の御在世に諸共におさぬて除し事をいひかけて露ほごもかやの事あらんさは其時思ひかけし事
かばと也亦哀深し

やまごに侍ける母身まかりて後かの國へまかるとて

ひとりゆくことこそうけれふる里のならのならびて見し人もなみ
法皇の御ふくなりける時にひいろのさいでにかきて人にをくり侍
ける 京極御息 所妻多御息所

すみろめのこきもうすきもみる時はかさねてもものうのなしかりける
女四のみこかくれ侍にける時 右 大臣

きのふまで干世とちきりし君をわかしてのやまちにたつぬへきかな
先坊うせ給ひての春太輔につかはしける
先坊のおもひ人あるへし
はるかみの朝臣の女

あら玉の年こえくらしつねもなきはつらくひすのねにうなかるゝ
返し 太輔先坊の御めのと

ねにたてゝなかね日はなしらくひすのむかしのはるをおもひやりつゝ
おなし年の秋 玄上朝臣女玄上延喜十
九年参議

もろごもにおさぬし秋の露ばかりかゝらんものとおもひかけさや
もろごもにおさぬし秋の露ばかりかゝらんものとおもひかけさや
もろごもにおさぬし秋の露ばかりかゝらんものとおもひかけさや
もろごもにおさぬし秋の露ばかりかゝらんものとおもひかけさや

世の中のかなしき事を 悲

しき事を菊さそへて心は
明也

きくにたに露けかる 聞て
も露けかるらん目にみ
し袖の泪を思ひやり給へ
と也是も聞ぬ菊にそへた
り

兼輔朝臣 左中將利基息延
長五年中納言承平三年薨
うへをさしふたはの 心は
明也

紀氏新撰の貫之自序にも
兼輔の逝去のくやみをか
き給へり

きみまさて年は 年へても
泪はつきぬと也

人のさふらひにまうて 知
人なとひきたるに其人う
せしき也はやくは早さく
うせたるさいふよし也
すきにける人を 紅涙を哀傷の思ひにしほるさ也

法正也 仲平公
きよた、か枇杷大臣のいみにこもりて侍けるにつかはしける
藤原守文右馬助有教子

世のなかのかなしき事をさくの上にくしら露をなみたなりける
かへし さまよた、法正兼輔息
つらゆき

きくにたに露けかるらん人の世をめに見し袖をおもひやらなん
兼輔朝臣なくなりてのち土佐の國よりまかりのほりて彼栗田の家
にて

うへをさしふたはの松はありなからさみかちとせのなきそかなしき
其つゐてにかしてなる人

きみまさて年はへぬれと古郷につきせぬものはなみたなりけり
人のとふらひにまうてきたりけるにはやくなくなりにきといひ侍
ければかえての紅葉にかきつけ侍ける

戒仙法師

すきにける人を秋しもとふからに袖はもみちのいろにこそなれ
なくなりて侍ける人のいみにこもりて侍けるに雨のふる日人のと

袖かほく時なかりつる 平生
生なみたの雨ふれば陸を
しも雨さはおもほすき也
ふるさとのきみは 彼人は
いつくにさ人間はいつ
くの霞にとこたへんき也
歸空のゆくまなき歎なる
へし

ひで侍ければ よみ人しらす
袖かほく時なかりつるわか身にはふるを雨をもおもはざりけり
ひとのいみはてゝもとの家にかへりけるに
ふるさとのきみはいつらと人とはいつれのうらのかすみといはまし
敦忠朝臣身まかりて又のどしかの朝臣のを小野なる家みんとて是か
れまかりて物語りし侍けるつゝてに讀侍ける

清 正

敦忠朝臣一時平公息從三位
權中納言天慶六年三月薨
君がいにかたやいつころ
白雲のぬしなき宿といへ
ろあはれふかくや
親のわさ おやを吊法事也
わひ人のたもとに 俗人は
身からいへりかの人もる
ともにまうてんさいひし
故君がうつりせはとよめ
り君所共にまうてたらは
わが藤衣も藤の花と見えむする物をさ也
よるにをる袖たにひちし 餘所に居る袖さへゆるゝ服衣のありさまなればましてみつからの泪には花も何も見えわかれじと
也

君がいにかたやいつころしら雲のぬしなきやと見るかかなしき
親のわさしに寺にまうてきたりけるを聞付て諸共にまうてまし物
をど人のいひければ よみひとしらす
わひ人のたもとに君かうつりせは藤のはなとろいろは見えずし
かへし
よるにをる袖たにひちし藤ころもなみたに花も見ぬするあらまし

ほともなくたれも 心は明
也感吟ふかくすへきうた
なるへし
人をなくなたして 是も前坊
の御事にや

題しらす 伊 勢
ほともなくたれもをくれぬ世なれどもとまるはゆくをかなしとを見る
人をなくなたして限なく戀て思ひ入てねたる夢に見えければ思ひけ
る人にかくなんといひつかはしたりければ
大輔かみし也

大鏡云中將御息所と聞え
しは後は重明の式部卿の
北方にていさやさしくお
はせし前坊を戀悲しみ給
ふ大輔なん夢に見奉ると
きゝてなくり給へる一時
のましくなくさめつらん君
はさは……

大鏡きみはさは云云
時のまもなくさめつらんさめぬまはゆめにたに見ぬわれうかなしき
返し 大 輔
かなしさのなくさむへくもあらざりつ夢のうちにもゆめと見ゆれば
在原のとしはるか身まかりにけるをさゝて

時のまもなくさめつらん
夢のさめぬまは時のま
ても前坊を見奉て戀めつ
らんに見はゆめにたに見
ねは戀むかたもふしき也大鏡には中將御息所さ有同人にや
かなしさのなくさむ 夢中にも夢さ見ゆれば戀むへくもあらざりつるさ也なくさむへくもあらざりつる
そへてよめるなるへし大鏡にも此返歌ありてあらざりき夢のうらにもゆめさ見しかはとあり
かけてたに我身のうへき かく來ん年の春の花を見ましきといふ事をかけても身のうへの事さ此人の思ひきやさはおもふま
しきに思ひの外にもある哉さの心也こんさし春のといふに俊春か名をいへり

伊 勢
かけてたに我身のうへとおもひきやこんとし春の花を見じとは

後撰二十 哀傷
二百八十五

なくこゑにそへて泪は詩
 鶴鳴子九臯聲聞于天さあ
 りされはなくこゑにそへ
 て泪も天にはのほられさ
 おまりにいたく鳴により
 て自然とかく雨とやふる
 らんさの心也鶴のつかひ
 にをくれて悲しむを悲し
 む心ふかきゆへ是も此集
 の哀傷ノ部に入らるゝ事
 名譽なるへし
 なき人のさにもし 心明な
 り
 こふるまにさしの暮なは
 別し比の遠さかるなさへ
 おしみ歎く心なるへし或
 抄云こなたか長壽にて無
 人の別か彌遠く成さ心得
 讀おさめの口傳也云々
 昭陽舎 禁中五舎の一也梨壺云これ也
 公卿皆書名朝臣 此集兼輔朝臣庶明朝臣伊衡朝臣好古朝臣の類也
 枇杷左大臣……いせの海にかつく……たのめつゝあはて……是りの事也

一のかひ侍ける鶴のひとつかなくなりにはせられはとされるかいたく
 なき侍ければ雨のふり侍けるに
 なくこゑにそへて泪はのほらねと雲のうへより雨とふるらん
 つまの身まかりてのとしのしはすのつこもりの日ふることいひ侍
 けるに
 なき人のさにもししかへるとしならはくれゆくけふはうれしからまし
 かへし
 つらゆき
 兼 輔 朝 臣
 こふるまにさしのくれなはなき人のわかれやいとをくなくなりなん
 本云
 天曆五年十月晦日於昭陽舎撰之爲藏人左近少將藤原伊尹別當
 寄人讃岐大椽大中臣能宣 河内椽清原元輔 學生源順 近江少椽紀時
 文御書所預坂上望城等也 謂之梨壺五人 奉行文前注故畧
 一本云
 此集故者公卿皆書名朝臣 古今又此休也枇杷左大臣歌戀部與伊勢贈答
 書業平朝臣名一如此事後代人或推而直之是非書寫之誤此集之本説

作者名字等……四條御息所
 のむすめ俊成卿の本には
 四のみこのむすめさあり
 おほつふねを清輔の本お
 ほつ少將の類
 同歌入兩部 前註
 戸部尙書 民部卿の唐名也
 定家卿康保四年正月十二
 日任民部卿 貞應安貞
 寛喜までに至
 明靜 定家卿貞永元年十一
 月出家し給へる法名也
 融覺 爲家卿康元元年二月
 廿日出家し給へる法名也
 時五十九歳
 万壽按察大納言 行成卿の
 事也行成卿長和四年十一
 月十九日任權大納言
 万壽三年二月七日按察使
 二任せらる謙徳公の孫義
 孝の子也

也不可直改作者名字等家々本多相替皆隨所受之説書之同歌入
 兩部古今哥加入如此事只隨本也
 貞應二年九月二日辛巳爲後代之證本重書寫所傳之家本悉用所
 受庭訓爲傳嫡孫也
 同三日令讀合候畢書入落字畢戸部尙書藤判
 一本云
 天福二年三月二日庚子重以家本終書寫功
 于時額齡七十二眼昏手疼寧成字哉桑門明靜
 同十四日令讀合之書入落字等訖
 此本付屬大夫爲相額齡六十八桑門融覺
 此集謙徳公藏人少將之時奉行之由見于此文万壽按察大納言之筆定
 爲證本歟之由致信尋出彼本一校合二十卷也 無殊珍事近代説々相異
 事等以朱註之
 或抄云此大納言筆眞名に丁年と被書
 さくさめのとし 於此本は全無異他假名七字也
 あどうかたり あどうかたりと被書
 そよみどもなく とを山すりのかり衣兩本如此
 作者 宮少將此本又如此 おほつふね又如此

北野行幸みこしをか おはんこしをかと被書

陽成院のみかどのおほみうた

つくはねの峯よりおつるみな川の戀うつもりて淵と成ける

はるすみのよしなはのあろんのむすめ

さかのへのこれのり

天福二年四月六日校之

世間久云傳之説

題しらすよみ人しらす古今如此

題しらすよみ人も後撰

題よみ人しらす拾遺集如此

亡父命云此説不定事也被書進院之本皆如古今被書今見此

本果而如古今如此事只後人之所稱歟

以家本一定家卿筆令校合了尤可爲證本矣道廣判

以相傳本令校合了尤可爲證本矣民部卿爲尹判

合家本付朱墨之點者也可擬證本乎

後撰集校本栗泉軒自筆奥書寫之

亡父 俊成卿の事を定家卿
のいへるなるへし
道廣 未考
爲尹 權中納言爲秀の男左
中將從四位上猶委

文明六稔九月五日之天以家本令馳蒐毫訖尤可爲證本者也

同校合之羽林良將藤判

自延寶七年霜月十八日至八年庚申二月廿二日註解畢 季吟

拾遺和歌集

拾遺和歌集 二十卷

歌員八雲云千三百五十一首袋草子同之
八雲御抄云長徳比公任卿撰之歟。一説花山法皇御撰云々。後拾遺集序通俊云花
山法皇はさきのふたつの集にいらざるうたをよりひろひて拾遺集と名づけ
給へり云々。是彼世にちかき人の説にや但新古今序の趣は花山院御撰には非
とみゆ。

八雲云古今後撰の歌誤て多しオホ。萬葉の歌におゐてはおほくいる、事あやま
るにあらざる跡歟。一條院の御製をいれず云々
別に拾遺抄といふ物十卷あり。袋草子云拾遺抄歌員五百八十六首。花山院勅撰
云々。一説云集は花山院抄は公任卿云々。八雲同之。此集の歌の跡の事
長明無明抄云拾遺の比より其跡事の外もの近くなりて。ことばよりくまなくあ
らばれずがたすなをなるをよろしとす
委旨百人一首抄云拾遺は又古今とおなじく花實あひかねたる集なり